明治中學會編著

中學全書

言文一致

日本文學史講義

全

明治中學會寄贈本

明治 44.12.23

發行所

東京 明治中學會

日本文學史講義目次

緒言

第一章　上古（歌謠）

第二章　奈良朝

平安朝時代の文學

散文

歌謠

鎌倉時代の文學

散文

歌謠

第三期　鎌倉時代

室町時代の文學史

總說

散文

歌謠

江戸時代の文學

日本文學史講義目次

總說

和混和文

小說

淨瑠璃

俳文の狂文

江戸時代の韻文

和歌

狂歌、俳諧、狂句

結論

日本文學史講義

緒論

我國上下數千年に渡る文學の變遷發達と其盛衰消長の跡とは日本文學史の責として詳述すへく一見明瞭些の遺漏ある可らざるものてある然し乍ら物には其程度のあるものてありて本講義の如き到底此の如き大任を遺憾なく盡し得るものでない著者多年中等程度の學校にありて自ら教鞭を取つたこともあるが生徒の學力と學校の課程との上より考へて滿足に文學史を教授するとの出來得ないとを悟つて居る故にこの講義の上では大体の智識を得せしめて他日研究の基礎を作れば足れりとするのである抑も我國の文學は原を神代無文學の時に發し風なき海上を獨り漕ぎ行く舟の如く殆んど自然の間に獨立經歷しつゝ幾百星霜を經來たるもので上古の如き或は後世文學の爲めに文學史の篇頭に執筆せらるゝまでにて或は文學と云ふ程の價値なきものなるやの疑ひがある位であるか其稍々後世に至り神功皇后の三韓征服となり人心自ら海上颶風に遭ひたる船の如く俄かに平安の夢を破りて裝を掲け襷を結ひ鑿鹹奮發遂に此波浪に勝ちて彼岸に達せしより其氣宇高邁自ら負ひ天孫自負の心更に增大して新經營の發展に忙しくなり剩さへ外邦の文物を輸入するに至つて勢ひ社界の文明を增進し

たり是が爲め文學の上にも著しき進歩を來たして遂に後世文學の餘光を爲すに至つたのである恰も青年の一團が天眞のまゝに振舞ひて一室に快を取れるとき外客の禮容を正して來るに遇ひ忽ち心其盛裝威儀の美なるに惶耻して容ちを正すの氣あるが如きものである又貧弱齒ひを耻ちらるゝの人か俄に富み榮かへて住家を改築し造化を新調し言語を高尚にし出入身体を飾りて自ら快きが如きである只然りされど人心の進歩文學の發達は未だ易々たるものではなかつた天智天武の際に至りて文學上の形見として僅かに古事記、日本書紀の二著作を後世に殘したのであるされば此僅かに得たる二書は文學上非常に高價のものであつて亦歴史として上代の有樣を知るに缺くべからざるものである何となればこの二書は外國文學の輸入後に出でしも其文其記事外國(漢文)の形質を踏まぬからである殊に其中に記載されたる歌謠は純粹なる國文學であつて吾人が上古の面影を伺ひ得る以所の者は全く此に依てゝある然るに茲に怪しむべきは上古無文の國が外國輸入の文學に由て始めて著作の企てを起すに外國の文章に依らずして固有の國語を其儘に寫したることである、こは大に注意すべきとである我國人固有の同化力(或類化力とも云ふ)に由るものと云はねはならぬ我國民は宗教文學に限らず何物にても輸入物を其儘採用することをなさず大抵我者として用ゐるが如く思はれる佛經を見よ儒道を見よ近時の耶教の如きを見よ國人の性來已に然り故に後世漢文の盛んに行はれて上下殆んと和文を

忘れんとしたる時に於ても猶り宣命(せんめい)壽詞の如き皆和文を以て綴られたるにあらずや平安朝に盛なるの歌神樂(かぐらまい)催馬樂(さいばら)朗詠今樣より鎌倉時代の文學にも決して外邦の文學と我國の文學と交替して國文の其跡を斷つには至らなかつたのみならず同化の力非常に盛にして佛語漢語を和文に調和して一種の和漢混合体に佛語の錯りたる散文を生するに至つた室町時代に下つては連歌謠曲の起るありて文學の妙味殆んど馬丁與臺にまで解せられ應仁以後黑暗の文運を見るありしも遂に又江戸時代の隆盛を來たし俳諧發句俳文狂文狂歌淨瑠璃演劇脚本小說の類に至るまで光彩燦然として見るべきものあるに至つたわけである此間數千年或は人物に依て其時代の精神を窺ふべきものもあらう著作物に依て當時文學の有樣を解せらるゝものもあらう當時の學者大抵文學の變遷發達を講究するに左の方法に依つて居る文學上の大勢を引括るめて其重要なる事件の變遷に於ける原因結果を討尋せんとするもの或は前記の人物即ち文學大勢の原動力たる文學者其者の性質行爲を推究して文學の變遷を叙せんとするもの或は重要なる文學上の著作物を研差考推して文學の趨勢を知らんとするものゝ以上である何れを是何れを非と云ふべきにあらねど予は多くの場合後者を取らんとするものである

第一章　上古（歌謠）

前述の如く多くの場合を著作物に依て其時代の文學の精神を伺ふと云ふには上古の題目の下には甚だ其材料の少ないのに苦しむのであるが幸にして古事記日本書紀二書があるので多少其望を達するものが出來る而し此二書は天武天皇の時稗田阿禮と云ふ强記の者の上古の事に能く通じたるを召されて其知れる所を口述せしめて安麻呂に筆記させられたものと其後八年を經て漢文を用ゐて勅撰に成つたのとで前者が即ち古事記後者が書紀であるうれで古事記と日本書紀は文體の上で同じきかと云へは全くさうでない古事記は漢字を用ゐることは用ゐたがうは其音を借りたのみで全くの國語である日本紀の方は是と反對で皆漢文であつて只た歌謠のみが國語を其儘である斯樣な變體の歴史は他に類似がないのであるがうの變体の所が我れの喜ぶ所であつて是が若し全体を漢譯した文体であつたならば遂に上古の文學を揣摩する望みはないのである蓋し上古には只口耳相傳えて文學と云ふものなかりしため同じ時代の人にすら誤謬のない譯に行かねば尚且つ何千年以前の神代の歌謠など殆ど其形影が髣髴されゝば幸なのである又當時の歌謠は其文學上の價値に於ては非常に低いものでこれを今日西洋の文學者にても許させたならば文學とは認めるのを氣遣ふかも知れぬ何んとなれば

其歌謠が餘りの天眞に過きて文學上の修飾が調はぬからであるされど後世枕語の原をなしたのも茲にあるので又比喩を用ゐて其を修飾したるなど是亦後世の文學を豫め產して居たのである況しても其音調を永く引き曲節を求めて詠唱したる所などは全く後世文學の萠芽であるされば何故に修飾が調はぬかと云ふかとなれば比喩とて多くは目前の物を取り枕語と云へども心に浮ぶ只思ひ出のまゝなので平常の會話との差が少ないからである其一例を擧ぐれば

神武東征のとき磯城彦を攻めんとして攻戰の策は充分に定まりたがさて皇軍歴戰疲弊して能く戰ひ得るや否やの心配あつたとき　天皇の御歌に

たゝなめて（相並へて）いなさのやまの（伊那差山の）このまゆも（木間より）いゆきまもらひ（行き守りて）たゝかへは（戰へば）われはやふ（我飢にたり）ぬりめと（塗れよ）しまつどり（島の島）うがひがとも（鵜飼部の部）いますげにこね（今來れよ）（今助けに）

而して古事記の方は神武天皇以來清寧天皇の御世まで千餘年の間の歌謠を八十一首擧げ書記は神武より天智天皇まで千三百餘年の間の歌謠百二十首を收めてをる固より兩書に重出のものも三十種計りある神代の歌謠其他二書に見えたるものも必ず多かつたであらうが今から知るに由がないのであるさあこゝが此二書が文史上のみならず文學史の上に價値ある所以なのである

（散　文）

こゝに散文と云ふのは韻文に對するの名ではない記紀二書に載せられたる漢字の音訓を併べ用ゐて尙ほ我國文の範圍を脫せない文章祝詞のとてある祝詞が一書に集錄せられて後世に傳へ來たのは延喜式で其には七十篇餘りもあるが實際は太古から今少し澤山あつたてあらうこは奈良時代に至つて現はした宣命書と云ふものと音訓の用ゐ方が同じてある今其例を擧げて後ちに說明をなすてあらう

集侍親王諸王百官人等諸。聞食止宣、天皇朝廷爾仕奉留。比禮挂伴男。手襁挂伴男。靫負伴男。劒佩伴男、伴男乃八十伴男乎始氐。官官爾仕奉留人等乃。過犯家牟雜々罪乎今年六月晦之大祓爾祓給比清給事乎諸聞食止宣

以上は六月晦の大祓の祝詞の前置とも云ふべきものてあるが假名書に改めれば集侍れる親王等諸王等諸臣等百官人等諸聞し食せと宣る、天皇朝廷に仕へまつる比禮かくる伴男襁かくる伴男靫負ふ伴男劒佩く伴男、伴男の八十伴男を始めて官官に在まつる人等の過ち犯しけむ雜々の罪を今年の六月の晦の大祓に祓ひ給ひ淸め給ふ事を諸聞し食せと宣るとやうに讀むのであるが之大祓の祝詞は變形てあるなぜなれば祝詞は神に申告するか神意を語りて人々に聞かするかにて前者では其神の廣前に白さくなど必ずあるべき体裁てある後者には又た（神主祝郎たち諸聞めせとある）と必ずあるべきてある然るに六祓日の辭には神に申告するが如く式場の人々に對して言へる如き形式がある

兎に角祝詞が神明に進白するものなれば之れは變体の變体てあらうさて前にも言つた通り祝の詞の數は多いとて一々例を引く事は困難だから大体の事を云ふの他はない祝詞は神明に進告して冥々の保護を祈願するものてあるから自ら祝辭の謹嚴なると同情を促さんとし誠意を表せんとする所から又た讀誦上に一種の佳調を具へてをる且つ對句、盤語、其他修辭上の用意は却つて前節に陳べた歌謠よりは文學上價値あるものかも知れぬ

第二章　奈良朝

茲に奈良朝と云ふのは持統天皇の朝より桓武天皇の平安遷都まで凡九十年間て歷史上にて普通に云ふ奈良朝とは二代の差と二十年ほど前に遡りて稱するとの違がある、して此時我の文學は上古の題目の下に述べし如き不熟粗笨なるものてない、彼の大化の改新以來漢土の文學の盛に我國に輸入せられ遣唐使及び留學生の派遣は代々絕ゆることなく彼國最新の文物續々齎し歸らるゝに至つて我國人思想上の變化は殊に甚しくなつた從て漢風摸倣の時代となり學校も起り著作も始まつた古事記が現はれ日本書紀作られ次て續日本紀日本後紀續日本後紀文德實錄三代實錄などの國史も現はれた此時代は後世から八釜敗云はるゝだけに文運、中々隆盛てあつた寺佛の銘に漢文を用ゐる者さへ出た

漢文の國史は已に日本紀に見た所であるが斯の如く本邦人の手に漢文の著作あるに至つたは餘程漢文が隆興した影響と云はねばなるまい

一方に於て漢文は斯くまで隆盛の勢で本邦に流行したが外國の文字によりて國人の思想を遺憾なく陳べんには到底困難を免れない宜なるかな漢字の音訓を借りて我國語を寫す古事記、祝詞、宣命の文の如きものが現はれた是が萬葉假名の出來る源で片假名平假名も其影響として後々に至つて現はれたのである

此時代の文學上の產物には文學史上の材料が隨分澤山殘つてをる古事記風土記は申すまでもなく宣命歌謠殊に萬葉集の如き片假名の製作の如き皆後世の文學上に多大の貢献をなしてをる

古事記　古事記のとは前にも述たから濟んで居るやうに思はれては困る前のは上古の歌謠の事のみを陳べたので古事記其者は此時代の作出品で今は其全体の上を講するのである扨古事記は我國史の最も古るき者であつて天武天皇の時作られたとは已に前に述たから分つてをらう其文体が日本書記などより著しく異つて居るので書記は國語と皆な漢譯して修飾に勤めたと多けれど之は漢文脈の間へ字音を以て我國語を寫し入れ、なるべく傳說の儘を記さんと勤めたから文体特異の者となつてをる古事記の著者太安麻呂は古事記の序文をも作つたが、實にこれほど漢文の達者であつたになぜ斯

かる異樣な文体を用ゐたかと疑ふて見ると其當時も已に古事の傳說名稱の失はんとを思へて苦心した跡が見える吾人今に於て上古の言語に接するの想をなし古代思想の程度如何なりしかを知るを得るは全く此一書の賜なり古事記は三卷ありて上卷には安萬侯の漢文の序がある記事は神代の事のみであるが三卷中尤も光彩に富むものである何となれば多く諸神の會話を交へ歌謠を載せたからである

中卷は神武天皇から應神天皇まで下卷は仁德天皇より推古天皇までの事柄を記載してをる今各々の卷について其例一つつゝを擧げやう

乃參上天時。山川悉動。國土皆震。爾天照大御神聞驚而。詔我那勢命之上來由者。必不善心。欲奪我國耳。即解御髮纏御美豆羅而。乃於左右御美豆羅。亦於御髮亦於左右御手。各纏持八尺勾璁之五百津之美須麻流之珠而。會毘良迦者負千入之靫。附五百入之靫。亦所取佩伊都之竹鞆而。弓腹振立而。堅庭者。於向股踏那豆美。如沫雪蹶散。向伊都之建男踏建而。待云々　これは天照大御神の素神を待ち受け給ときの有樣を記るせる條なり

於是大雀命無字遲能和紀郎子二柱。讓天下之間。海人貢大贄。爾兄辭命貢於弟。弟辭命貢於兄之間。既經多日。如此相讓非一二時。故海人既疲往還而

泣也。故諺曰。海人乎因二已物一而泣也然宇遲和紀郎子者、早崩故大雀命治二天下一也　こは中卷の仁德兄弟の皇位を讓り合ふの一節である

此天皇求二其父、王市邊王之御骨一時在二淡海國一賤老媼參出白。王子御骨所埋者。專吾能知。亦以二其御齒一可レ知。爾起レ民。堀レ土。求二其御骨一。即獲二其御骨一而。於二其蚊屋野之東山一。作二御陵一葬。　こは顯宗天皇の一節である

さうして歌謠を除いた古事記が文學上の價値と云ふは何の當りかと云へは多くは其神話にあるのである神話は何處の國のものでも嘸誕のものが多いが古事記のも全く今日の理論からは有り得へからざるとを述へて居るから此當りは歷史の上よりは却つて文學上に價があるのである例へば伊邪那岐命が黃泉國は其妃伊邪那美命を訪ふた所天之石屋に天照大神の隱られし所彦火出見の命の海神の國に遊んで其妃を得たまひし所などまた其他にも隨分多いのである

次は風土記であるが之は元明天皇のとき諸國に命じて其國の產物地理古代よりの傳說舊聞異事を記るして奉らしめられたもので日は地誌の一種であるが今は多くは佚して僅かに播磨、常陸、出雲の三國の者を傳ふるに過ぎぬ中にも播磨常陸のものは全く價せるものでなくて其編成も年代も分らぬが出雲風土記は天平五年の編纂であるとが分る風土記も亦地名などに就き故老の傳へたる舊聞異事

を記せる所が古事記の神話にも似て稍文學上の價値あるわけで其漢文で作られて日本紀に近き所などで當時漢文が如何なる程度まで國中に行はれたか其又往々必要の場合に和文を交へた所も其當時を推測するの材料である

散文で其次に云ふべきは宣命でこは續日本紀に宣命文体の儘に載せられて居るので其れを悉皆拔き取つて編輯した書物もあるが其他尙ほ數多くありたらんも日本紀などは漢文に譯して其當時の者を見るに由がない全体宣命は天皇の詔及ひ命令を國文に(其ことばの儘に文字に記入せしもの)綴りしものにて後の詔勅語である明治の世の敎育勅語も其當時であつたならば宣命となつたであらう此後ち詔(みことのり)と宣命と別者となつたが其譯は年代を經過するに從て人文は大に發達せしに上古を尙ぶ否古風を失ふを惜む當時の人物は儀式の中のみにても古儀を失はざらんとを勤めて往復の文書まで漢樣になりたる後も御即位大嘗會立后立太子の如き儀式には皆宣命を用ゐ宣命使を以て群臣に談し聞かせ平常の事物は世の進運につれて支那樣に代りゆきてかくの如くなつたのであるさうして續日本紀の宣命文の數は六十二篇で文武天皇の即位の宣命などが一番古いので文章も亦立派である聖武の皇后藤原夫人立后の宣命と二つは神田の國語傳習所に發行した古文抄の中に見えて居つたと思ふ之れには祝詞やら宣命やら風土記やら種々の古文が載せてあつて振假名がつけてあるから初

學の者が讀むには都合がよからうと思ふ例に一文位ひ引いてもつまらぬから引かぬ

宣命の書き方は祝詞と同しく豆爾乎波をば傍へ寄せて小さく書いてある所謂宣命書と云ふものである併し乍ら甚だ一定しないので筆者の勝手に大きく書くべき字の細書せられたり細書すべき字の大きく書かれたりしてをる本居宣長翁の歴朝詔詞解は續日本紀中の宣命六十二篇に就いて字句の訂正から和訓を施やら宣命の字義やら儀式やら懇分丁寧に出來て居るから一度眼を通せば此上はないが其れは勝手である宣命についで氏文と云ふものを捨てる譯に行かぬが前に云ふた古抄の中にも載せられてある高橋氏の氏文で今は大方一文のみであらう之は高橋家一家の爲めに祖先の功勞を陳べて安墨氏の非を訴へたものである

（歌謡）

奈良朝の文字は自然に放辨せられて千餘年間見る蔭もなかりし其以前の文學とは打つて變りて異常なる發達を遂げた就中和歌は一時に發達の頂きに到り空前絶後とも云ふべき盛況を呈した殊に長歌は當時の特長で和歌の黄金時代の名は此上に下すべきものであらうなせ奈良朝の歌謡が此くの如く俄かに發達したかと云ふと之は支那文學の影響であらうと思ふ支那は當時唐の世で詩には白樂天韓愈其他の名人輩出し文運の隆盛社界の進歩實に珍らしい程であつたして我が入唐の使臣留學生は親

しく此盛況を目視してをる日本人の氣象としてどうして反動力を起さずにをられやう實際に支那學で支那に及ばねば我國の者で彼れを凌がうとするのは尤なことである阿部の仲麿も天の原の歌では彼國人を歎賞せしめた一人だして見ると奈良奠都も支那の盛況を見た反動より起り當時の美術も同じくさうであると云へるが只見たゞけでさう易く此隆盛な國運が作れるものでないよく考へて見ると我國人は其以前に於ても漢學と佛教上との二者のために永年其素養をなしつゝあつたのであるされど漢學は只模倣の時代をして永く〳〵彼れに匹敵するとは出來なかつた只此和歌は壯嚴高妙の域に達し後世に及ぶ能はざるまでに至つたのである而して當時の和歌を集めしもので世に知られたるは類聚林と萬葉集との二つであるが類聚林は今に傳はつて居ない萬葉の一書、實は當時代の花にして卷帙浩瀚殆んど遠ふ所なきは、識者の認むる所である、萬葉は仁德天皇の朝より淳仁天皇の朝に至るまで凡四百廿間の和歌を集めしものと舒明天皇以前の歌只二首のみなれば、舒明以後の和歌を集めしものと見て差支なしであらう、作者には至尊より人民に至るまで、所有階級の者を網羅したれば、當時の和歌が如何に一般にまで嗜好せられしかを知ることが出來る而して卷數二十、歌數四千四百九十六首で三體の別がある、長歌、短歌、旋頭歌而して此書の書式を春登上人は萬葉用字格を著はして頗にわかち、天野信景の鹽尻には四種にわかつてある各左に示すであらう

萬葉用字格八類（欽學全集）

- 音
  - 正音　阿伊
  - 略音　阿印
- 訓
  - 正訓　天地
  - 一種の正訓
  - 二字にかける例
  - 二字にかくべきを一字に書たる例
  - 漢文に書きたる例
  - 古訓
  - 字書にあはさる訓
  - 肖文
- 義
  - 義訓
  - 一種の義訓
- 略
  - 略訓　足し也　起おこす也　立たてる也

大地　靜競　清明　海　蜻　所知行　將裝飾　不知　服　鬘　掠　建起也　已健也　小驟　隱藏　飛鳥　東方

約訓　荒磯をありそ　指擧をさゝげ

借訓　蟻を在　稻を寢

戲書　出て山上復有山　横雲に東細布

萬葉四種書式（欽學全集）

一　眞假字　心を許己呂　郭公を保登等毗須

二
- 通正字　春霞　秋風
- 別の正わ字　霍公　茅子

三
- 全假字　鶴鳴　垣津旗
- 半假字　乳鳥　打背貝

四
- 全義訓　春鳥　三五夜
- 半義訓　金風　朝鳥

戲書　十六　赤頭鷄

近江の荒都を過ぎし時の歌

玉手襷畝傍の山の、橿原の、ひじりの御世ゆ、あれましゝ、神のことごと、つがの木の弥つぎつぎ

に、天の下、しろしめしゝを、空にみつ、大和を置きて、青によし、奈良やまをこえ、いかさまに、念ほしめせか、天さかる、ひなにはあれど、石走の、近江の國の、さゝ浪の、大津の宮に、天の下、しろしめしけん、天皇の、神のみことの、大宮は、此處ときけども、大殿は、こゝといへども、春草のしげく生ひたる、霞立つ、春日のきれる、百しきの、大宮どころ、見れば悲しも、

反歌

さゝ浪の、滋賀のからさき、さきくあれど
おほみや人の、舟まちかねつ、

さゝなみの、しがのおほわだ、よどむとも
むかしの人に、またも逢はめやも、

不盡山を望む歌　山部赤人

天地の別れし中ゆ、神さびて、高く貴とき駿河なる、富士の高根を、天のはら、振りさけ見れば、わたる日の、陰もかくろひ、照る月の、光も見えず、白雲も、行きはゞかり、時じくぞ、雪はふりける、語りつぎ、いひつぎ行かん、富士のたかねは、

反歌

田子の浦ゆ、打ち出てゝ見れば、真白にぞ、
ふじのたかねに、雪は降りける

好去好來歌　山上憶良

神代より、いひつてけらく、そらみつ、倭國は、皇神の、いつくしき國、言靈の、幸はふ國と、語りつぎ、言ひつがひけり、今の世の人もことごと目前に、見たり知りたり、人さはに滿ちてはあれど、高光る、日の御朝には、神ながら、愛の盛りに、天下奏したまひし家の子と、撰びたまひて敕旨、いたゞきもちて、唐の、遠き境に、使はさし、罷りいませ海原の、邊にも奥にも、神集り、うしはぎいます、もろ〳〵の、大御神たち、船の舳に導きまをし、天地の大御神等倭の國、おほくにみたま、久堅の、天の空ゆ、天がけり、見渡したまひ、事了へて、還らん日には、又更に、大御神たち、船のへに、御手打かけて、墨繩を、延えたるごとくあてかをし、智可の岫より、大伴の、御津の、濱びに、たゝ泊てにみ船はてむつゝみなく、幸きく、いましてはやかへりませ

大伴の、御津の松原かきはきて

子を思ふ歌　　われ立待たむ、はや歸りませ

しろがねも、こがねも玉も、なにせんに　　同　八

まされるたから、子にしかめやも

尙ほ旅人、家持等の歌は集中多きとなれど、之を避けて省ぶく、以上の歌て見ても萬葉時代の歌は長歌に長じて居ることが解るであらう、併し人麿と赤人とては、兩人各々長所が異るので、人麿は長歌赤人は短歌と學者仲間に定說があるのである、それで今一言したいのは、反歌のことである、此反歌は三十一字歌（即短歌）と同じ形てあるから、多く誤て、短歌と同じやうに思ふ人があるが、全く違ふので、こは、荀子と云ふ書の註に「反辭は反覆叙說の辭である」とあるのから出たので、長歌の終りに必ず反歌の屬くのは長歌の意を反覆して叙べるに過ぎないのである、次に萬葉集が奈良朝時代の文學を代表する唯一の絕品なると同時に後世歌謠の、師表であるとも、疑ひないが只一つ言はねばならぬのは、表中皆な無垢の黃金のみならずして、精粗醇雅のぶち交せであることである、試みに萬葉を取つて談し行けば、合點することだか、隨分馬鹿げた歌もあるのである、今之を紀記二書に見ねた歌謠に比すれば全然趣致の異つて居ることが判る、なぜ全く異點を生じたかと云へば歌境の

進んだのみでない、專ら口に謠ふのと、文學に現はして眼に見るものとなつたとの上に自然の差が生じて居るのである、之れは止むを得ないことで、近世に至つては、題を取つて數日苦吟の末僅に歌となすに、足るものを作ることになつたが、是亦萬葉時代と異つて居る、上古の國人は驚くべき詠詩の天性を有して、生死艱難の際、醒眠不意の時も、能く躊躇なく歌を謠つたものであるが、眼に見る歌となつては、反覆翫味の時間がある代りに即吟の妙は忘れられ始めたのであるけれど、之は歌道の進歩であつて、文學の中に數へらるゝに至つたのは全く、其爲めなのである、しかし乍ら改竄數回沈思數日、古歌を切取するなど今日の人の歌は全くつまらぬものが多い、かくてはまた、萬葉などの歌には到底立ち及ばぬので、とに角蘊蓄した思想の凝團が、解けては洩れ、流れては溢れて成つたものでなければ、一向價値はないのてある、萬葉時代の歌人が、盛唐の文學に接觸して得たる題及び材料は知らず〳〵の間に我文學思想を養ひ上げて遂に此の如き、黃金時代を作り出だしたので、我文學の好運實に此上もないことである

平安朝時代の文學

桓武天皇の延曆十三年、都を今の京都に奠めて以來、後鳥羽天皇の文治二年に、源頼朝が幕府を鎌倉に開きしまで、凡四百年間は所謂平安朝時代である、

奈良朝の末に、假名の發明あり、行文の便開けてより、我國語を寫すに自由を得たる國民は俄に文學の諸方面を開拓して、此朝の始めより、或は物語、草紙、或は歴史物語など諸種の産物を文學史上に殘すに至つた、これ始んど我國文學の基礎を定めたもので、中には後世の模範となるべき立派なものが多いので、文學史上時代としての重要な地位に居る、而して艶麗華美の文は雄渾壯大の風格と代り、奈良朝の文字と大に變遷してをる、その源因は時代精神の變移に依るも、假名の用法大に開らけ、女流の文學多きに居るの致す所でもあらうと思はれる、

この時代は獨り文學が纖弱に流れたのみでなく、太平の久しき上流の社會は、皆な奢侈を事として軟骨と成り、雄邁剛毅の人物はないのであつた、かの藤原氏が榮華を極むるに當ては、公卿社會は宴樂歌舞を能事とし、奢侈と誇榮とを善事と心得て他に心を移すの外境を持たなかつたため、詩歌管絃は彼等を感化し、男女の關係は愈親密となり、其贈答の和歌相傳へられて名答と誇られた有樣樣であつた風俗の乾壞既に此の如きである、其時代の思想が文學となつて、如上の文學が生まれるのは當然である

當代の文學が、奈良朝の雄渾壯大の風格を失したのは、其時代精神の爲めであるとは分つたが、其艶麗多趣の如きは、漢文の影響によると云はねばならぬ、當時の女流が男子にも劣らず、漢土の文學に通じたるとは、驚くべきもので、之を腦裏に蘊蓄して比較的容易な國文で發現したから、大に男子を凌いで、旗幟を千載の文學史上に樹たて所以で、又男子の女子に一等を輸した所以は、假名書の文を屑くせず、往復の文書まで、漢文を用ゐたとなとが重なる源因であらう、

平假名の製作は、一時の功績になつたものでなく、所謂變體假名の如きものが奈良朝の末より用ゐられつゝあつたのを、僧空海の爲めに成功し、いろは歌を以て世に發表せられたので、天下を鞏動して一時に弘まり、漢文を知らぬものも、能くその思想を寫し出すことを得るに至つて、前說の有樣を呈した次第である、平假名の製作其功大なると此の如きである、

散文

物語、日記、草紙、歴史物語の類の諸種の文學が一時に勃興して、空前の光彩を文學史上に放つたのは、實に此時代の誇負すべき所で、國文學の精華もこゝに至つて、絶後の恐れがあつた、其艶麗優美、千紫萬紅の譬に洩れず、

文字の盛なるとき、風俗の壞敗するは實に悲むべきとで、此時代の歴史が厭惡すべきと同時に、其時代の文學の産物には、源氏物語の如き、枕草紙の如き、思想豐富に筆致巧妙なるものが多いのは喜ばねばならぬ次第である、此等の二書は此時代の傑作として尊ぶべきのみでない、實に我文學史

上の傑作で、又外邦のものに比して多く遜色がない。

伊勢物語　是れ竹取の物語と共に、此時代の最も古るきものと稱せらるゝ所であるが、歌を骨子として、詞書樣の体裁で、其前に短簡な文章を加へてある、故に相互の文に連絡なく、極めて短かき物語の集合である、作者は在原業平であると云へど確かならず、文章は典雅で遒健で餘程の腕前の者の作と見へる、抑も物語とは、上古よりの傳說を人々に語り聞かす意味であるが、多少變遷して潤飾のために事實を外づれる事抔も生じたが、遂には專ら作者の想像になるものか多くなつた、歷史上の事實を根據として書くものも、全く無くなつたではない、之が歷史物語で前者は今の小說の樣なものである、此定規に依ると多少伊勢などは變りものであるとが分る、其文中の一二節を示さう、

むかし男ありけり、その男身を用なきものにおもひなして、都にはあらで、東の方に住むべきところ求めむとて、ゆきけり、もとより友とする人、ひとりふたりしてゆきけり、三河國八橋といふ處にいたりぬ、そこを八橋といふは、水のくもでにながれわかれて、橋を八つ渡せるによりてなむ八橋とはいひける、その澤のほとりの木のかげにおり居て、かれいひ喰ひけり、その澤にかきつばたいとおもしろく咲きたりけり、それを見てある人のいはく、かきつばたといふいつ文字を句のかみにすゑて、旅のこゝろを詠めといひければ、

唐ころも衣つゝ馴れにし妻しあれば
はるゝ來ぬる旅をしぞ思ふ

とよめりければ、みな人、かれ飯のうゑに涙落して、ほとびにけり、

ゆきゝて、駿河國うつの山に至りぬ、わが入らひとする道は、いと暗う、つたかへで、葉しげりて物心細く、すゞろなるめを見ることゝ思ふに、修業者あひたり、かゝる道にはいかでかはしましつるといふに、見れは見し人なりけり、みやこに、其人のもとにとて、文をかきつく

駿河なる、うつの山邊に、うつゝにも
夢にも人にあはぬなりけり、

富士の山を見れば、五月のつごもりに、雪いとしろうふれり、

時しらぬ山はふじのねいつとてか
かのこまたらに、雪のふるらん、

その山は、こゝにたとへば、比叡の山を、二十ばかり重ね上げたらんかたちして、なりは、しほじりのやうになんありける、なほゆきゝて、武藏國と下總國との中に、いと大きなる河あり、それを隅田川といふ、うの川のほとりに群れ居て、思ひやれば、かぎりなく遠くも來にけるかなとゆひあへるに

渡守はや船にのれ、日も暮れなんとすといふに、乗りて渡らむとするにみな、人ものわびしくて、都に思ふ人なきにしもあらず、さるをりしも白き鳥の、嘴と足と赤きが、しぎの大きさなる水の上にあそびつゝ、魚を食ふ、都には見へぬ鳥なり、わたし守に問ひければ、これなん都鳥といふをきゝて、

名にしおはゞ いざこと問はむ 都鳥
わが思ふ人は、ありやなしやと、

よゝりければ、舟こぞりて泣きにけり、

竹取物語、物語の中の最もふるきものにて、其しくみは、竹取の翁と云ふもの、毎日山に取りつゝ使つて居たが、或日元光る竹を見付け、其中を見れば、一人の兒あり、大きさ一寸ばかりなるを、携へ歸へりて育てたが、絶世の美人となつた、之に多くの、皇子上達部が、懸想して、互に其心を得やうと競爭したが、遂には女子のために愚弄されて、世の物笑となつた、之が時の帝に聞えて、帝の心を腦やまし、帝もいかで之を手に入れんと、苦心せられたが、女は月球に去つて、不死の藥を養父に殘したが、養父は彼れに去てられて、不死の藥もなにかせんとて、富士の峯でやきすてた、其煙が今に立ち登つてをるので、世には之を不死と云はで、ふじ山と云ふと局を結んでをる、

其間縱横委曲の筆を弄して、怨恨思慕の情を、寫し出したる、さすがに雄者の天才を察するに、足る

ものがある、殊に其滑稽に富む所、趣味の稍々深き所がある、作者不詳或は源順と傳へられてをる、

翁皇子に申すやう、いかなる所にか、この木はさふらひけん、怪しく麗しく、めでたきものにもと申す、皇子答へてのたまはく、さをといしのきさらぎ十日ごろに、難波より船に乘りて、海なかに出でて、行かむ方も知らず、覺えしかど、思ふこと成らでは、世の中に生きて何かせむと思ひしかば、ただ空しき風に任せてありく、命死なばいかゞはせむ、生きてあらむ限りは、かくありきて、蓬萊といふらむ山に逢ふやと、浪にたゞよひ、漕ぎありきて、我國の内を離れて、ありき廻りしに、或時は、浪荒れつゝ、海の底にも入りぬべく、或時は、風につけて、知られぬ國に吹き寄せられて、鬼のやうなるもの出で來て、殺さむとしき、或時には、來し方、行末も知らず、海にまぎれむとしき、或時にはいはむ方なく、むくつけゝなるもの來て、食ひかゝらむとしき、或時には、海の貝を取りて命を續ぐ旅の空に助くべき人もなき所に、いろ〳〵の病をして、行方すらも覺えず、船の行くに任せて、海に漂ひて、五百日といふ、辰の時ばかりに、海の中に遙に山見え、舟の中をなむ、せめて見る、海の上に漂へる山、いと大きにてあり、其山のさま、高くうるはし、これや我もとむる山ならむと思へど、さすがに、おそろしく覺えて、山のめぐりを、さしめぐらして二日三日ばかり見ありくに、天人の粧したる女、山の中より出て來て白金の金椀をもて、水を汲みありく、これを見て、船よりおりてこの

山の名を何とか申すと、問ふに、女答へて曰く、これは蓬萊の山なりと答ふ、これを聞くにうれしきかぎりなし、この女に、かくのたまふはたゞと問ふ、我名は「はうかひるり」といひて、ふと山の中に入りぬ、うの山を見るに更に登るべきやうなし、うの山のうばつらをめぐれば、世の中になき、花の木ども立てり、こがねしろがね、瑠璃色の水、流れ出でたり、うれには、いろ〳〵の玉の橋わたせり、うのあたり照り輝く木ども立てり、うの中に、この取りてもて參で來たりしはいと惡かりしかども、のたまひしに違はましかばとて、この枝を折りて、參で來つるなり、山は限りなく、おもしろし、世に譬ふべきにあらざりしかと、この枝を折りてしかば、さらに心もとなく、船に乘りて追風ふきて、四百餘日になむ、參うで來にし、大願の力にや、難波より、昨日なむ都にまうで來つる、さらに潮に濕れたる衣をだに、脱ぎ替へ　でなむ、こち參うで來つると、のたまへば、翁聞きて、うちなげきてよゆる

呉竹の、よゝのたけとり、野山にも
　さやはわびしき、ふしをのみ見し、

これを皇子聞きて、こゝらの日頃思ひわび侍りつる心は、今日なむ落ち居ぬると、のたまひて、かへし

わが袂けふかわければわびしさの
　千種のかずもわすられぬべし

源氏物語　此書は一條天皇の中宮彰子に仕へた、藤式部(紫式部のこと)の著したものを、全篇五十四帖の長物語である

此物語を一度讀んだ人は、その結構から、其文筆に至るまで、皆な悉く曲微を盡し首尾を照應し一篇一項必す、其法則のあるのを見て、必ず此書が何かの書に准據を持つて居るのだらうと思ふのである

これが此書が、我國三千年間文學史上の大達者として尊重せられ、紫式部其人が、文才卓越後世及ぶ可らざる人と推崇せらるゝ所以なのである、其全篇に渡るの法則を云へば、古人も已に論つらへるが如く、此書に經緯の法則のあることが其一である、經とは年月を以て云ふもので、此書に引用せられた、人物中の主人公源氏の君と云ふ人の、誕生から筆を起して、段々年を積みて、遂に五十餘年の歳月を經て、薨るに至るまで、歴年体に順記したことで、緯と云ふは同じ年代のことをも、事柄に枝が咲き、行手が岐れて、事の複雜なのは、帖が分けて書いてあることである、尚ほ人の氣の付かない法則がある、うは此物語終始の間に、三代の天皇の替り繼がれし事實があるが、うれに付き其御代替の處には物語のない年を一年か二年か必ず置いてあることである、又初の四十四帖に源氏の君が、多幸

多福何一ッ思ふ事の成らざるなき生涯を送られて、其間幾多の名媛才女を擁け、其心も亦圓滿にして智慮に富み、慈愛深く、當時の所謂理想の幸福人たる樣を書き現はしたるに、引き替へて終りの十帖には其子薫大將と云ふ、が思ふ事爲すこと皆な所期に違ひ、且心も父に似て榮華盛衰、因果應報の理に洩れず月日を送迎へる有樣が書いてある、これは前の四十四帖に應じた書き方で、是も一の大法則である、尙細かく調べ出せば、一字一句の上にも、必す法則がある、かの光源氏の君といふを一部の主人公とするに、對して、柳日の宮を擧げたる、こは光と輝とを相對せしめたので、これも一の法則である、又他に藤壺の宮と申すは、時の帝即ち源氏の君の父帝の後宮である、然るに源氏の母なる、更衣(父帝の寵愛せられし後宮)が死なして、源氏は母を思ふの情が禁じ難いので、此藤壺の宮が、母更衣の貌に似て居ると云ふので、慕ひ寄つて遂には道ならぬ事が起つては其間に一兒を擧げる、父帝は御存知なく、之を皇太子にまで御立てになる、之が爲めに源氏の君は六條院と申して、父上皇に准せられるのであるが、之は秘事であつて誰も知るものはないが此緣由から、葵と云ふ源氏君の嫡妻が死して後、藤壺の姪の紫の上を、源氏が只ならず寵愛する樣にかいてある、藤と云ふ意から其花の色の紫を取り出でたるは、亦奇對と云はねばならぬ、又源氏の君の寵愛する女の一人で、三宮と云ふ方が柏木と云ふ人と密かに通して何時しか小供を擧げる、源氏は知らないで、實の我子と思ふて居る、

是が恰ど自分の藤壺に通じて兒を擧けた事と、相對した妙な、對照法である、此兒ころ末の十帖の主人公となつた薫大將で、此大將は自ら源氏の君の實子でないことを知て居るから、常に活潑な精神はもたぬ、扣目がちで、思ふことも皆齟齬する、又之と同年配で、匂の宮と云ふ方がある、之が薫大將の思ひを寄する女を横取にすると云ふ始末、大体に於て、父源氏君と薫大將との境界は、全然相反して、一段の光彩を添えてをる、薫と匂とは名の上に於て、相對してをる、其他言ひもて來れば、一篇一章一句一字、微細の点にまで注意が拂はれてをる、即ち法則のない所は見出せないのである、されば書中に引き出てられたる、幾多の人々が筆の進むに連れて、老ひ行きねびまさり、言の云ひごし振舞の如何に至るまで、打替り行くなど、其各人が各一の性格を持し、其性格に依て、相關の事柄の上に、種々の愉快なる、悲哀なる、事實を演出すると云ふ、誠に其結構の精緻なるに驚かねはならぬ、されど此物語を讀むものは、必ず先づ其時代の精神を悟らねばならぬ、さらでは、大に見當を違へて事々物々、其猥褻多情、眼にすべき書にあらず、興すべき人物なしと早了して、一通だに讀むの勇氣がおからうと思ふ、抑も平安朝は、今を去ること殆んと一千年、風俗の變移せしこと、想像も及び難きほどで、殊に藤原氏が、政權を弄して、全盛を極めた當時に於ては、其華奢榮耀言語に絶ゆるほどであるから、少しく其間の消息を記るさねば此物語の價値も作者の苦神も解せられまいと思ふ、さて

當時官位に昇るには、家格の定りがあつて、貴き家に生れたるものは父祖の庇蔭で、幼少のときより己に官位をも得るが、地下人の如きは、之に全くの望がないので、止を得ず、權勢ある人に私に媚び附きて、朝廷に仕へるの楷梯を作るのである、故に最高官は固より望み得る限りにあらず、又其地位さへ朝廷の直臣か、權家の家臣か分らぬ樣のものをも多く生じたのである。

以上の考を腦裏に畫いて、此書に對せば、自ら事の所由が解せられて、此書の價値も始めて知れるのである、古への歌、或は文章に教科書に用ゐられぬもの〻多いのは、全く右の譯柄が原因するので、此書の如きも教科書などには元より出來ぬのである又式部がかゝる時代にあつて、貞操無比、道長の戀想をも、其見識と其智慧とをもて、体よく言ひ逃れたるなど當時に卓絶せる、理想の婦人なるが上才藻縱横よく此艶麗華美、花あり實ある、大著作をなしたるは、いかに尊く貴てなることゞ、さても彼れは誰が女ゞ、藤原冬嗣の六男良門より四世の孫藤原爲時其人の子である、小兒の時から男にしてよからうなどゝ、父にも云はれた位、利發な性質であつたが後に藤原の宣孝と云ふ人に嫁した、もとより漢學の素養もあり、歌などにも隨分巧であつたが、不幸にして中途宣孝に殘されて、寡婦となつた彼れが上東門院に宮仕したのは、其後の事で、其頃清少納言と云ふ、才女が一條天皇皇后定子の女房に居たが、誠に漢學にも歌道にも、議論にも長じて、一時才名を轟かしたので、道長は巳の女彰子

（上東門院）にも、彼の樣な才女をと、探索して得た女房なので、當時女流學者の多き中にも此二人は殊に拔出て〻居た、さて源氏物語の出來たのは式部が三十前後の時であらうと、學者が論じてをるが、いかにも其年頃は天稟の才識が完全に熟達するときであるから、疑はなからう、されど此長篇確に一年間に作つたか、幾年かゝつたかよく分らぬ、彼の女に大貳三位、辨の局と云ふがあるが、可なりの歌人である、彼は系統的に才藻の遺傳を受けて居つたは〻系譜によつてもわかるが、また其女子にも才藻を備へてをるのでよく分る、

紫式部は、實際の呼名で、本名でない、彼は藤原が性であるから、略して藤原と云ひ、當時一般の習として、父の名、官位、官職、及び其人の職名を呼名として、居たに任せて、式部も其儘呼び成されてしまつた、本名の如き今から知るに由がない

大和物語　此物語も伊勢物語の樣に、歌を主として、短文を集めたものである作者は業平の子在原茲春と　云ひ花山院の作とも云ふが、未だ決定せぬ、此書伊勢よりは文章もよく連續したる句を用ゐ、冗長の厭ひもなく句切の体裁もよければ、一讀の價値はある殊に歌人などに取ては、名歌が中々多いので、古來珍重したものである

宇津保物語は源順の作なりと云へど確でない、枕草子にも載せて居るから其古るきことは分る、通じ

て二十篇の大作であるが、其内容は清原大納言俊蔭が、唐に使したが、暴風のために吹き流かされて、波斯國に漂着し、其地から琵琶の秘曲を傳へて歸朝することをあげ、其女の零落せしに、女の子孝行者にて、山中に食物をあさる中、大なる木のうつぼなるを見出して、母子棲息したることなどが、其篇中に具はる、篇名は蓋し是から起たであらうが、篇次が錯雜して居るから、みな順序を正して見ることである、此書は源氏物語以前のもので、源氏も之に影響することは、少々でないと云ふ說があるが、此事から之を式部の父爲時を推す人もある

住吉物語は宇津保と共に古るき物語である、併し今傳つて居るのは、名だけは、殘つて、内容は後人の僞作であるとも云はれる、併し夫にしても中々の價値ある書物である、この書は誰にも讀み易いが其結搆は落窪物語に似た所がある、即ち中納言の女が繼母に憎まれ、種々讒害を受け遂には、惡僧に奪ひ去らると云ふまで、恐しい企に遭ふて居るに、居堪ねて元緣由ある尼を住吉に尋ね行きて、其處に日を送る内、從て想を懸けて居た、右大臣なる人の息、少將某に尋ね出され、遂に契を結びて、附從し、子供をも夥多產み、少將も官階に進んで、幸福の身となると云ふのであるが、其中女は父の中納言に再會して、繼母の惡心露れ、こゝに繼母は中納言に捨てられて、貧富所を異にすと云ふ、物語りで、中に歌もあり又筆廻しの上手の所はあるが、畢竟云へは、因果應報とか云ふ位ひの理で物語

に語らせたまでゝある

落窪物語は又竹取、宇津保に次ぎて、古き物語の一であるが、其結搆はやはり繼母が中納言なる人の女の巳が腹にあらぬのを憎むので、これは寢殿の放出(落窪したる所)の一間に住はせをきたるより、落窪の君とあだなを付けられて居たが、備さに艱難を嘗めつゝ、昧氣なき月日を送るうち、藏人の少將なる人に思はれて、立身したと云ふ、實に住吉物語と從兄弟ほど能く似た者である、但し句のつゞけ樣などはいたく短く、住吉などゝは、古雅な所がある

濱松中納言物語、この書は、源氏物語以前宇津保物語以後の者かと思はれる、結搆は中納言なる人が唐土に渡り、唐土の王后に通じて一子を擧げ、歸朝したる後ち、子は母を慕ひで佛道に入り、中納言も唐土を忘れかね、父子共に彼土を慕ふと云ふのであるが、書名は日本の三川の濱松今宵ころ我を戀らん夢に見えつれ」と云ふ題からとつたのである

堤中納言物語　こは全篇を十條の物語にしたる諧謔の文章である、作者は紫式部の祖藤原兼輔なりとの說もあるが、或學者は源氏の物語の當時のものなりと云へれば、尙ほ別人であらう、中々雅趣に富んだ物語である

とりかへばや物語、こは權大納言なりし人に、北方二人あつて、甲に女、乙に男の子を生させたるに

性質全く相反して女子は男々しく小弓など引き遊ぶに引きかへて、男子は女々しく却て、物恥をするなど、父の大納言ほど〳〵困じ果て、遂に男子を女子に女子を男子に替へなして、女子は櫃中納言となり、男子の方は宣耀殿の女御となり、種々の事ども之に胚胎して起りたれど、何れも榮えゆきたることを作つたものである

尙此外に其名ありて書物の傳はらないものが多くある、うは「殿うつり」月待つ女。交野の少將。梅薬の少將。ふせごの小將。井出の中將。人め。國ゆづり。埋木。道心すゝむる松ケ枝。こまの。あしび焚り屋。岩屋。ハコヤ。正三位。隧錢。みづから悔る物語、など夥多ありしも、今其内容を窺ふことは出來ぬ

右に依て考て見れば、此時代に於て、いかに物語類の多く現はれしかい分るであらう、實に此時代は物語の多きのみでなく、美文中の美文として尊ぶべきは此物語の上にあるのである

かくの如き時代なりしが故に、著作者の思想も次第に巧となり、唐土の物語をさへ釋したもの唐物語も出でぬ又、聞き集め見集めたる事柄を材料として一書をなした今昔物語、宇治拾遺物語なども現れた、宇治拾遺の序を紹介して、いかなる書なるかを示さう、世に宇治大納言物語といふものあり、此大納言は隆國と云ふ人なり、西宮殿の孫俊賢大納言の二男なり、年高うなりては昔をわびて暇を申して、五月より八月までは、平等院一切經藏の南の山際に、南泉房といふ所に籠り居られけり、さて宇治大納言とは聞ゆけり、髪を結ひ分けてをかしげなる姿にて、蓬を板に敷きて涼み居侍りて、大いなる團扇をもて扇かせながして、往來のもの〻高き賤しきといはず呼ひ集め、昔物語をさせて、我は内に添ひ伏して、語るに從ひて大きなる草子に書かれけり、天竺の事もあり、大唐の事もあり、日本の事もあり、それが内に尊き事もあり、哀れなることもあり、さま〴〵なり、世の人與じ見る十五帖なり、その正体は傳はりて。侍從俊貞といひし人の許にぞありける、いかになりてけるか、後に賢き人書き入れたる間。物語多くなれり、大納言より後の事書き入たる本もあるにこそ

又宇治拾遺と云ふは後の世に又物語書き入れたるものである、名を宇治拾遺と云ふは、宇治に殘たのを拾ふと云ふ意であらう、此ものは當時女流の文學とは自らけじめがあつて、天眞爛漫の所、又快味がある

日記類、此時代に於て、物語の外日記草子の類さで、競ひ出てたことを、初めに於て言ひ置いたが、今は其日記類について少しく述べやうと思ふ

日記といふ名は、土佐日記などが其初であらう、されど之は普通の日記ではなく、今の紀行である、されど、日々の事を殘さず洩らさず書いてあるから尙日記である、此外十六夜日記なども、此類の日

記即ち紀行文である、されど時代が遠ふから茲に入れるべきものでない

土佐日記は、彼の古今集の撰者の一人、紀貫之が、醍醐天皇の延長八年に土佐の守となり、朱雀天皇の承平四年十二月一日に、任滿ちて故國に歸るときの、日記である、紀氏は承平五年二月十六日に京へ着いてから、凡そ五十餘日間の長旅をしてをる、其間の無聊は想像に難くない、其無聊のときに、自らも慰み、人をも慰めやうとて、紀氏が勉めて面白く笑止しく、かいた日記であるから、之を讀むに自ら笑まれて獨り禁ぜられない所がある、のみならず、我國日記類の初で、男子が假名文を作る濫觴であるから、價値から言ても大したものである、且紀氏の文章であるから、古今獨歩の遒偉温雅な趣を持つてをる、彼は兩三年前に於て、贈位の沙汰に預つてをるが、彼は良吏として、歌仙として、文章家として實に卓拔な人物である、古今集假名序、大井川行幸和歌序などを見た人は、いかなる人物であつたらうと、文より離れて直ちに其人を想像する、土佐日記の卷首に男もすと云ふ日記と云ものを女もして見んとてするなり」とワザ〳〵斷つてあるのは、當時假名書の和文は、專ら女子の手にわつかはれて、男子のせぬものなることが分る、故に紀氏は自ら女子の身となつて書いたのであらう、これらを戯作とも云ふべきである、何せ戯れて書いたかといへば、前にも云へるごとく、もと人をも慰まじめ自らも慰まうと云ふのが主意だからである、故に書中何事につけても、諧謔を混へてをる、一文

字をも書かぬものしが、是は十文字に云々、又俗語なぞ交へて、楫取をのゝしる所に此大盜人がなどかけるを見れば、よく其日記の主意がわかる、されど此書に由て、仲麿が唐土にてよんだ、天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」の歌が、今日に傳つてをるなど、又藤原純友が、海賊をして平の將門を遙に助けてをる、當時の有様がよくわかるのは、歴史の方面からも價値あるのである

尚ほ曰はゝ同し紀氏の文なれども、古今集の序や大井川幸行和歌序などのやうに流暢な所がないことである、こは日記の体であるから自然かくつくつたのともあらう、また筒中已が幼女の任國にて死んで、共に歸らぬを悲しむ情が、何に付けても現れてをる所あり、讀者をしていかにも思ひ深からしむる所がある

蜻蛉日記は右大將道綱の母に當る、藤原兼家の室、同姓倫寧の著はした所である、村上天皇の天暦八年頃に、夫兼家が通ひ初め、遂に道綱を生んだ事、以後天延二年まで、道綱が廿歳になるまで、凡そ二十一年間の事が記されてある、其中和歌の贈答も多く、種々の興味も添へられて、また日記の体裁をなしてをる

和泉式部日記、こは和泉式部の著で、冷泉院の皇子で、敦道親王と云ふ方が、此式部のもとに通はれ

た程の日記で、一條天皇の長保五年四月から翌年寛弘元年正月までのことが記るされてある、才女の事とて、材料は情事の餘端であるが、文章及ひ其中の和歌など實に絢爛讀むに堪たる一書である、土佐日記が紀行である如く、此日記は一の物語であると謂つてもよい、されど式部の品行が當時の一般女子の如く實に貞操を欠いてをる、彼は越前守大江雅致の女で、和泉守橘道貞に嫁したが、後藤原道長に召され、其女上東門院に宮仕したが、其中に冷泉院の皇子爲尊親王に通じて、道長と別れ、長保四年に爲尊親王が薨せられて、親王の弟四宮敦道親王と通じ、中途また藤原保昌に嫁して丹後へ從行した、先つかやうの女子は、今日に於ては鼻向する人はないが、當時の情態は之で略ぼ窺はれるであらう

更科日記は右中辨菅原孝標の女で、橘俊通の妻になつて、仲俊を生んだ者の著である、此書は殘缺があつて、終りまではよく分らぬ節もあるが、大体の趣きは左の如くである、著者は幼き時物語と云ふものを讀みたく思ふて、いかにしてか、都に出て、あるかぎりの物語を一目にても見ばやと、云ふ志願を持つて、常に神佛を祈つて居たが、十三歳のとき思ひ立つて、愈〻京へ上る程の日記から始めて、後朱雀天皇の皇女、祐子内親王に仕へたり、初瀬詣で、和泉下り、春秋の評、侍從大納言の女のことなどをつゞつたものである、例に依て著者の本名は知れぬが、蜻蛉日記著者の姪に當る人である

讃岐典侍日記は、堀河天皇に仕へて居た、讃岐典侍の著である、嘉永の二年五月、堀河天皇の御惱及び其崩御、翌年鳥羽天皇の即位并に大嘗會などのありしことを記してをる、日記もかくの如きものは、當時宮闕の内面を窺う參考書ともなる、とにかく價値ある書の一である

尙他に紀行もので、庵主と云ふのがある、こは貫之と同じく男子で敬山の僧增基と云ふ人が、作つたもので、此名のもとに、熊野紀行と遠江紀行とを含んでをる、增基は新古今時代の歌人で、此書にも多くの歌がのつてをる

さて以上の日記物語多くは、女子の手になつて、假名文の基礎も是等によつて略立つたのであるから、當時の女子は文學史上、男子の上に位地を占めてをる、之に依て當時の文學は一種艶麗柔美の性質を以て、當時他の文學に對してをる、併し此時代にあつて而かも女子にして、只一人男子も及ばぬ遒勁奇拔の文を草したるものがある、うは他にあらず、之より叙述せんとする枕草子の著者清小納言である

枕草子は、徒然草と仝じく、隨筆に入るへきもので、草子の名の初である、平安朝に於て隨筆を物せしものは只一人あるのみで、即ち此草子であるが、彼はあらゆる見聞觸接した事項に於て、常に批評的体度を取てをる、彼の識見は常に男子でも凌ぎ、彼の才氣は往々生意氣と云るゝまでに、走り出て

てをる、されど當時にあつて、源氏物語と相對して、其華彩を爭ふたのは、只此書一部のみである

隨筆なれは一篇の梗概は擧げ惡いが、下筆一番彼は四季の評から初めて、異(ことく)なるもの」「すさまじきもの」「にくきもの」など凡百五六十の題目のもとに、已れが經驗、意見、人の批評、など色々の事を並べてをる、其文は始に云へる如く、奇警に富み、簡短にして、思想の幽玄なる、筆を飛はして縱横意の如くならさるなき所、讀むものをして、轉た其才識に驚かしむるものがある

著者の性質が、男々しくて、且敏才奇想常に有髯男子を壓倒する所は、往々人の誤解を招く所で、今日尙其人の不貞操を詰り、其文をさで非難せんとする人もあるが、此草子を精讀すれは決して、うれはどでないことが分る、彼は當時にあつてさへ、同輩の者に惡まれ、常に讒言などをせられて居た、彼はむしろ女々しくて陰險な當時の女子よりも、多少の識見を備へて、且男らしい男と、交際するのが、氣に入るので、彼が多く男子中に知己を有したからとて、一に彼を淫奔の婦人と見るは少し考があさすぎる、殊に彼が漢文の素養に富んで、漢土の故事などもて、人を驚歎せしめたことは、書中少なくない、彼の性質が獨り彼をして雄々しき行爲に出でしめたのみでない、彼の學問が彼を餘程お轉婆にしたのである、今日も外國語に長じた婦人が、生意氣を以て、目せられてをることなどを考へれは、思半に過ぐるものがある

著者清小納言は、舍人親王の裔、深養父と云ふ、歌人の曾孫で利壺の五人と云はれた、一人の元輔は即ち彼の父である、彼は一條天皇の皇后定子に仕へて、中宮彰子の女房、紫式部と名を齊しうしたが、定子の父道隆は、道長等の好逑に勝ち得で、皇后は不遇を悲んで病死せられた、淸女は此間に於て、いかに定子に忠勤したか、定子はいかに小納言を知つて居たか、此書を讀めば分ることであるが、若し后兄伊周等の流竄のこともなく、皇后にして、彰子にけをされで宮中にあらせられたならば、彼は已に內侍の位にまで進められるのであつた、道長が其女彰子の中宮のために、紫式部を得たのは、全く淸少納言に匹敵するためであつた、とに角此時代の大達者は紫式部淸少納言の二人である、故に源氏を讀むものは必す此草子を讀まねばならぬ

榮華物語、大鏡、」平安朝の文學は多く物語、日記の類であつたことは、以上說き來つた所て明である

が、こゝに尙は雜史とも云ふべき、歷史物語がある、榮華物語、大鏡がそれである、榮華は宇多天皇の寬平年中より筆を起して堀川天皇の寬治三年中まで、凡そ二百年間の事で、最もやさしい國文でつづり、大鏡は文德天皇から、後一條天皇の朝まで凡百七十六年間程の事を記るしてある、皆共に藤原氏隆盛時代の實歷史で、道長の事などを中心として藤氏の繁昌を寫してをる、中にも大鏡は支那の史記に倣つて、記傳体に出來て居て、文章も假名文中尤も剛健自在の妙を得てをる、作者は藤原爲業と

傳へられてをる、榮華物語と比較すれば彼れは少しく剛健の氣骨を欠いで、纖細の所まで筆を廻してをり、これは、寧ろ素朴に近い所がある、道理なるかな、榮華の作者は赤染衛門と云ふ、婦人のやうに傳へられてをる、しかし衛門が果して此書の作者であるか否かは、未だ確証がわからぬのである、要するに文學上の價値から言へば歴史ものは事實を傳へるに重きをおく所から、自然縱橫の筆致を欠くので、此二書も源氏などに比べて、甚だしい遜色がある、されど和文國史の端緒を開いて、雜史の一体を始めた点に於て、亦大に其價値を認めねばならぬ、かの保元物語、平治物語、源平盛衰記、平家物語の如き、戰記文が、後の時代に產れたのは、この二書がそを誘起せしめたのである

大鏡の發端と、增鏡の發端と比べて見ると、殆んど全じやうなことが見ゐてをる、大鏡は大宅の世繼とて、百五十歳ほどの老人と、夏山の繁樹とて、百四十歳位ひな老人とが、話し合ふて居る所へ、若侍が一人出さばつて、色々の質問をするやうに仕組んで、其話しのまゝを筆記したものが大鏡の文面であるやうに出來てをる、增鏡はいとも年老りし老婆の口から、其記憶せる話を、聞きとると云ふ樣に出來て、少し趣きを代へたのみである、增鏡のことは後に云ふが、大鏡の影響は、後世の歴史物語に關接直接に及んでをることは、注意せねばならぬ、とにかく大鏡と榮華物語とは雜史中の双璧として、充分重寶すべきものである、之れに倣ひて作つたものに、水鏡、今鏡などがある、水鏡は今鏡に

擬したので、今鏡の方は、却て榮華に摸した所が多く、水鏡の泊瀬寺で經讀したる僧の夢に、仙人の現はれて、物語りした体に、出來てをるのは、まるで其跡が見える、今鏡水鏡は、中山內府忠親の作で、全人の手には出たが、今鏡の方が勝つてをる

歌謠

奈良朝の末から、漢學の流行は、天下の大勢を左右して、作詩、作賦の行はれたることは、最も隆盛なるもので、それが爲めに國歌は殆んど其聲を窃めて、万葉集中の名吟、佳什、は望むも得べからざる、昔事となりはてたが、なほ幸にして淸和帝の朝より、在原行平、全業平の如き大伴の黑主等の名家が、偶まに出て、、此運命を繫きとめたされど此盛衰によつて、此時代と万葉集時代とは、全く思想の反離した所かあることは免かれぬ、かの平安朝に入つて、假名の製作が、計らず文學界を助ける事になつて、日記物語の發生と全時に、歌道も亦再ひ隆盛に趨いた、此時代を代表すべき歌集の古今は、實に二十一代集中の巨頭である

今は古今の撰集せられし、醍醐帝の當時に、有名の歌人を求めて見ると、紀貫之、小野小町、凡河內躬恒、壬生忠岑、僧正遍照等は、其中の尤も勝れたものである

何に由て平安朝に至つて、俄にこの趨勢を來たしたであらうか、と、深く穿索して見ると、宇多天皇

のときに、菅原道眞の奏請に依て、遣唐使を廢したのが、端なく漢學詩賦の衰廢と、歌學勃興の氣運とを作つたのである、前にも云へる如く、敕撰和歌集の隨一たる、古今和歌集は、實に宇多帝の後帝、醍醐の朝に生出したのである、尙は言ふべきは此時代の歌は、万葉集の歌と、大に趣を異にしてをることである、形の上から言ふても、万葉集中に、長歌の多いのに、比して古今集には甚だ鮮ない、亦其思想の上から云へば、万葉集歌の雄渾壯大なる氣魄は之になくて、稍精緻雅巧の点に成功してをる、故平安朝の時代は、國文の非常に隆盛に達したと同時に、和歌も亦た之に並馳して、其光を爭ふてをると言ふことが出來る、實に古今集は、万葉の遺風を繼がず、奈良朝の餘黨に預からずして、別に一機軸を立てゝをる

さてかゝる、價値ある古今和歌集は、誰の手に依て、何時の時に成つたかと云へは、醍醐天皇の延喜五年四月十八日に、(紀貫之、紀友則、壬生忠岑、等が敕命に依て、万葉集以外の古歌及び新歌千百首を撰んで二十卷として)奉つたものである

抑も我國にて、和歌の勅撰となつたのは、是より以前に万葉集が、あつたが、久しく事絶えて、後々は皆な勅撰は、詩文の事の如く、なつて居たのであるから、和歌者流の奮躍察すべきである、宜なかな、爾後代々勅撰の事絶えず、二十一代集の名をなすまでに至つた、是より先き、詩文の勅撰になつたもので、嵯峨朝の凌雲集、文華秀麗集、淳和朝の經國集などがあるが、彼等は何れも、漢的摸倣の詩で、純粹なる我文學となつて居ない然るに古今に至つて、之を排して我國文學の粹たる、古今集の勅撰となつたのは、喜んでも、喜ばねばならぬことである

古今集は前にも云へる如く、万葉の後を受けてをるから、淳仁の朝から醍醐の朝まで、凡そ百四五十年間の歌を網羅してをる、而して部門の分ちなどは、万葉などゝは、遙に勝つて、充分整正してをる、何れにしても、二十一代集中の模範として、耻かしくない

さてこう古今集は後代の歌人に、非常に尊重せられて、今に至るも、曾て其光映を墮さぬのではあるが、其集中に詠せられたる思想の如何を詮じつむれば、春秋夏冬の感に打たれて、出てんものと男女間の戀愛に生れたるものゝ外は、見ることも出來ないのである、之を明治の今日に比べて見れば、異樣の感があらう、大槻博士がかつて、例を引くことのあるとき、名歌だと思へば、大抵は戀歌であると云はれたが全くうれに違ひない、然れとも之は其當時の思想がうれてあつたから、尤がむることは出來ない

後撰和歌集」此集は古今和歌集に次ぐ勅撰集で、村上天皇の天暦五年十月に、梨壺の五人に詔りして、万葉集の訓點を著けしめられた序に、撰ばしめられたものてある、梨壺の五人は、即ち阪上望城、源

順、紀時文、大中臣能宣、清原元輔である、此五人が彩壺に詰めて、專ら歌のために、食祿を得たところから、和歌所と云ふものが始つた、此後和歌所のあづかり、などあるのは皆な此所の長官である、さて藏人少將藤原伊尹が、總裁で撰んたのである、其体裁は古今集に則つて、四季、戀、雜、別、旅、賀、哀等の部門の下に、二十卷千四百餘首の歌を集めてをる

此歌は實は後撰集としては、少こし不整頓で、序もなければ、万葉古今の歌をも、紛れ入れなど、到底古今に對抗するやうなものではない、源順博士などは、隨分學者で、漢文も國文も出來る方であるが、何がために、かゝる不結果を來さしめしかは、一疑問である、傳說によれば、貫之の序が歌に就いて云ふほどの事は言ひ盡し、書くほどの事は書き盡してをるから、貫之にも及ばぬ人々では筆が取れなかつたのであると云ふてをるが、之れは最も笑止しいさはれ集中の歌は、已に古今集によきほどのものは取り盡された爲めか、あまり精撰も六ケ敷かしく見へるふしがある、只古今集に比して、心の實をとつた所が、特長である、所謂名實備はる歌か、此集の歌の長所と云へはいへるのである、此集中有名の歌人は、藤原實賴、藤原帥輔、同伊尹、同朝忠、同敦忠、同清正、橘直幹、源信明、源公忠、壬生忠見、小野道風、等である、尙女流に中務、本院侍從、大輔、檜垣嫗などかある、さて此撰者五人の中、能宣、元輔は歌の家でもあり、名人であるか、

望城、時文は父業をついだと云ふまでゝ、已の家集もないほどである、源順は重代ではないが、さすがに名人であつた、されど、撰者の歌は、此集中に入つてをらぬ、かへつて古今集の撰者の貫之、躬恒、忠岑、或古今集中の歌人の伊勢、素性、業平、興風、兼輔、深養父、元方等の歌が、多量に入つてをる

拾遺集」一條天皇の時に成つたものであるが、こは花山上皇の御撰だとの說もあるし、又藤原公任卿の撰だとの說もある、古より定說ばない、故に其成時も確に何時と定めることか出來ぬ、四季、賀、別、物名、雜、神祇、戀、哀傷、など例に依て、例の如くして、二十卷千三百餘首の歌を收めてをる、もとより序もあり、精撰でもない、然れとも、集中の歌には立派なものゝあるは、後撰集と同じである、是より以前万葉集と古今後撰の兩集とを合して、三代集と稱へて居たが、此集のなつたときから、万葉集に外れて、此集が代つた、全体につきて言はゝ、其歌は姿すなはに失して、其意も了解し易い、代りに古雅風韻が失せて、遙かに古今、後撰の背後に立つべきものである

集中の歌人には、大中臣能宣、元輔、順、及び貫之、躬恒、忠岑、友則、平兼盛、壬生忠見、藤原長能、惠慶、曾根好忠、藤原公任、源景明、藤原實方、源重之、同道濟、藤原惟成、同義孝、伊勢、和泉式部、小大君、馬內侍などを網羅してをる

後拾遺集」は白河天皇の應德三年九月に藤原通俊卿の撰進したものである、通俊が此撰集の勅を蒙つたのは、十二年の前であるから、精撰なることは疑ない、かつ寛治元年に申請して諸處註を加へたと云へは、本人に於て、撰定の事に熱心であつたことも亦推計られる、これには序文がある、其に依て見ると、拾遺集に入らぬ中頃の歌を集め、古今、後撰のものは、人たに知れるのみならず、其家集さへ、世に知れわたつてをるから、之等をは、除き梨壺の五人の歌を始め、當時の歌人のを撰んだと云ふことが知られる、されと自分の歌は入れてをる、体裁は例に依て、古今などを模範としてはをるが、神祇、釋教など、古今、後撰になき部門をも立てゝをる、此には神祇の方は拾遺集に、釋教の方は後拾遺に始つたのである、卷數二十、千二百餘の歌を載せてをる

當時源經信と云ふ者、甚だ名聲があつたが、彼は難後拾遺集を作つて、通俊の撰を難じてをる、然るに當時亦大江匡房等の如き、人物もありしに、通俊辨才を以て、白河帝に愛せられ、此撰の如きも、或は自ら請ふて撰びしならむと傳へられてをる、さなくば十餘年星霜を費して撰びし此集に批難の起る筈がないやうにも思はれる、されど通俊も中々の才士であつて、凡々たるものではなかつた、此集の歌は、姿に於て拾遺集と仝じく、一讀して了解せられるほどである、故に此集の出來た當時すら已に古風の歌人には、かれこれ言はれたのである、されどこは時勢の然らしむる所で止を得ない、歌は、

平易のもののみとは云へ、中には隨分の名吟は多いのであるから、强ちに捨てられは、集中の歌人には、源經信、大江匡房、藤原顯季、同元眞、源師賢、同俊房、藤原公實、同定頼、橘爲伊、藤原顯綱、津守國基、藤原範永、能因法師、良選法師、紫式部、清少納言、相模、伊勢大輔、少式部、大貳三位、辨乳母、出羽辨、經信母などを網羅してをる

金葉集」は崇德天皇の大治二年に源俊頼が、撰んで白河院に上つたのである、こは源經信の子で、白河院は通俊に後拾遺を撰はしめられしときから、多くの批難のために、今一度歌集をと思召されたが、遂に名匠經信の子俊頼に勅せられることになつたのである、此集の一度ならず二三度まで奏して、漸く納た趣きは今鏡にも增鏡にも出てをる、

されば世に流行せるものは、却つて、一二奏本で、三奏本は遂に世に出つることも稀になつたものである、其体裁は四季、賀、別戀、雜、連歌、と部を立てゝ、僅に十卷六百五十首ばかりのものである、連歌の部立は、此集が始ていある、さはれ、とにかく、歌數も少なく、人の批難も多き集である

あふと見て現のかひは無けれとも
はかなき夢ぞ命なりける

の如きは、隨分の名歌で、誰も賞めぬものはないが、大体は此集の歌は輕調にすぎて、風韻雅趣に乏

しいものか多いのである、又連歌と云ふは次の如き、二人して、一首を咏みなすものである

しかの鳥を見て　　爲助

つれなく立てる、しかの鳥かな　　國忠

弓張の月のいるにおどろかで

集中著名の歌人は、藤原基俊、同顯輔、僧永縁、藤原忠通、源有仁、藤原家忠、同實行、同實能、長實、伊通、源雅定、平忠盛、藤原顯仲、白河院、及び俊頼などである、其他後拾遺集頃の人のも多く入つてをる

詞葉集」近衛天皇の天養元年に、藤原の顯輔が崇德院の勅を蒙つて撰集したのが、此集である、成り上りし時は仁平年中であつた、顯輔は有名な、袋草子の著者、清輔の父であるが、一人の撰定は困難なるものと見えて、金葉集よりも、一層歌數を減じて、四百九十首にすぎぬ、金葉、詞葉は二集を合せて尙は、普通の撰集に劣りたれば、俊成の撰んだ、千載集の序に不足らしく書いてある

此集について言ふべきは、集中歌人の數の少なきことにて、清輔の如き名人も撰者の子と云ふの故をもて入れられなかつた、薩摩守忠度が、俊成の宅を訪ふて、勅撰集の内に一首なりとも入れて欲しいと頼んで、歌稿を鎧袖から出した悲しい話は、誰も知てをらう、清輔の身として、一首も勅撰に入れ

られなかつたのは、殘念なことであつたらう、この故にや、彼は續詞花集二十卷を撰んだ、されど奏獻せんとしたが二條天皇の崩御に遭ふて之も果さなかつた

千載集」歌人として、父子三世、名匠大家の名を恣にした、藤原俊成が、後白河院の宣に依て、文治三年九月に奏上した所である二十卷、千二百八十餘首で部立の如きも、四季、別、旅、哀傷、賀、戀雜、短歌（長ウタナリ）旋頭歌、物名、俳諧、釋教、神祇と、やうに、整調の極致を盡してをる、此集は詞草、金葉をは眼中にをかず、古今、後撰、拾遺、後拾遺の歌を除き、一條天皇の正歴頃から、文治即ち後鳥羽帝の時までの、凡二百年間の歌を收めてをる、この集は見ごと詞草、金葉、二代の衰微を挽回して、古今集の壁に迫つてをる

されば集中の歌も、詞は平易に調もなだらかではあるが、心深ささまの歌の多くは、尤も喜ぶべきである

此集の歌の著名なる作り主は、當代にて、藤原清輔、同季通、慈圓法師、顯昭法師、道因法師、寂蓮法師、圓位法師、藤原良經、同實家、同定家、同隆家、源通親、同雅賴、式部內親王、堀河、安藝、などである、さいなみやしがの都は云々の平忠度の歌は、後に秀歌百餘首の中から拔き出したものであるいかに精撰であつたらう

今樣は七五の句を四つ連ねたるもので、平家物語祇王が事の條に、今樣に謠ふことが見えてをるもの佛敎の和讃から生じたもので、弘法大師の有名な(いろは)歌は、即ち此今樣なのである、今樣の起原も多く此いろはからであらう、色は匂へど、散りぬるを、我世誰ぞ、常ならむ、有爲の奥山、今日越えて、淺き夢見じ、醉もせず、ともと讀んだものである、されば後には、之を謠うて、舞をまひしものなることも、祇王祇女が淸盛に招かれて、白拍子を舞ひしことの、平家物語にあるので明かである朗詠とは、詩賦の中の佳句を我國風に吟じたもので、後ちには發達もし、和歌をも吟することになつた、藤原公任の撰んだ和漢朗詠集は、汎く世に行はれてをる

鎌倉時代の文學

此時代は、後鳥羽天皇の文治二年賴朝が鎌倉に幕府を開いてから、後醍醐天皇の元弘元年に北條氏の亡滅せしまで、凡百四十餘年間を含んでをる、此時代は平安朝の後を襲ふて、大樣異るところなく、和歌の如きは新古今集を初とし、新勅集、續後撰など九代集を出して、平安朝を繼承し、歷史物語としても、大鏡などの餘脈を承けて水鏡、今鏡などを出してをる、日記草子隨筆亦皆平安朝を其儘であるが、併し乍ら太平無事の平安朝とは、人々の思想上に變化があるから、戰記文の如き、平安朝になきものも、出で、佛敎思想も著しく之に影響してをる、畢竟するに、此時代は平安朝の文學を繼承したるものに、加ふるに戰記文などの新奇なるものを添へてをる、故に時代の特長を云へば、和漢二文の調和、戰記文の起り、佛敎思想の深く文中に溶入してをること等である、これ等は要するに時勢の變遷が餘儀なくせしめた、結果である、前に既に云へるか如く作者は時代の思想を離れて、著作するものでないから、此時代も平安朝を接續しなから、文化の變遷と時代の風潮とのためにかゝる特性を發したのである

遣唐使の廢せられて以來、國有の文學は漸々發達するに引き換へ、漢學は漸く衰運に陷つたことは、爭はれぬが、漢文の眞趣味は平安朝時代の隆盛なりし文運に依て、人々の腦裏に染入してをつて忘れ得られなかつたことも、否まれない事實である、故にこゝに圖らず、和漢調和の道が開けたのである、又國流の漢學は全然廢絕したのでないから、文脈などは漢文に摸したものが少なくない、已に國流と云ふからは、漢文とは云はれぬ、中途半の者である、此國流漢文と漢文思想とは和文の發達と共に、自然に調和せられて、此時代特有の長所は、骨折らずに成り立つた

尙ほ細かく云へば、當時は已に藤原氏の榮華昔の夢と消えて、源平二氏爭亂の世となり、次で武家政事の世となつたから、優柔不斷の公卿風は、世に迎へられず、丈夫の武藝に跨り、戰話を戰はし眦に見るもの、心に思ふこと、一も優長風雅のものなく、傷心寒膽の事にあらずは、雄邁豪壯の事のみ尊

はるゝこととなつた、加ふるに北條氏七代の執政は百餘年間天下の心を繫いで、世襲の主從關係をも生じ、勇を愛し法を卑しみ、專ら義氣を愛して、所謂武士道なるものを作り出した、故に京に居て公卿と云ひ朝臣と稱ふるものは、平安朝の思想をそのまゝ承けて、一方には武家の鼻息を伺ひながら餘義なく狹き天地に、風流雅趣の生活をとげたのである、故に彼等の手になる、勅撰集の如きものは、此時代の他の時代に誇るべきものでない、誇るべきかあつても、他にない特長ではない

又此時代に佛敎の思想の普及したことは、驚く計りで鎌倉に五山の僧侶が威張つたのみでない、敎山の如きは、三十六房に常に三千の僧徒が居て、甲冑を畜へ、刀槍を持し、或は野武士の如く、或は凶賊の如く、皇威を恐れぬ有樣であつた、後白河法皇の歎せられて「心に任せぬものは鴨川の水と、山法師と」申されたのは、全くこの僧侶の勢力の甚だしかりしを、心外に思されたのである、これを半面より考案して見ると、當時佛敎の民間より上、公卿、尊上にまで行はれて、世の無常であると共に、佛は此身を永遠に救ふ、救世主であると信じて疑はなかつたことが分る、かく佛敎の普く上下の心をつないだときであつたから、佛敎の思想の腦裏に皆無の人はなかつた、從つて其產物に其跡の現はれたことが、他時代に比して、遙に多い

散文

此時代の散文を種類の上から分ければ、日記、紀行、類、歷史物語の類、戰記文、隨筆等となる

一　日記、紀行の類、

十六夜日記、東關紀行、海道記、

一　隨筆、

方丈記、

一　歷史物語の類、

水鏡、今鏡、十訓抄、古今著聞集、

一　戰記文、

保元物語、平治物語、源平盛衰記、平家物語、

尙ほ此外に、產物として、捨てがたきものあれど、今は其略に止めをく、以上の記載せるものに依て、此時代の散文界の有樣は明了に分ると思ふ

十六夜日記」いざよひ日記とよむ、阿佛尼と云ふ老尼が、訴訟のため京から、鎌倉に下り、長く滯留するに付けて、道中及び逗留中の事をかきつけた、日記である、作者は從五位下佐渡守度繁の女で、かの有名な歌人、藤原定家卿の子、爲家に嫁し、爲相等數人の子を生んだが不幸にして爲家は母子を

弃て、、歸らぬ黄泉の旅立をしたが、其時遺言して、播磨の細川の庄を、爲相に譲つた、然るに爲家の死後、庶長子爲氏が、父の遺言を顧みず、之を押領したのである、爲相はまた十餘才の小兒、爭ふことも得せぬを、阿作尼物憂きことに覺え、かくては、家の業も繼がず、爲家の靈を慰めることも出來ぬと色々思案した末、愈々決心して、自ら鎌倉へ下り、時の執權北條時宗に訴へた、この日記は、其下向の道すがら、行々物しまた、鎌倉にても書いたものである、爲家の室はどあつて、歌も上手に、文もたしやに出來てをる、殊に老の身に習はぬ旅をすることを歎き、恨ある心に世の意に適はぬを傷み、筆と涙を以て綴られてをる、尙は同情すべきは阿佛の夫は、俊成の孫定家の子で、父子三代歌道の師範でもと播磨の細川も、和歌所に寄せられたのが、自然に已れの家の所領となつたほどであつて、爲相をも夫の後を繼で、家名を墮させまいと云ふ、思想が時々文中に見えてをることである

關の藤川を渡るとき「わが子ども、君につかへん爲ならで、渡らましやは、關の藤川」と詠めるは、その志をほのめかしたものである、またいざよひ日記の名は、「ゆくりもなく、いざよう月に、さそはれいでなんとぞおもひなりぬる」とて、十六日の夜に、都を出てたからとつた名である

行文は簡潔の方で、文勢も強い、文脈は漢文体に傾いてをるが、巧みに和語を用ゐてをる、歌の多きは厭はるゝ程であるが、比喩の縱橫自在なることと、修辭の法に富みたる、よみもて行けば、只快を

覺ゆるのみである

海道記、東關紀行」海道記は源光行の作、東關紀行は源親行が作てある、海道記は名の如く一片の紀行にすぎぬが、文章は駢麗体の漢文調で隨分甘く出來てをる、古來其洗練の文、修琢の辭句、を贊歎せぬものはないほどである

此紀行は承久の役の翌々年貞應二年四月に都を出て、その十七日に鎌倉に着き、五月の初に、又立歸りし道中の紀行文である

四條天皇の仁治三年八月十日都を出て、、月末には鎌倉に着き十月の末に鎌倉を發せしまでの記事で大体に於ては方丈記に似たれど、海道記は漢文めき、これは國文めきてをる、されど尙は駢体文めきたる處のあるは、同じき點である、和歌もありて海道記にも劣らぬ作である、而して著者親行は光行の子である、父子巧を同せるも亦妙と云ふべきである

方丈記、は此時代に於ける隨筆もの、惟一の作品で、鴨長明が其筆者である、此方丈記は同し隨筆の中にも、徒然草などとは、異り、其首尾一貫した文脈で、しかも一種の主張を述べてをるそが中に安元の大火、治承の旋風、同年の福原遷都、養和の飢饉及ひ疫疾、天暦の大地震など、種々の天災地變を叙して、世の無常を歎き、此無常の苦を避くるが爲めに、釋氏の道に入り、日野の山奥に方丈の庵

を結んで、之に住み、人を敎へて此集の無限にして人の知らざることを述べてをる、而かも行文流暢で氣慨で滿ちてをる、著者はもと鴨社の祠官の家に生れ、管絃の道にも長じ、和歌をもよくしたが、彼鳥羽帝に仕へて和歌所の寄人までなつた、然るに長明は父祖の業を重じて、已れ其業を次がんことを求めたが、許されなかつた、是より悒々樂まぬと云ふ有樣で遂に家を捨てゝ大原山に入り、一の草庵を結んで靜に心を養ふた、此書は其間に物したのであるから、全篇通じて無常の說に充ちてをる、つまり佛敎思想の影響になりしものであることは一見して明かである、長明の作に四季物語と云ふものがあるが畧す、

水鏡」は大鏡についで出てたる歷史物語であるが、大鏡に文德帝より後一條までを記した、其前を補はんために、神武から仁明まで千五百十年間の事を畧記してをる、其構造は大鏡の所で述べた如く、仙人の物語る所を聞いた体裁に出來てをる、世に四鏡と云ふもの〻中で、最も少部の書である、作者は中山內大臣忠親である、此忠親は關白師實の曾孫で忠宗の子である、同人の著に山槐記、貴嶺問答もうの著である

今鏡」今鏡も大鏡の後を受けて、後一條帝より高倉帝まで凡五十年間の事を記るしたもので、体裁は水鏡と同じく三部に分れてをる、卷數十卷で、村上源氏其他諸皇子、諸王たちの事より、詩歌、物語、雜事まで書いてをる、うの書が大鏡と畧ぼ同じ人のみでなく、大体大鏡に擬したもので、大鏡に謂へる世繼の翁の孫に當る、つくも髮の尼が高倉帝の嘉應二年の春同志數人と泊瀨より大和めぐりした途中、ある木影にて物語れる体に書き成してをる、このことも大鏡にうのまゝ倣ふたものである、著者は水鏡と同じく忠親と云ふ說と、土御門內大臣通親と云ふ說と二說がある、大著よりは、文勢遒勁の点に負けてをるが、水鏡よりは勝れて出來てをる、此後增鏡が出たが、其間に高倉、安德二帝の歷史が欠げるが、今鏡には、彌世繼と云ふ書があつて、水鏡、大鏡、今鏡の後を承けてをるやうに書いてあるが、今傳つて居ない、

十訓抄、古今著聞集　二書共に今昔物語の系統を引いたもので、十訓抄と今昔物語と異る點は、只前に總論ををいて、訓戒の意を加へた所だけである、古今著聞集の著者は、橘成季で、全く雜苑したものである、二十卷あつて、目を神祇、釋敎、政道、公事と云ふ風にみなわげてある、其中に文學、和歌、弓矢、偷盜、鬪諍、飲食等まで面白く笑止しくあはれなることが多い、

保元物語、平治物語　此二書は專ら軍戰のことを記して、勇將猛士が干戈を揮つて、奮鬪せる樣を寫したもので、所謂戰記文である、かの源平盛衰記と共に、藥室時長の作であると傳へられてはゐるが

保元、平治二物語は全く同一人の手になつたことは疑なからうが、盛衰記は文体に於て甚た異る所がある、此二物語が戰記文の魁をなして、盛衰記となり、太平記となり、太閤記となり、はた織田軍記安西軍記、豊臣軍記等が現はれたのである、保元物語は、後白河天皇の保元元年の兵乱を叙し、三十七條に分つて、三卷にしてある、平治の方は、二條天皇の平治元年藤原信頼、源義朝等が兵を擧げて後白河上皇、二條天皇を幽し、信西入道を殺し、淸盛をも除かんとせし、兵乱を叙べてある、これも三十六條三卷で、保元と体裁は異らぬ、共に文中口語さへ交へて、中々巧みに、戰爭其他勇士の面持まで現はしてをる、されど正史とするには不都合のことが多い、何となれは餘り粉飾を加へて、附會の說さへ多いからである、これを文學上の價値から見れば、實に戰記文の天祖と云ふのみでなく、漢語佛語を相調和して國文中に埋めたところ、特種の文体をなして、後世漢國調和文の先をなしてをる、

源平盛衰記　此書は源平二氏の盛衰を寫したもので、保元平治物語に於て、始まりし戰記文は、此書に至り全く圓熟の域に達してをる四百餘條、四十八卷の大部で、其中には冗贅なことが澤山ある、縱横漢語佛語を交へて、國語に調和せしめた手腕、其文勢の宛轉の妙を極めたるところ保元、平治の作者と同人の手に出たことは、首肯が出來ぬ、文に情致あり、筆に勇勁の所あり、勇壯より悲痛、悲壯より淸楚、艶情と云ひ、流暢と云ひ、鎌倉時代に誇るに足るのみならず、優に我國文學の上々なるものである、

平家物語　は信濃前司行長の作と云へど詳に分らぬ、文は盛衰記と殆んと同じく、只此は琵琶に合せて詠誦したもので、謠ひ物であるところが異るのみである、其巧は上下すべき所はない、謠ひ物だけに句調が盛衰記より一層勝つて美を極めてをる、百七十條全部十二卷ある、

歌謠

平安朝時代歌道隆盛の後を承けたから、この時代の初は、實に斯道は隆盛を極めた、ことに後鳥羽上皇が非常の歌好きにおはして、自らも巧みに、よみたまひ、御歌所を起されて、寄人を任命せられ、常には水無瀨の山莊に公卿を集めて、歌會の御催しが絶えなかつたから、一時の名人巨匠雲の如く、多かつた、御土門、順徳の二帝も亦歌の道に勝れさせたまひ、三皇共に歌の聖にておはせば、上の好む所の餘で、攝政良經を始め、家隆、定家、雅經、通具、秀能、西行、慈圓、寂蓮など　の人々が輩出した、この時に勅撰になつたものは、實に有名な新古今和歌集である、

新古今和歌集　こは攝政良經、統管の下に、定家、家隆、有家、雅經、通具の五人が撰集したのである、尙は裁定の任として、後鳥羽上皇親ら御心を傾けさせられたことであるから、古今集以外別に一生面を開いて、名集となつたなど愚かなことで、二十一代集中嶄然頭角を現はした、

此集のなつたのは、千載集を去ること十八年の後で、土御門天皇の元久二年三月廿六日撰上したものである、もと和歌所の寄人は十一人あつて、左大臣良經、內大臣源通親、天台座主慈圓、三位入道俊成、道具、有家、定家、家隆、雅經、源具親、寂蓮法師の人々があるが中に、此五人が撰はれたのであるから、五人の名匠たることは云はずもがなである、春、夏、秋、冬、賀、哀傷、別離、羇旅、戀神祇、釋敎、と部を分けて二十卷、千九百七十餘首の大部である、

その用語は巧を極めて、句調も流麗に、言を餘響に托して頗る人情の極美を寫したところ、綠語の巧にかけられたる、枕詞、序の用ひ方、實に此集獨得の長所である、されどうの巧を求めし結果は、過巧纖弱に流れ、不解無味のものも多く出來てをる、

以上の　撰集を八代集と名けてをる、以後亦見るべき歌集はない、

鎌倉の將軍實朝も、當時の歌の名人であるが、その歌を集めたものに金槐集がある、西行法師の山家集と共に世に傳流してをる、

定家の子孫が、世々歌を以て朝廷に仕へ、分れて二條、冷泉の二家となつて、この道の師範家として世に尊はれたが、其極歌を秘　するやうの弊害が生して遂に此道は衰退した、此時代に尙ほ勅撰集に新勅撰、續後撰、續拾遺、新後撰玉葉集、續千載集、續後拾遺　の諸集があつたが、こゝに書かぬ

○此時代の歌人には僧正遍照、小町小町、紀貫之、凡河內躬恒、壬生忠岑、伊勢などの名家が朝廷に滿ちて居た、故に古今集の撰者も相當なる歌人で、他の學問も淺くなかつた、紀貫之の序文の如き、又彼の土佐日記の如き、國文の祖先と云つても差支へないものである、古來古今集を歎稱して惜かない歌人が跡を絕たないのを見ると隨分立派な歌集で後世及び難い程のものたることが知れる、實に古今集は八代集中の大關三代集の中の飛切である、其歌は文に過ぎず質に落ちず、花實兼備のもので萬葉に比べて雄渾壯大の所は讓るが撰者の精研と相待つて、思想の微細と、巧緻なる措辭とに至つては、多く彼の上に出るものと言つて差支へぬ、

これ後世歌よむ者の手本として珍重する所以で、つまり、當時社會の風潮が、人心を浮靡せしめて人々奇を爭ひ雅を競ふたが爲めに、萬葉時代の雅渾質實の所が失せて、婉麗優美の點が加はつた結果であらう、尙此時代の歌は、題を求めて心を凝らすことになつて居るから、餘りの粗末なものがない、とにかく、萬葉以外に一歩を進めたとは疑はれぬ、この大成功は平安時代、文學の特に誇るべき點で、今一つ異點のあるのは、萬葉時代より、此集時代の歌は長歌の減少せしことであるのみならず、多少あるものも、見るべき程の者がないのは、一の短所で、到底萬葉に及ばないことを忘れてはならぬ、殊に萬葉に於ける五七の古調が五七或は五七の亂調となつて、今樣歌の源となつて居ると

は、よく注意せねばならぬ

古今集に出てをる、有名な歌人は、六歌仙即ち僧正遍照、在原業平、文屋康秀、大友黒主、小野小町の六人と、尙ほ他に古今の撰者等である

後撰集は古今集撰定の後四十六年を經て、村上天皇の天曆五年に、梨壺の五人が勅をうけて撰んだもので、之が勅撰歌集の二回目である、梨壺は禁中の一名で、五人は源順、大中臣能宣、清原元輔紀時文、坂上望城で、梨壺に召されて歌集を撰定したから、當時其名があつた、されど、集中に古今と竝ぶ歌が少ない、之は古今から、年代が餘りに、經て居らぬのと、名人が澤山なかつたのに依るもので、撰者の學力も少し落ちたかとも思はれる、序文などが古今集の序文の樣に、和文で絶妙の處に到ては居らず次は

拾遺集で、こは龜山天皇の御自撰とも云ひ、又一條天皇の長德中、藤原公任の勅を奉じて、撰んだものとも云ひ傳へてをる、集中の歌は、流麗であつて含蓄がないと云はれて居るが、讀んで見ると果して風韻が乏しい然れども、流麗なる所は、其長所で以上の三集は三代集と稱へられて、皆な共に珍重されて、今日に至つてをる、集中の名歌は、公任及び赤染衞門等數人のものゝみである

後拾遺集　拾遺の撰ばれて後九十年、白河天皇の應德三年に此集が出た、こは、藤原通俊が、勅を

奉して撰んだのである、その後四十年、崇德天皇の大治元年に白河法皇の勅に依つて、源俊頼が撰んだ集は

金葉集　と名つけられた、各々左程の者でない、其後二十年を經て、近衞天皇の朝に、

詞花集　が現はれた、之れは清原顯輔が撰んで奉つたのである

千載集　は詞花集の撰ばれた後、四十二年を經て、後鳥羽天皇の文治二年に藤原俊成が、後白河天皇の院宣を奉じて撰んだので、以後の七集は平安朝時代の勅撰である、世に八代集と云ふのは、以後の諸集に、鎌倉時代の始に、出來た、新古今集を合せて稱へたものである

後拾遺以下皆前代の集に倣つて、各精華を競はん考へで、あつたらうが、風俗自然に卑俗に陷いつて居るされは、大中臣能宣、源順、清原元輔、藤原公任、源經信、僧良遷及び女流で赤染衞門、紫式部、和泉式部。清少納言、相摸、大貳二位等は、隨分名手であつた、中にも紫式部、小納言の二人は、源氏物語、枕草紙の作者で、人も知る文章卓絶の女である、又千載の撰者、俊成が其子定家と共に、後世和歌の師範家の祖宗で、その道の人に尊崇追慕されて居る、故に千載は自ら風調の見るべきものがある、鎌倉時代の新古今集は、特出の譽あるものであるが、此千載集に負ふ所が少くないとのことである

散文

前時代より引きつゞき、行はれたる漢學の影響は假名書の國文の殊に著しく現はれて、此時代の物語、草紙の類、皆其影響の結果で、華麗に流れて居る、貫之が書ける大井筒行幸和歌の序の如き、當代社會に行はれたる、四六駢麗の漢文に負ふ所が少くないことがわかる、尙ほ此時代に於て平假名が現はれて、其勢力を行文の上に逞しうせしめたことは忘れてはならぬ

此時代に於て、文學上の花實一時に、其榮輝を極めたか、其目を擧げて見ると、物語、日記、草紙歷史物語の類で、國文の精華其頂天に達して、千紫萬紅一時に萠え出でたと云ふも過實の評でない

當代の文學か、非常の重價を文學史上に有するは、前に述へた諸目の上にあるので、中にも源氏物語、枕草紙の如きは、思想の豐富と、筆致の巧妙とに於いて、獨り此時代の傑作てあるばかりてなく、實に我か文學史上得難い絕品である

物語と云ひ日記、紀行と云ひ其內容の如何なるものなるかは、便宜上前に知る必要がある、故に今其概畧の說明をするであらう

古から傳はつた、話を他人に語り聞かすのが、物語で、其時代に行はれて居たが、こゝに云ふ物語りも、之に基づいて書いたものである、されば筆上の潤飾は往々事實の以上に走るので、遂には唯

者の想像を書き下すことにもなつた、今日の小說か今一步進んだもので、所謂當時の物語だが只作者の思想が當時の精神を離れて居ない爲めに、紙上の人物及び其周圍の狀況が、全く平安朝の社會の其儘の風を傳へて居るので、後世尤も著名のものである、その他大和物語、住吉物語、宇津保物語濱松中納言物語等を、世に知られてをる、同じ物語の名で、歷史を書いたものがあるが、これは歷史物語と言ふべきもので、大鏡、榮華物語など皆な其數てある

著者其者の、日日の出會せし事柄を書いたものは、日記と謂はれて其旅行中の事は別に紀行と云はれる土佐日記は日記の中の紀行で、紫式部日記、及び蜻蛉、和泉式部、讚岐典侍なとの日記は名高きものである、更科日記も此時代の紀行文である

草紙は枕草紙に始つた名で、あるが冊子の義とも云ひ、草稿、草案の義とも云ふが、まづ後世の隨一である、徒然草も草紙の意であらう、此時代には枕草紙が一書あるのみである

伊勢物語は、古今集などに次いで、和歌を學ぶものゝ必ず見るべき書である、古人も傳へてをるが全く在原業平の歌を骨子として、切々の物語を作り、數十篇合して、一部の書となつたもので、作者も在原業平だと傳へ居れど、確てない、文は典雅て簡潔て尙ほ勇健な所がある

例　むかし男ありけり、その男身を用なきものに思ひなして、都にはあらで、東の方に住むべきと

ところ求めむとて、ゆきけり、もとより友とする人、ひとり、ふたりしていきけり、道しれる人ひとりもなくて、まどひ行きけり、三河國八橋といふ處にいたりてき、そこを八橋といふは、水のくもでにながれて、橋を八つ渡せるによりてなむ、八橋とはいひける、その澤のほとりの木のかげにおり居て、かれいひ喰ひけり、その澤にかきつはたいとれもしろく咲きたりけり、それを見て或人の曰く、かきつばたといふ文字を句のかみにすゑて、旅のこゝろを詠めといひければ、

唐ごろも着つゝ馴れにし妻しあれば
はるゝ〳〵來たる旅をしぞおもふ

とよめりければ、みな人かれ飯の上に涙落して、ほとびにけり

前略、富士の山を見れば、五月のつごもりに、雪いとしろうふれり

時しらぬ山はふじのねいつとてか
かのこまだらに雪のふるらん

その山は、こゝにたとへば、比叡の山を二十はかり重ね上げたらむかたちしてなりは、しほとりのやうになしありける、なはゆき〳〵て武藏國と、下總の國との中に、いと大きなる河あり、それを隅田川といふ、その川のほとりに群れゐて、やれはかぎりなく遠くも來にけるかなとわびあへるに、

渡守は舟にのれ、日も暮れなんとすといふに、乘りて渡らむとするに、みな人ものわびしくて、都に思ふ人なきにしもあらず、さるをりも、白き鳥の嘴と足と赤きが、しぎの大きさなる、水の上にあそびつゝ魚を食ふ、都には見えぬ鳥なり、わたし守に問ひければ、これなむ都鳥といふをきゝて

名にしおはゞ、いざこと問はむ、都鳥
我思ふ人は、ありやなしやと、

とよめり、舟こぞりて泣きにけり、

竹取物語は、源順の后なりと云へと、確ならぬ、この物語は、竹取の翁といふもの、竹の中より一女を得て、養ひ上げんところ、世に稀なる美人となつた、其名も赫哉姫とつけて愛育してをる中に、皇子公達きゝ及んで、妻にせんと互に相競つたが畢竟一女子の爲めに愚弄せられたのみで、各目的を遂げなかつたと云ふ物語りで、中々無遠慮に上流の人を冷かしてをる、文章素樸な所のあるは、物語中の古參であるからさるものゝながら、縱横委曲の筆致は敬嘆すべく、思怨恨嘆の情、を寫せるところ、滑稽に富みて趣味深きところ、確かに文學上の價値が認められる、

例へば大伴の御行の大納言は、我家にありとある人を召し集めてのたまはく、龍の首に五色の光ある玉あり、それをとりて奉りたらん人には、願はんことをかなへんとのたまふ、男ども仰の事を承り

て申さく、仰の事はいとも尊し、たゞしこの玉容易くはとらじを、況や龍の首の玉いかゞわらんとまをしあへり、大納言のたまふ、君の使といはんものは、命を捨てゝも己が君の仰事をばかなへんとこそ思ふべけれ、この國になき天竺唐土の物にもあらず、この國の海山より龍はおりのぼるものなり、いかに思ひてか汝等難きものと申すべき、男ども申すやう、さらばいかゞはせん、難きものなりとも、仰事に從ひてもとめにまからんと申す、大納言見笑ひて、汝等君の使と名を流しつ、君の仰事をばいかゞは背くにきとの給ひて、龍の首の玉とりにとて出したて給ふ、この人々の道の糧食物に殿のうちの絹綿錢などあるがきりとり出てそへて遣はす、この人々ども、歸るまで、いもゐをして我は居らん、この玉とり得ては家に歸りくなとの給はせけり、おの〳〵仰承りて罷りいでぬ、龍の首の玉とり得ずば歸り來なんとの給へば、いづちも〳〵足のむきたらんかたへいなんとす、かゝる好色事をし給ふことゝそしりあへり、賜はせたる物はたの〳〵分けつゝとり、或は己が家にこもりゐ、（中略）我弓の力は龍あばふと射殺して首の玉はとりてん、遲く來るやつばらん待たじとの給ひて、船に乘りて、海ゝとにありき給ふに、いと遠くて、筑紫の方の海に漕ぎ出で給ひぬ、いかゞしけん、はやき風ふきて、世界くらがりて、船を吹きもてあへり、いづれの方とも知らず、船を海中にまかり入りぬべくふき廻して、浪は船にうちかけつゝまき入れ、神は落ちかゝるやうに閃

きかゝるに、大納言は惑ひぬ、まだかゝるわびしきめは見ず、いかならんとするぞとの給ふ、掛取答へてまをす、こゝら船に乘りてまかりありくに、まだかくわびしきめを見ず、御船海の底に入らずは、神落ちかゝりぬべし、

源氏物語、我國上下三千年、文學史上に異彩を放てるものは此書である、當時之と聲價を競ふたものに枕草紙がある、此二書は平安朝時代の絶品のみでない、實に我國上下を通じたる名作である、而して源氏五十四帖は紫式部の作で、源氏の君と云ふ好色富榮の貴公子を中心として、之に配するに許多の佳人才姫を以てし、脈絡相依り波瀾重疊之に加ふるに作中の人物各々特性を發揮し、人事の變事情紛實に系統的腦髓を有せるものにあらずんば此までにはと思はる、終の十帖は宇治十帖として源氏の君の子薫大將の事を中心として書かれてある、之には父の源氏の榮華を盡したに反して、思ふと爲すと、常に齟齬して陰鬱なる生涯を送つた有樣がかいてある、是が前篇の光景と相對して、異彩を放つてをる、著者は上東門院に宮づかへして、才名當時に嘖々たりし紫式部である、式部は藤原爲時の女で、右衛門權佐藤原宣孝に嫁し、後ち夫に死別れて寡婦となつたが、元來和歌に長じて居た上に、皆々和漢の舊記に渉つて居り、且つ朝廷の故實に通じて居たから、當時才女の需要の盛なるときとて、非常に上東門院に寵せられた、當時清少納言など殆んど匹敵するほどの、才女も

あつたが、その操行の高潔なりし所など、畢竟無類の女子であつた、本人の著に、紫式部日記などもあるが、道長全盛の時代のことにて、日記の上が華麗多雜で、當時の樣が推し測られる、源氏物語も、書中の人物は、皆多少の據所ありと傳へられてをる、

例　中將の臣（蔵大將のこと）ひさしくまいらぬかなと、思ひ出できこえ給ひけるまゝに、有明のときのまだ夜ふかくさし出づるほどに出でたちて、いと忍びて御ともに人などもなく、やつれておはしける、河のこなたなれば、舟などもわつらはで、御馬にてなりけり、いりもてゆくまゝに、きりふたがりて、みちもみえぬしげき中をわけ給ふに、いとあらましき風のきほひに、ほろ〳〵とおちみだるゝ木の葉の露のちりかゝるもいとひやゝかに、ひとやりならず、いたくぬれ給ひぬ、かゝるありきなども、おさ〳〵あらひたまはねこゝちに、こゝろぼそくをかしくおぼされけり、

やまおろしにたへぬ木の葉の、露よりも、あなやくもろき、我なみだかな」

山がつのおとろくもうるさしとて、すゐしんのおとゝもせさせ給はず、しばのまがきをわけつゝ、そこはかとなき水のながれ共を、ふみしだく駒のあしたども、なほ忍びてと、よういし給へるに、かくれなき御匂ひぞ、風にしたがひて、ぬししらぬかと、おどろくねざめの家々ぞありける、（橋姫）

榮華物語、は歴史物語であることは前已に述べてある、此書は宇多天皇の寛平年中より堀川天皇の寛

治年中まで、凡二百年間の事柄を載せてをる、藤原氏全盛の歴史である、我國の假名歴史の尤も古いものである、名が物語と云へるだけに、六國史などゝは書体が異つて、寧ろ裏面の記事が詳かである、作者は藤原爲業とも、赤染衛門とも云ふが判然しない、

大鏡　は三鏡の一つで、文德天皇より後一條天皇まで、凡百七十六年間の君臣の事跡が傳記體に書かれてある、前書と同じく藤原氏の榮華の樣が寫されてある、物語と云ふたけに、當時の裏面の事跡が詳かで、歴史を讀む人に益する所が多い、こは藤原爲業の作であるらしい、文は榮華よりも、輕快であるが、二書共に事實を傳へることに重きを置いた爲めに、筆勢縱横の妙を極むる譯に行かなかつたものと見え、源氏などに比して、大に遜色がある、この二書が雜史の端緒で、保元物語、源平盛衰記、平家物語などが、出來るに至つたのであると謂てよろしい、

今昔物語　は宇治大納言隆國の著で、隆國は後三條、白河の二帝に歴仕した人である、此人宇治の平等院の南にある南禪寺にて、毎年夏毎に茶を路人にすゝめ、己れは大團扇にて人にあふがせ乍ら、人を要して談話をなさしめ、これを筆記して數十卷を得られた、之が本書で、今は昔しと云ふ冒頭が毎話の始にあるから、此篇の名としたので、内容は歴史上の逸話より昔話、天竺震旦の事まで、話の其儘を粉飾なく集めてある、その天眞なる所が、此書の特色であらう、

宇治拾遺物語も今は昔の冒頭で、夥多の談話を集めたもので、著者は同じく隆國で、前書の足らぬ所を補ひしものと云へと、後人の作とも云はれる、文章は僅か古語を用ゐ、且修飾の所が見える、紫式部日記、こは源氏の著者、紫式部の作なるとは、前に述へてをる、土東門院に奉仕した當時の日記で、文章は源氏に及ばぬ、つまり事實の記載だから、其筥であるが、亦他人の及ばぬ温雅の筆で輕快の文を弄してをる

土佐日記は　前に述へた歌人紀貫之の作で、承平四年作者が土佐守の任を終へて歸京の途中、二ケ月餘を經て家に達するまでの記事で、女子の日記と云ふ体裁にかいてある、故に紀行文の一つと云はねばならぬ、文の輕妙、滑稽を交へて同船の婦女を慰めたる所、如何なる筆勢か意匠か、古今の序など、は、全く別人の作と思はるゝ位である、

枕草紙　源氏物語と共に、平安朝の雙璧で、作者は清少納言書體は隨筆である、清少納言は男子の樣な氣質の女であつただけに、專ら比評の體度を取つて、普通の隨筆よりも文章活氣を帶びてをる、さうして看眼の高き、議論の精巧なる、筆法の鋭利なる、趣味の深き、縱横の妙ある、眞に源氏物語の好對手である、殊に彼が豪放の氣象に富める、常に男子をして愧死せしむるものがあつた、之が源氏の作と異つて、貞節の點に一歩を讓つた原因であらう、

清少納言は清原元輔の女て、一條天皇の皇后に仕へて、忠直比びなかつた、春過の如き紫式部に劣るところはなかつたが、他人よりは惡まれて始終讒言に遭ふたとが書中に見える、負けず魂が強いために、さうであるか、男子との交際などを好む點は、性質の女々敢ないからでゞもあらうか、年老い閑居の後も好んて人を罵つたと云へは、其性質の一班も分るてあらう、源氏と此書を比較すれば、式部の文は處女の人の見るを耻づるが如く、常に鋭鋒を藏して宛轉を求めてをるに、納言は勤めて奇拔の筆を振ふて、寸鐵人を殺すの鋭鋒を出してをる、式部の温柔迫らさる、納言の豪放讓らさる、兩者對峙して雙美たるを失はない、

例　春は曙、やう〳〵白くなりゆく、山際すこしあかりて、紫たちたる雲の細くたなびきたる、夏は夜、月のころはさらなり、闇もなほ、螢とびちがひたる、雨などの降るさへをかし、秋は夕暮、夕日はなやかにさして、山の端いと近くなりたるに烏のねところへゆくとて、三つ、四つ、二つなど飛びゆくさへあはれなり、まして雁などのつらねたるが、いとちひさく見ゆる、いとをかし、日入りはて、、風の音、蟲の音など、いとあはれなり、冬は雪の降りたるは、はたいふべきにもあらず、霜などのいと白く、又さらてもいと寒き、火など急きおこして、炭もてわたるも、いとつきづきし、晝になりて、ぬるくゆるひもてゆけは、すびつ火桶の火を、白く灰がちになりぬるはわろし

うつくしきもの

瓜にかきたるちごの顔、雀の子のねずなきするにをどりくる、又紅粉などつけて居たれば、れや雀の蟲など持て來てくゝむる、いとたうとし。三つばかりなる兒は、急ぎて這ひくる道に、いとちひさき塵などのありけるを、目敏に見付けて、いとをかしげなる小指にとらへて、れとななどに見せたる、いとうつくし、あまにそぎたる兒の目に、髮のれひたるを掻きは遣らで、うち傾きて物など見る、いとうつくし、たすきがけにゆひたる腰のかみの、白うをかしげなるも見るにうつくし、（中略）をかしげなる兒の、あからさまに抱きてうつくしむ程に、かいつきて寢入りたるもらうたし、雛の調度、蓮のうき葉のいとちひさきを、池よりとりあげて見る、葵のちひさきもいとうつくし、何も〳〵ちひさき物は、いとうつくし、いみじう肥えたる兒の二つばかりなるが、白ううつくしきが、二藍のうすものなど、衣ながくてたすきあげたるが、這ひ出てくるもいとうつくし、八つ九つ十ばかりなるをのこの、聲幼げにて文よみたる、いとうつくし（後略）

神樂、催馬樂、朗詠、今樣

神樂、催馬樂は奈良朝の末より、漸く發達し來つて、此朝の始めに、その曲も一定したが、神樂歌は神樂の時に奏せられたるもの、發達したので、三十一文字の短歌を一二句づゝ繰り返して歌ふのである、催馬樂は俗謠より起たもので、神樂の儀式が終るときに興を添へるために歌つたものである、此二種の歌は曲に合せて謠ふもの、始めで、後世の俗曲は多少皆系統をこゝに引いて居るから文學史上に少しの價値否な注目を要するととなつてをる、

今樣朗詠も同じく謠ひ物の一種で、今樣は弘法大師の「イロハ」歌が起りであると傳へて居るが、平家物語に、妓王が歌た今樣を見ると

佛もむかしは凡夫なり、我等も遂には佛なり、いづれも佛性具せる身を、隔つるのみこそ悲しけれ」と泣く〳〵二返歌つたとある

多少佛意を混和して謠ふ歌とも云へど、後には變遷したものと思はれる、同書に佛御前が歌ふた今樣は

君を始めて見るときは、千代も經ぬべし姫小松、御前の池の龜岡に、龜こそ群れ居て遊ぶめれ」

とある

とにかく、佛教徒の間に行はれた、和讃であつたに相違なからう、それが源平の時代には、白拍子の舞に合せて歌はるゝに至つたのである

朗詠は、もと詩中の佳句を、國風に吟したのが起りで、和歌をも謠ふことになつた、朗詠集と云ふ藤

原公任の著述もある、で以上の四種を併して郢曲（えい）または唱歌とも云ふのである、

第三期　鎌倉時代

頼朝が鎌倉に幕府を開いてから、後醍醐天皇の建武中興まで、凡百五十年の間が、鎌倉時代である、此時代の文學の特徴は和漢二文の調和と戰記文の起りで佛教思想を文中に見ることが、甚だ明かになつたことが、要件であらう、此等は皆な時勢の然らしむるので、人間の思想が、時代の精神と背馳することの出來ないのは、前にも已に言つてある、平安朝の文學と、僅かな年代を隔てた、此朝の文學とは、大に此特性を異にして居ることを見ることが出來る、要するに此時代は藤原氏が漸く榮華の夢より醒めて、世變の甚たしきを驚畏しつゝ、平氏に其榮耀を乘り取られ、次いで又た源氏の勃興に遭ふて世は再變し、鎌倉の幕府三代にして北條氏に代つたが、此等劇甚なる世變の間に於て一方に文學の變遷も之に伴ないつゝあつたのである、かの假名の制作は、我固有の國文學を發達せしめ、京都の上流社會に隆盛を以て行はれて居た、漢學漸く衰運を來たしつゝ始つたが、漢文の趣味は平安時代より、國人の腦裏に殘つて居たため、其長所は、多く國文の中に融和せられ、漢文其者も永年流行の結果全く消滅せず一種の國風のものを生じ出した、此の二つの傾向が、到るべき所に到りて、遂に和漢文の調合が全うせられ、鎌倉時代特殊の文學は生れたのである、

世に鎌倉武士の特質を稱するが、此已前よりして、源平二氏が數ば國邊を鎖めたので、出征の武人引卒從屬等は、因襲の久しき、全く主從の關係を生じたため、征戰に奔走する度毎に、勇壯義烈の美風を生じ、北條氏に至つて三代君臣の深き關係は、主愛憐し臣義從するの美風を養ふたのである、其時代の精神が已に文衰へ武の極盛を意味して居るだけに、風流温柔の著述は少なく、却つて戰記文に於て、其材料を擅（ほしいまま）にした次第（しだい）である、

戰記の文に佛教思想の痕跡を斷たざるは、亦時代の影響の然らしむるので、日記紀行、隨筆類まで當代の者には、其思想の普及（ふきゅう）せられざる所がない、こは平安朝の佛教流行が益々一般に普及したので、人事の百般を佛神の所爲と信じたる、同時代の紳縉は、力を極めて佛寺を隆興し、名僧智識亦多く崛起して、世を風靡した結果、人々其無常の說を信せんとしつゝありし所へ、源平の興衰、承久の三皇を遠島に移せし如き、古前未聞の變事は目前に現はれて、人生無常の感は、強く世人の腦裏を動かして、之を離れては時代の精神は、全く表はし得ざるものとなつたのである、

其他文學として此時代に見るべきものは、餘りにないが、あるものも平安時代の文學に及ぶものでない、今此時代の文學上の產物を區別して表示せば、左の如くである、

日記紀行の類、

十六夜日記。東關紀行。海道記。

隨筆

方丈記。

歴史物語の類

水鏡。今鏡。十訓抄。古今著聞集。

戰記文

保元物語。平治物語。源平盛衰記。

十六夜日記　此一小冊子を以て、此時代の日記紀行中の巨頭として出さねばならぬ、これ此時代の文學が平安朝に一歩を讓る所以である、この書の作者は阿佛尼と云ふ婦人で、先づ歌詠の一人である、彼が此日記を草する殆んど長き時間を要して居るが、文章もさほど粗末ではない、中にも其初筆の所などは、隨分學者ぶつてをる書中の和歌亦有價のものに乏しくないが、要するに厭はしきまで和歌を挿入して、讀む人を厭惡せしむるは、作者が婦人だけに、此書に疵を付けたと云つてよからう、已に書中此和歌に依つて缺點を見る、如何に作者が和歌に得意たるかゞ分る、此婦人をして此日記を草するの動機を得さした次第は次の如くである、

阿佛は佐渡守度繁の女で、安嘉門院に仕へたが、定家の子爲家に嫁し、多くの兒を擧げた後ち爲家に死なれ、剃髪して尼となつて阿佛の名を得たのであるが、爲家の家は祖父俊成、父の定家から歴代有名な歌人で、爲家自身も隨分な歌人であつた、之がため朝廷より播磨の細川庄を賜はれて、世襲するとになつたが、爲家の庶長子爲氏は父の惡む所となつて、家督を繼ぐ事が出來ないので、父の死後爲相の繼ぐべき細川の庄を横奪した、爲相未だ幼弱にして之を爭ひ得ないのを殘念に思つた阿佛は女ながらも鎌倉に出でゝ時の執權北條氏に訴へたのである、折しも元寇の擾亂後で鎌倉は隨分仕がしい、如何に急いでも仕方がないので、阿佛は鎌倉に滯留して居る中に死亡した、其鎌倉を指して發途する際より筆を起して、鎌倉滯在中のことも書き載せたのが此書で、涙多き筆跡は其境涯が然らしめたのである、

以上の如き動機に依て產まれ出た日記なれば、怨恨の情筆端に溢れてをるのみでなく、行文簡晰しかも氣慨を備へてをる、修辭の勝ぐれたるは、著者に漢文の素養ありたるを知るべく、比喩の巧なるは作者の天才を伺ふべきである、

海道記　は源光行の著である、和漢調和の体で、亦比喩行文の上に特種の技量を現はしてをる、

東關紀行　は光行の子親行の著で、父の文に劣らぬ、文体が和漢混合体で、一讀快絶を呼ばしむる

ものがある、

方丈記　此書は隨筆の体で、鴨長明一代の傑作である、胸中の感慨溢れて此書をなしたため、首尾一貫、行文流暢平易、眞に和漢調和文の最も完成したものである、彼の多くの隨筆の長時間の間に拾集せられて、部冊をなせしものとは面目を異にしてをるから、一種の主張を文中に窺ひ知ることが出來る、

然るに長明の境涯は、得意の境涯にあらざりしと、佛教思想の多大なるとで、厭世主義に傾いてをるとは、一讀して知ることが出來る、長明もと、鴨の社の祠官の家に生れ、管弦和歌に通じて居たため、後鳥羽上皇に仕へて、和歌所の寄人までになつたが、父祖の業を襲いで、社司とならんことを乞ふに至つて、許可を得なかつた、これが長明をして世を厭はしめた始であらう、其後彼は世を棄て門を閉ぢて人と交際を斷ち、常に悠々として樂まなかつたが、遂に剃髪して蓮胤と名乘り、大原山に隱れて、心を養ふて獨りを慰めて居た、書は其間に物せられたもので名を力丈記と付けたのは、彼れの草庵の方丈なるより取つたのである、無常の說全篇を貫いてをり、之を證明するに安元三年の大火、養和の飢饉、治承四年の大風、天歷二年の大地震、都移しのことを引いて、動かずべからざる城塞とし、遂に人を勸めて浮世を去つて、世外閑居の樂を得よと叫んでをる、人の其說を信ぜさらんと

を恐れては魚の水中に遊ぶ人は其樂を知らず、我の方丈の庵中に樂しむ人其心意を解せざると同じなるを以てして、一層強く人を强いてをる、感情强き人をして之を讀ましめは、此小冊子必ずや其人を動かして同情の人たらしむるであらうと思はれる、

右の如き著書もとより、世教のために上々の者たらざるは、論を待たないが、徒に筆を弄して快を一時に取るの作ならずして、自ら閱歷感觸したる事實を以て、文を作り、首尾貫徹專ら熱誠の餘滴を濺いだところ、文章の巧妙なるより更に一歩を進めたものと云はねはならぬ、比喩の巧妙修辭の富彩、文章の暢達、條理の貫整せるは、又得、易からざる文學上の產物である、

水鏡今鏡、この二書は歷史物語で、水鏡は大鏡の洩らせし、神武天皇より仁明天皇までの事實を記るし、今鏡は後一條天皇より、高倉天皇の頃までを寫して三鏡の欠文を補ふてをる、三鏡とは大鏡水鏡、增鏡で、此三鏡では後朱雀天皇から安德天皇まで十三代の間が缺けてをる、若し之を四鏡とすれは大祖より後醍醐天皇頃までの事跡は知ることが出來るのである、二書共に大鏡、榮華物語の文體に倣つたもので筆力大に下つてをる、これ亦た當代の文學が平安朝に及ばざるの點である、

十訓抄、右今著聞集、此二書は今昔物語の如き体裁で、系統は全くそれから引いてをる、十訓抄には前に總論を置いて訓戒の意を陳べてをる、其作者著聞集は橘成季の作と云へど、十訓抄は詳かで

ない、

保元物語　は戰記文の始で葉室時長の作と稱せらるゝものである、同人の作には源平盛衰記が未だ他にあるが、文体は寧ろ相違くて一人の手に成つたと思へない、却つて平治物語こそ同人の作なれと思はれる、保元物語は保元の亂の原因結果を叙し、平治物語は平治の亂を寫したものであるが、共に文飾が過ぎて事實を誤り、附會の說をも加へてをる、且つ注意すべきは文中多く口語を交へてをることである、これは平安朝の歷史物語と異つた點で、尙云はゝその眞狀を寫さんと勤めた結果、文章其物も口語に近つき、漢語佛語を調和さして文中に溶入したため、特殊の文体をなせしのみならず、當時戰鬪の中心に立つて、眼其事を見るの想あらしめる、これが此時代の長所で亦文學上に價値ある所以である、今一二の例を引いて見ると、

白河殿攻落すの條の一節(保元物語)

御曹司藤九郎を召して、敵は大勢なり、若し矢種盡きて打物にならば、一騎が百騎に向ふとも、終には叶ふまじ、坂東武者の習、大將軍の前にては、親死し子、討るれども顧みず、彌が上にも死重りて戰ふとぞ聞く、いざさらば、大將に矢風負せて引退けんと思ふは如何にと宜へば、家來然るべく候、但御誤り候はんと申しければ、何條さる事あるべき、爲朝が手本は覺ゆるものをとて、例の大矢を打番ひ、固めて兵と射る、思ふ矢坪を誤らず、下野守の兜の星を射削りて、餘る矢が資壯嚴院の門のはうだてに、箙中せめてぞ立たりける、其時義朝手綱搔繰り打向ひ、汝は聞及ぶにも似ず、無下に手こそあらけれと宣へば、爲朝兄にて渡らせ給ふ上、存ずる旨ありてかくは仕り候へども、誠に得冤を蒙らば、二の矢を仕らん、眞向内兜は恐れも候、樟子の板か、梅檀弦走か、胸板の眞中か、草摺ならば、一枚とも二枚とも、矢坪を慥に承りて仕らん云々

之を平家物語及び源平盛衰記に比すれば、和漢文調和の上に於て未だ飽かざる所あれば、接續の巧、文勢の連續は此二書の特長であらう、

源平盛衰記は源平二氏の盛衰を記るしたもので、戰記文として、圓熟したもの、一である、平家が後世の語物と成つたのも、駢麗美文の爲めに然るのであるが、殆んと彼と同等の地位にある此書は、文勢の宛轉滑達なる、筆致の圓活滯らざる、漢語佛語の愈々國語と調和せしところ、文趣の勇壯悲痛なるところ艶麗の上に情あり、情の上に力あるところ、全く鎌倉時代の大製作と云ふべきである、平家物語は信濃前司行長の作にて、或は盛衰記を拔萃したものとも云ひ、盛衰記の別本とも云はれてをる、琵琶に合せて謠ひしものなれば、章句の駢麗はもとより、美文の上に於ても盛衰記に勝つてをる點が多い、

歌謡

前代の歌道隆盛の後を承けて、而かも至尊の好尚を以て、之を勸誘せられたゝめ、初期の歌謡は甚隆盛を極めたことが、增鏡などの文面でもわかる、從つて名人輩出して、隨分立派な產物が後世に傳はつてをる、かの後鳥羽上皇が歌道を好ませらるゝの故を以て、朝廷に歌所を起され、寄人を任命して專門に和歌の進運を謀られ、一方には常に水無瀨殿に遊ばせられて、公卿を集せられ和歌の會を催せらるゝと絕えざるに當ては、名人の輩出が驚くべき程のものであつた、天皇亦自ら名手にいまして、自ら批評をせられて群卿を勵まされしなど、歌道のためには、此上もない幸福であつたのみならず、土御門、順德の二帝も亦た、此道に勝れられたまひしをもて、攝政良經を始め、家隆家定、雅經、通具、季能、西行、慈圓、寂蓮の輩より、宮內卿の女流に至るまで、をさ〳〵劣らぬ名流があつた、此盛時に當つて敕撰になつたものが、新古今集であつた、即ち家定、家隆、有家、雅經、通具の五人が撰者である、攝政の良經が統管で、後鳥羽帝躬らも裁定せられたと云へば、其內容の立派なるとは言ふまでもない、世に二十一代集と云ふがあるが、其中でも頭角の現れた方で、古今集などから、一生面を開拓したと云はれて居る、少しは解し難いやうにもなつてをるが、之には理由があるのでまづざつと下のやうである、

用語が巧で句調が流麗で、餘韻の內に無限の情を寄せて、人情の極美を歌ふたものであるから、一讀したのみで、深意の悟り惡い、歌に欠ぐべからざる、かの枕詞や序詞（長キ枕詞ヤ ヲノセノ）などは、一段の進步を以て現はれてをる、又緣語と云ふものが巧に用ゐられた點なども、他集を遙に凌駕してをる只此集の欠點とは云ふべきは、餘に巧を求めて纖弱の傾きがあるのと、前にも云つた、解しがたい又無味なる點が諸歌の中に多い、一例をあぐれば、

藤原定家朝臣

ことゝへよ、れもひれきつの濱千鳥（ハマチドリ）、なく〳〵出し、跡の月かけ

旅の歌とてよめる

太政太政大臣（良經）

もろともに、いでし空こそ、わすられれ、都の山のありあけの月

題知らず

西行法師

都にて、月をあはれと思ひしは

數にもあらぬ、すさびなりけり

君が代にあへるばかりの道はあれど

身をは賴ます行末のそら

をしむとも涙につきぬ心から
なれぬる神にあきをうつして

皇太后宮大夫俊成女

あかしがた色なき人の神を見よ
すゝ口月も宿るものかは

藤原秀能

のやうてあるが、之等は解し易き方なので、あまりよいものを撰んだわけでもない、鎌倉將軍、實朝も歌の名人で、山は裂け海はあせなん世なりともの歌は、小兒まで知つて居る、實朝の歌を集めたのが、金槐集(キンクワイシウ)て、西行法師の歌を集めた、山家集(ヤマガシウ)と共に、今日まで世に歌はれてをる

定家の當時の地位は、非常のもので、歌學海では絶体的に崇尊せられたので、假名遣(カナツカヒ)でも互爾平波(テニヲハ)の研究でも彼のものは、誰一人疑はずに信用してをつた、從つて歌道は其家に傳つてこの道の師範家となつたが、其弊害は秘傳と云ふことが、嚴重に歌はれて、遂にこの道の衰頽(スイタイ)を來たしたことである

今様は前時代にもあつたが、此時代には盛に歌はれた、又今様と朗詠とを混じた様な宴曲と云ふものも末期に及んで起つた、

室町時代文學史

總說

文學史上に云ふ當時代は、歴史の上より云ふものとは其范範圍が廣い、即ち初に南朝時代があり、終りに織田豐臣時代が付屬しておる、その間殆ど三百年に近い、全体云へは此時代は文學頗る、衰微を呈したときであつたが、さすがに永い間の學海であるから、多少見るべきものもあるのである、諸君の知ることく室町時代七十年餘を除くの外は、戰乱爭鬪絶間なく、皇室の式微はその絶頂に達し、縉紳もまた文學に關與するの暇がなかたので、僧侶の如きすら干戈を取つて、戰場に驅逐すると云ふ次第で、天下の形勢已に文學を認て居ない、故に學者は此時代を暗黑時代など云つてをる然れとも注意して觀察し來れば、前に述べし如く、血河矢號の間に、馥郁たる文華の生れ出でたものがないでもない、

かの南北時代に於ては、前代の餘勢を受けて、後代の文學に影響を與へたるもの、神皇征統記、增鏡、太平記、徒然草の如きがある、これ等は到底後世の淺識學者の企圖し得ない、立派なるものであるのみでなく、また前代に遡(さかのぼ)つて考へても堂々たる大著てある、又かの作者の多くが南北朝時代の風雲に捲き込まれ、剩へ南朝に屬して、轗軻落魄の境涯に立ち、多くの參考書なくして、誠忠偉

衷を其儘吐出したものが多い、正統記にまれ、增鏡にまれ、太平記にまれ、多少の氣骨なきものゝ作てはない、殊に正統記の如き筆鋒の鋭利峻嚴なる、史論の卓絶なる、永く後世忠臣の鑑となりしのみならず、日本外史の論文の如き、皆な是等の餘韻を仰きしものである、

此時に於ける、北朝方の人は、當時甚だ得意の地位に立たに相違ないが、彼等の遺產に何物がある光明天皇のときに「風雅集」がある後光明天皇の中に新千載集がある、又新拾遺集がある、尙は後圓融帝の時に新後拾遺集があるが、堂々として勅撰の式になつたものであるに拘はらず、是等は更に漏し得べき有價のものでない、然るに宗良親王の新葉集の如きは南朝回復のために、千軍万馬、西走東奔の間に、撰ばれしものなれど、句々皆精練と稱せられてをる、所謂る文なり歌なり、英雄何ぞ必ず書史を讀まん、直ちに血性を暢べて文章となす、てふ、心血の凝血したものでなくては讀むに足らぬのである、

南朝已に倒れ、世は足利の手中に歸するや、文學衰敗は其極に達した、此時に當ては唯五山の禪僧たちが、鎌倉の京都にあつて、文書の保護者となり、且多少の執筆でもしたと云ふのみに止る、絶海、義堂、等の僧は多少の頭角を顯はしてをるが、此も時代の中で、僅かに云ふに過ぎず、虎關禪師が、元享釋書のみは、佛教史の鼻祖らしきものにて、數へれば先つ是等が遺產中の逸物である

されど京都の紳縉に二條良基、一條兼良があつて、史書、及び歌學釋書類に多少の貢献をなしてをる、良基は僧鋭の作者（此説ヲ持スル人アリ）と稱せられてをる、その他連歌新式、筑波問答、「菟波集」嵯峨野物語百寮訓要抄、小夜の寐覺、愚問賢註等の著がある、兎に角大學者と云ふべき人である、兼良の、文明一統志、江家次第抄、日本紀纂疏、樵談治要、花鳥餘情、公事根元、歌林良材など、隨分文學上有價のものが多い、こは亦當時の硯學の一人であつては後世に及ぼす影響など漠大なものである、

以上の說く所を以て、考へれば、室町時代の文學は實に、哀れ敢果なきもの、樣であるが、注意して之を觀察すれば、德川時代に於て、隆盛を來たせし謠曲、連歌、狂言、御伽草子の如きは、皆なこの時代に創造せられたものであることが分る、此尊むべき四種の新文學は、前時代の夢にも見る能はざりし所であるから、之を當時代の特長点に加へねばならぬ、尙は文學が貴族の手を離れて漸々平民一般の手に歸したのも、此時代である、言ひもて來れば此時代は隨分有價な時代と曰ふことが出來る、又かの細川頼之の如き、上杉謙信の如き、武田信玄の如き、武人を以て詩賦に長せらるゝもの東常縁、太田道灌、細川幽齋の如き、和歌に秀でたるものが隨分あつた、九州の菊池氏、中國の大內氏の如き、諸侯にして、文學の奬勵を行つた人もある、此等は尤も遠方の文學を開拓する先驅となつてをる、

散文

此時代にて注目を要する散文は、雄筆の文章では徒然草、歴史体の文章では、神皇正統記、增鏡、太平記の四書である、此僅々たる五書は獨り當時代の傑作のみでなく、我文學史上の第一流に位ひすべき、價値を有してをる、

神皇正統記、此書は南北朝の爭点、極頂に達し、日夜兩軍の勇士が、創傷痍殘の痛夢に襲はれつゝありし時に當つて、南朝の忠臣北畠親房が著述せしものにて、神武より後醍醐に至るまでの歴史である、其内容の一二を云へば皇位繼承の大事を說きては、皇統正閏の正理を論じ、南朝を以て飽くまで、正統と論じ去りたるものにて、新井白石の讀史餘論、賴山陽の日本外史など、此書に負ふ所が少なくない、文章はつとめて、浮華を去り、平易流暢を旨として、しかも筆力勇健敬慕すべきである、然るに著作の當時參考書の如きものは、殆んどなく只自已の記憶より絞り出でして此書を、著はしたと云へば、親房其人の博學鴻識の程も推測か出來る、書中多く佛話を交へたると、論黎を佛典に求たるとは、當時代の風潮が彼れに及ぼした影響である、

增鏡、記に次いで見るべきものは、此書である、此書は平定朝に出でたる、大鏡の体裁に倣つて作つたものであるが、これも同じく、後島羽天皇から、後醍醐天皇までの國文歴史である、著者は一條

兼良の子、冬良との說あれど、冬良以前に書いた古寫本が世に傳つて居るから、或は虛りである、又良基の著と云ふ學者あれと如何にやゝと思はれる、現に角當時此二人の外にさるべき學者がないから、かく傳說したのであらう、故に本書の作者は定めぬ方がよろしい、

此書は實に優美の文である、中にも新島守の一篇は、特に叙事の妙を極めてをる、之をかの正統記に比すれば、史論に於て、大に讓る所あるも、文學史上の價値は寧ろこれにあると曰はねはならぬ世に此書と大鏡、水鏡とを合せて三鏡と云ふが、此書は体裁に於ては大鏡に似、文体に於ては、寧ろ榮華物語に似てをる、文章の接續に妙術があつて、行文の流麗を太平記に爭ふてをる、實に得難き優品である、

太平記、戰記類中當時代の最も偉大なものは、本書である、此書は後村上天皇以前花園天皇までの事蹟を擧げてをる、文体は盛衰記の流麗に似て、更に一歩を進めてをると言つて差支ない、其漢語佛語を縱横無盡に使用して、文勢を助けたる所の筆致は、實に圓滿の境に達してをる、されど史書として評を下さば、餘りに潤飾に過ぎ、誇大に失してをる、批難を免かれない、若夫れ單に文學上の見知よりすれば、實に前時代の平家物語、源平盛衰記より、遙に優れてをる、其悲哀を寫すに於て、勇壯を畫くに於て、縱横なる筆路、一讀魂飛び魄馳するの快文字である、卷數實に四十、南北

朝の事實を叙し、全篇皆な金玉の文字と云つてよろしい中にも東下りの一篇は、世人の最も愛讀する所であるが、大塔宮、熊野落、賀名生皇居の條などは非常の絶文である、今其一例を載せよう

或は高峰の雲に秋を欲て、苔の筵に神を敷き、或は岩洩る水に渴を忍びて、朽ちたる橋に肝を消す、山路もとより雨なくして、空翠常に衣を濕す、向上ぐれば、万仞の青壁刀に削り、直下せば千丈の碧潭藍に染めり

又女院皇后は、柴葺く庵の怪しきに、軒漏る雨を禦ぎ兼ね、御袖の涙はす隙なく、月郷雲客は下の下、岩の陰に、松の葉を葺かれは苔莚を片敷きて、身を措く宿としたまへは、高峰の嵐吹き落ちて、夜の衣をかへせども、露の手枕寒けれは、昔を見する夢もなし、況んやその郎從眷屬たるものは、暮山の薪を拾ひては、雪を戴くに扃寒く、幽谷の水を掬んでは、月を掇ことに肩痞せたり、

此書も亦作者の確ならぬ中にある、昔の人は皆な自已の性名を明記せぬから、往々かゝることになる、此書は當時碩學の僧玄慧法師の作なりと云へど當らず、近來小島法師なるもの、著作なりと云ふことが、知れたれど、小島法師の何者たるかは分らぬ、此書に一生面を開いたと云ふ点は詠歌の上に用ゐる掛詞の修飾法を、散文中に用ゐたことで、實にうるさいほど掛詞を用ゐてをる中にはめでたいものもあるが、厭はしい所も多い、

欠

MISSING

中語の雅言で書き作ら、また當時の口語をも挿入し滑稽多趣味の讀みものであるのみでなく、柏子に合せて謠ふことの出來るものであるから、七五の句調が多い、此他足利時代の散文に曾我物語、義經記がある、その文章は敢て華美でない、往々破格の筆法があつて、難澁の句も少なくない、先づ大した書でないことは、前々言つた所でわかると思ふ、

歌謠

室町時代の出色とも云ふべきは、此の歌謠の上にあるのであるが、秘傳などの弊害は定家時代より因襲して牢として拔くべからざるものとなつた、從つて、歌道は大に衰へて、勅撰集にも、見るべきものゝないことは、既に總說にをいて說いておいたが、謠曲、連歌は德川時代の先導として、尤も大聲を皷してをる、淨瑠璃如きも、謠曲から其系統を受けたとの說が、學者間にあり、兎に角連歌は當時代の特出点たから、之から說かう、抑も連歌の起りは、遠く上代にあつたが、此時代に於いて、尤も發達して、專門の大家さへ多く現はれた、かの二條良基宗祇法師荒木田守武、及び山崎宗鑑などは、或は改革主唱者、或は大成者、或は再興者として、尤も此社會に重大なる位置を占む る人々である、

連歌、連歌とは夫短歌の上の句と、下の句とを分けて、二人にて詠ずるものにて、一人上の句を詠

すれば、一人は下の句を詠じ、一人下の句を詠じて他を挑めば、一人は之に應じて上の句を附けると云ふ風であつたが、此時代に於ては、こゝに止めらず甚だ多くして連ねて、五十句、百句或は千句にも及んだものがある、其有樣は上句或は下句を共有したる、數多の短歌を連續した樣のもので殆んど連線として極りがない、然るに宗祇等の名人は、自由なる用語を以て、よく新思想を歌つた所から、その影響は忽ち下層に及んで、文學の趣味殆んど國一般に解せられることになつた、此影響は德川時代に及んで、一層の隆盛を見た、故に江戸時代の俳諧と稱するものは、全く此連歌に基因してをる、今左に其例を上げる、

心敬

けふも聞くうき身を鐘に耻ぢもせで

宗祇

老よ、いつまで散る花を見む、

道眞

鶯に語らひ暮らす野邊の里、

滿助

淋しやとはぬ春雨の中、

宗祇

たが里の鐘かとばかり聞ゆらむ

心敬

霜にふけゆく月のさやけさ

うらみし文に又ぞむかへる

若き世に學ばぬ道のかひもなし

此連歌は元日本武尊の詠歌（辱）新治、筑波を過ぎて幾夜か寢つる（火鑽男）かゝなめて夜には九夜日に十日に基づくと稱へて、連歌のことを「つくば」と云ふことになつた、かの二條良基の「菟波集」及び「筑波問答」は即ち此連歌の意てある、之を餘りに和歌に拘はつて、意が充分暢びてをらめと云つて、之を打破して「新菟玖波集」を著はしたのが宗祇法師である、宗祇の此舉は平民文學を起して、かの貴族的の和歌と相對したもので、尤も有價なものであるが、此後山崎宗鑑が「犬菟玖波集」を著はして、滑稽を交へたので、品等稍下つてゐた、

室町時代の連歌の名士では、まづ宗祇を推さなければならぬ、宗祇は古今傳授を東常縁から受けたことがある、然るに彼の天才は頗る不羈であつて、不自由なる韻文界には屈されないので、猪苗代兼載に連歌を習つて、大に發明し、當時絶倫の名家を以て推された、

牡丹花肖柏が「新式今按」を著はして、連歌の法則を追加したが、却つて法則に拘泥して、その精神を沒却する傾が起きて、衰運の元となつた、さて本歌調の連歌に對して、云へは變体とも云ふべき俳諧は漸く勃興した、

俳諧、此名は「万葉集」古今集にも見えてをるが、其當時のは、歌に戯謔を帶したものであるが、室町時代に勃興して、一種の派を開いた俳諧は連歌に應用せられたもので、俳諧の体連歌は一時天下を風靡した、其主唱者は荒木田守武、山崎宗鑑である、

武守は「飛梅千句」を著はし、宗鑑は犬筑波集をあらはした、前者は優美な雅對あるもので、後者は粗放卑野であるが、其諧謔を主とした点は同じてある、此頃からして擬句は、廢れて、發句のみが獨立し、所謂十七文字の韻文が、一個の詩歌として、諸はるゝことゝなつた、之が德川時代になると實に隆盛の極点に達するのであるから、注意してをかねばならぬ、

和歌、前々陳べた如く此時代の和歌は多く、見るべきものがない、其中南朝關與の人の歌集などには、多少あつたのであるが、何分此時代は和歌はさほど威張るほど立派に、遺産を吾人に與へてをらぬ、かの花園天皇御自ら撰まれたまふた「風雅集」の如き、多くは陳套淫靡を缺いた歌が多いやうてあるし、二條爲家の撰んだ、新千載集、二條爲遠の撰んだ、新千載集及二條爲遠の撰んだ新後十遺集の如きは、唯二十一代集の名目の中に加へられたのみで、殆んど實目の重いものでない、又かの飛鳥井雅世の奉つた、新續古今集は二十一代集の終末て、名だけは人に記憶され易いが、内容に至つては、少しも立派なものてない、

只前にも云ふ如く、南朝の英氣に養はれて、心裏一日も緩びのない、宗良親王の撰まれた、新葉集のみは、實に立派なもので、前後に絶した逸品と曰つてよろしい、何の爲めに流離艱苦の間に、奔走驅馳一日も暇あらせられざる、此方々の手に左樣な立派なものが出來たか殆んと疑はしいのであるが、此は外でもない御身自らに至誠肺腑より出づる、特所があらせられたのみでなく、集中の歌人多くは、南朝の忠臣義士で、其悲壯感憤の餘に吐いた、血涙其儘が歌になつてをるから、かやうに立派なものになつたのである、今日に至るまで新葉集が人に愛重せられるも尤もである、全体歌なるものは、一種の詩てあるから、至情の自ら溢れ出たものでなくては、到底讀むに堪へぬ左に宗良親王の御歌二首を示さう、

君のため、世の爲め何か惜しからむ
　　薬てかひある命なりせば

あやめひく今宵ばかりや思ひやる
　　都も草の枕なるらむ

宗良親王

親王について記載すべき、室町時代の歌人では、かの四天王と云はれた、兼好、頓阿、慶運、淨辨

の四法師などが、筆頭である、

契りおく花の双の岡のへに、　　兼好法師
　あはれ幾世の春をすごさむ

深き夜の露路の草葉は埋れて　　頓阿法師
　虫の音高し野邊の月かげ

朝日影にはへる山のさくら花　　庭雲法師
　つれなく消ねぬ雪かとぞ見る

庵結ぶ山の裾野の夕雲雀　　淨辨法師
　あがるもおつる聲かとぞ聞く

色かはる小野の淺茅初霜に

一夜もかれず擣つ衣かな

以上四人の中に、二首まで例を擧げた頓阿は、四天王中の王である、彼は元二條家の歌風を學んだが、聲調清新に氣韻も亦底くなり、彼が歌集に「草庵集」と云ふものがある、之は世人がよく弄ぶ所であるから、誰も知つてをる、爾來歌の事久しく、開こゆるものがなかつたが、東常縁と云ふ人が出て、歌道を既墜に救ふた、彼は世に所謂古今傳授を始めた人であるが、彼の歌集「常縁集」などはあまりよくない、よい歌は稀である、のみならず彼は傳授などよしなし事を搆ねこしらへて此道の衰廢を順致した、されど彼が當時に歌道を一時盛にしたことはない、彼は此道を有り難がらせる積りで、傳授などを始めたであらうが、それが後世の爲めに却つて、よくなかつたのである、此現象は定家卿などに見ることが出來る、とにかく室町最後の歌人では、先づ大田道灌を推さねばならぬ道灌は名を持資と呼んで、當時屈指の武人であつた、始め狩りして歸途雨に遭ひ、民家に入つて簑笠を求めしに、少女の言葉はなくて、山吹一枝指し出せしを「七重八重花は咲けども山吹のみの一つだになきぞ悲しき」と云ふ意であると云ふことを、悟り得ないで、腹を立たが、後に或人から此歌意を聞かされて、奮發して歌道に熱心したのである、つまり大に恥ぢて歌道に志したのである、道灌はどの人であるから、非常の上達で遂に名高い歌人と云はれて武道の方は人に知られ難い程に

なつた、

かの後土御門帝武藏野はいかんとの問に答へて、

露おかぬ方もありけり、夕立の空より廣き武藏野の原

とよみ重賴が敵の首を獲て、歌を請ふたとき、

かゝるときさこそ命のをしからめ、兼て無き身と思ひ知らねは

と詠した如きは、即吟とは云へ、中々立派なもので、腹中多少の畜へる所と、詩上の天才が添はねば能はぬ事である、彼の集には「菟玖波集」と云ふのがある、

つまり室町時代には、以上の外歌の上にて云ふべきはどのものは少ない、傳授免許の風は偶々以て平民の志想を離れ、別に連歌なる云ふ、自由自在なる野詩を開拓した、

謠曲は、元猿樂から起つたものである、猿樂の家は古からうれ〳〵の神社に隷屬して居て、祭典の日にこれを奉納したものであるが春日の祠には結城清次と云ふものが、猿樂の枝に巧みで、將軍の義滿に寵せられ、觀阿彌と名乘つた、その子の天清が亦寵せられて、これは世阿彌と名乘て、父子共に精勵刻苦して種々の新曲を案し出し、遂に謠曲の基を作つたのである、後世觀世流と云ふは實に此父子の名を取つたものである、其後音阿彌があり、其子に蓮阿があつたが、蓮阿は將軍義政

に寵せられた爲め、遂に之を武家の式樂とした、また同じ春日の祠に奉仕した猿樂家に、圓滿井、外山、坂戸の三家があつたが圓滿井は金春流の祖となり、外山は寶生流、坂戸は金剛流の祖となつた以上の觀世、金春、寶生、金剛では能の四座と云ふのである、謠曲の作者は、大抵四座の中の屈指なるものが、作つたのであるが、之等の多くは作曲家で、作文家でない、其文を作したのは、當時の博識才倫であつた、故に佛敎の影響は多大なるもので、仕組の多くが僧さんを相手である、江戸又山姥は一休和尚の作、卒塔婆小町は宥快の作、高砂および鞍平は僧正徹の作だと云ふことである、中には徹頭徹尾佛語を以て充たされたものがある、此謠曲を內容から區別して三種にした人がある、其說は次の通りである、

(い)神事又は佛說、祝言、信心等の事を述へたもの、(ろ)幽靈もの即ち精魂、精靈、因果等を主としたもの、(は)歷史もの即ち忠臣、孝子、慈母、節婦の敎訓を述へたもの、以上の三種であるが、

中にも幽靈ものの仕組に變化があつて謠曲中最上の位置を占むべきものである、

謠曲の文は、前時代文學の美文佳句を蒐集したり、又は點綴したものを、古今集、平家物語、源平盛衰記、和漢朗詠集、太平記、新古今集、曾我物語等は、其引用されたる書物である、故に其文面の美彩を故つて、美觀を呈するのは、其筆である、されど原本を見て此等に向へば、餘りに剽竊の

其だしさに慾く計りである、

狂言、謠曲の他に、狂言と云ふものがある、こは謠曲とは異つて當時の言文を其儘所謂言文一致に書いたものでむしろ散文に近いものである、然し乍ら一定の口調と長短の程度と、又或は散文に入れ難い所もある、狂言は平民的の文章で、滑稽諧謔人の胸を解くに足るものがある、

一例

大名　罷り出でたるは、隱れもない大名、このぢう御前に詰めてあれば心が何とやら屈して御座る太郎冠者を呼出し、何方へ遊山に參らうと存ずる、有るかやい、太郎御前に大名汝を呼び出すは別義でない、何方へ遊山に行かうと思ふが、何とあらう冠者はあ、內々は御意ならでも、申し上げうと存ずる處に、一段で御座りませう大名よからうかな冠者はあ大名何と西山東山はいつもの事、樣子の違ふた處へ行きたいが、どこもどがよからうな冠者誠に御意の通り、西山東山はいつもの事で御座る、これよりも下京邊に、心やさかたな御方が御座る、殊の外庭ずきで御座る、これへの遊山がよう御座りませう大名おゝこれが一段よからう、それへ向けて行かうぞ冠者はあ、さりながらこれへ御座れば、御歌をなさらねばなりませぬ大名うれはいかやうな事をよむぞ冠者三十一文字の言の葉を傳へた事で御座る大名あゝ、こりやなるまいわい冠者はあ、申し上げまする大名何とした

冠者それがし上京邊を通つて御座れば、若い衆の見物に御座らうとあつて、荻の花につけて、何つくろひをなされたを聞いてまゐりまして御座る、御前に敎へましやう大名やい、冠者其庭にも花があらうがな冠者誠に亭主すきまするのが、荻で御座ります大名ふん、その儀ならば急いて敎へい、冠者畏つて御座る、

七重八重九重ところ思ひしに、十重咲出る荻の花かな

と申す事て御座る、大名ふんしてそればかりか、冠者はあ、大名いやそれ程の事ならば、よまう程に、いそいでこい、冠者畏つて御座る、大名コイコイ、やい冠者、して今の歌のいひ出しは何であつたぞ、冠者忘れさつしやれて御座るか七重八重て御座りまする、大名おゝそれぢや、してそのあとは、冠者申し殿樣これではなりますまい、大名おゝなるまいわい、急いで戻れ、冠者申し殿樣、大名なんとや、冠者さりながら、物によりへたら、覺えさつしやれませうか、大名よろへ物によつて覺えうず、冠者即ち扇の骨によりへませう、七重八重と申すときに、七本八本ひろげませう、九重と申すときに、九本ひろけませう、十重さきと申すときに、皆なひろげませう、大名おゝ、これはよそへ物じやわい、やい、してまだ其あとがあるぞよ、冠者はあ是はよそへ物が御座る、大名ろれは何によりへるぞ、冠者即ち身共をば膕脛、ばかり伸ひ居つてとあつて、折檻なされまする、そ

の脚を思ひ出さつしやれませう」とやうに實に暗愚な殿樣は、當時一般の大名の有樣であつたので面白い、狂言ではすべて、主人公となる借侶鬼神、大名皆な、謠曲の反對に、一等を下つたものはかり出してある、之を圖を解く用意の一である、而して此狂言にも舞曲があつたので、後世の脚本小說なども、之が影響を受けたことが少なくない、故に文學史上隨分な價値のあるものである、

以上略ぼ室町時代の文學を終つたから、江戸時代に入つて、少し細密に筆を進めて見やう、

江戸時代の文學

總說

足利時代の文學は、此時代に比べると、とても話しにならぬ、衰微の極てあつたが、併し乍らよく考て見ると、德川時代文華の各種のものは、大抵足利時代に其根を植ゑたものが、發芽し同化したものである、かの淨瑠璃、發句の如きものゝみでない、皆な多くは其踏襲である、されば江戸時代の文學を語るものは、室町時代を忘れてはならぬ、さて家康が豊臣氏を滅ぼして天下を掌握した後ち頻りに道德を以て國家を治めるの方針を取つたから、從て學者が貴重せられた學者が貴重視せられるのは、つまり學術の盛況に赴くもとで、江戸時代の文學は、實に政府保護の下に發達したと云つてよろしい

然るに此に注意すべきは、文學が上下を通じて、行れたことで、前時代僅に其傾向を示したものが、茲時遂に其極に達して、あらゆる社會より文學者を出すことになつた、されど社會の階級は、尙ほ明治の今日の如く取り除ぼれなかつたから、上流は上流下流は下流と、文學に二大潮を生じた、而して上流社會は、上古を尊んで、保守的の傾きがあり、下流社會は、創設を喜んで、專ら野卑に流れた、此譯から、明治の始に至ても尙ほ純文學の大產物が、尊重されずに居た、つまり平民文學は上流社會から蔑視せられて居たために、獨斷卑陋な事を材料としたものが多かつた爲めに、上流社會から、其產物を尊重する筈がないと云ふ次第であつた、然れども實際は上流社會の人の學問は文學史上に、大遺產を與へてをらぬ、

今其大略を云へば、家康が、藤原惺窩(惺窩)を擧げ、其弟子林羅山(道春)を召し出して、儒道を以て學問第一着の手を下すと、天下靡然として其風を慕ふと云ふ有樣で、儒術の講說は、天下至る所に開けることになつた、家康薨去を去る、僅かの年代に於て、後古學を唱ふるもの、伊藤仁齊は其子東涯と、京の堀川塾で、門弟三千人を養ふてをるし、古文辭派には荻生徂徠、王陽明派に中江藤樹其門人熊澤蕃山、水戸學には、明の遺臣朱子琉、安積澹泊、折衷派に井上闇台、片山兼山、不偏不黨の派には、木下順菴の門下、新井白石、室鳩巢、雨森芳州、など皆な命世の才を以て、儒術を天

下に呼号した、世に之を元祿時代と稱へ、江戸文學第一期隆盛の極点であつた、

此時に當つて、(江戸時代の初めに、細川幽齋あり、幽齋の門下松永眞德あり、うれらより系統的に傳へ來た)國學と云ふもの大に發達し、下河邊長流、僧契仲等之を開拓し始めて、久しく埋沒せし國語古語の研究は年を追つて盛となり、荷田春滿を出し、賀茂眞淵を出し、漢學者(儒學)と兩々相對して、江戸學術海の二大柱となつた、俳諧に於ける、芭蕉淨瑠璃に於ける、近松門左衛門、狂歌に於ける平賀鳩溪、蜀山人、狂文には十返舍一九、式亭三馬など、實にわらん限りの文才を、現はして純文學の發展に勤めた、之を以て文學の海は、波浪沸き返つて千濤万波實に見事なものであつた、之を總るに、江戸時代の文學は、五代將軍綱吉の時代(元祿)一時に隆盛に赴き、種々の文學殘らず開拓せられ、八代將軍吉宗のときに、實熟し木肥えて、あはれ德川時代の文學は頂上に達したのである、今序を追つて之を記する前に、此時代に如何なる、種類があるか、略表に示し置かう、

- 漢文學
- 國文學
- 散文
  - 和漢混合文
  - 小說

江戸文學の種類

- 淨瑠璃
- 俳文と狂文
- 韻文
  - 漢詩
  - 和歌
  - 狂歌
  - 俳諧と狂句

漢文學、平安朝以來、久しく衰運に屬した、漢文學は、前述べた如く、德川幕府の起ると同時に、漸く頭を擧げ始めて、前古比なきまでの、隆運に向つたが、之が陳腐吳屠となつたのは、藤原惺窩林羅山である、此二人は德川家康に聘せられて、初めて已れの初志を成就した、則ち朱子の學を官學として、天下を靡動された、此時代は將軍から學問を勸めるので、古來菅原家、大江家のものと定つて居た學問も、誰人も研究するやうになつた、學問さへあれば、俄に出世も出來やうと云ふのが大に奬勵となつた譯である、されど此時分までは、儒者は皆な頭を丸めて居たので、凡う元祿の頃までは、誰も誰も皆な其通りであつたが、惺窩や羅山は申すまでもなく、谷時中でも山崎闇齋でも皆な其通りであつたが、考へて見ると室町時代の漢文が僧侶の手に歸して、永く民間に出なかつたた

めに、がゝる有樣になつたのであらう、

かの羅山は惺窩の門人で、非常に博覽强記な人であつた、幕府の官學を司つて、朱子學を廣めたのみでない、種々な著書もある、門人の多いことと云ふたら、また非常なもので、兎に角學問上大功勞のあつた人に相違ない、此時に當つて朱子の學は、幕府の力を以て、全國に植付けられたが、時にまた之に反對の學說を唱へるものもあつた、

かの近江國に居た、近江聖人とも云はれた、中江藤樹は、則ち其一人でこの人初は朱子の學派に、頭を差し入れた人であるが見る所があつて、後に王陽明の學に移つて、知行合一の說で、天下に鳴つた人である、朱子學に陽明學とは支那に於ても、已に久しく相敵對して、讓らなかつたものであるが、日本に於ても同じ事である、この人の門人に熊澤蕃山と云ふ人があつたが、備前の岡山の池田光政公に登用せられて、大に治績を顯はして儒學なるものが、政事上に大功績があると云ふことを証據だてた、茲に於て諸侯爭ふて學者を尊ぶ風を生じた、

惺窩の門人の一人で、松永昌三と云ふ人があつたが、此人の弟子に木下順庵と云ふ、師道の嚴重な人が江戸に來て、塾を開いて、新井白石、室鳩巢、雨森芳州など云ふ、大才を其門から出した、是が丁度元祿時代に當るので、其盛況も思ひやられる、こゝに又其頃生學や、王陽學などは、後世の

學問でつまらない、もつと本原へ切り込んで直に孔子の本意を探ねばなどゝ云ふ、太い考を持つた、伊藤仁齋先生は、當時塾を京都堀川に立てゝ、門下三千の人を養つて居た、此人は隨分見識の高い人で終身仕へる事を好まないで、貧賤に安じて居た、何しろ朱子學は官の勢を以て、盛勢當るものがない前に、堂々反對說を說へて、一勢力をなした程の人であるから立派なものである、其子に東涯其門人に河並天民があつたが、東涯は父にも勝る程の學者で、天民は仁齋の死んだ後ち、其門人を東涯と兩分して取つたと云ふ人物で、之も隨分の學者であつた、

此時江戸に復古の學を唱へて、仁齋に聲援を與へた學者に、荻生徂徠があつた、荻生氏には師匠はない、只大學諺解一冊から、聖人の學を悟つて、如何なる經書をも讀めることになつたと云ふ、天才である然るに中頃明の李千鱗、王世貞などの古文辭を學んで、復古學を主唱することになつた、また彼は博文强記で隨分自信の厚かつた方で、仁齋の行、蕃山の知に、我學を以て加へたなら東海再び聖人を出すなどゝ、言つたことがある、また大岡越前守が其才力を試めす積りで鼠の嫁入と云ふ、小說の嫁の名智の名、仲人の名、姑舅の名など、隙かさず曰詰めたので、淀みなく聲に應じて答へたと云ふほどの人である、彼は著書も隨分あるが、門人に太宰春臺服部南郭、山縣周南などがあつて、皆な當時の名儒であつた、

丁度其時明支那では、明朝が亡んで、其遺臣の朱子瑜（舜水）が、我國へ落ちて來た、此等の人は清朝に屈するのを恥ぢて、我國へ來たので、多少の義理も辨へた人と云ふので、水戸光圀公に聘せられた、此は彼の幸福で、光圀卿は自ら彼の門人と云はれて居る、大日本史を公が編纂せられたときには、舜水も手を貸して、大に骨折つたと云ふことである、

此迄で盛になつた漢學も、考へて見ると、僅かに百年の日子を費やしてゐる計りである、正朔の儒者が、只京都の一地のみに、居て、畿外（くわい）の地に、其餘光が及ばなかつたのから、此較して見ると、元祿時代のみにて大に勝つてゐる、何んとなれば、此時代は京都大阪、水戸細岡岡山等を主として各藩皆多少の學者を有して居たからである、爾其の主要なものを擧げて參考に資せやう、先づ之は元祿以後にも渉るのである、藥名の立歌館名古屋の明倫堂、水戸の弘道館、仙臺の養賢堂、會津の日新館、米澤の興讓館、金澤の明倫堂、姫路の好古堂、岡山の花畠教場、廣島の脩道館、山口の明倫堂、高知の教授館、熊本の時習館、鹿兒島の造士館、福岡の稽古所など皆に、書くにも云ふにも容易でない程ある、併し乍ら當時漢學者は多くは純文學の思想がない、已れの學問の外に、何物もないことを認めぬ、畢竟或覺の其方面に鈍い人々ばかりで、此に載するに足らぬ、若し當時漢學者の事を知らうと、思へば先哲叢談と云ふものが、後編續編全で出てゐる、之を讀めば、二百人餘り

の漢學者のことが書いてある、之を要するに此には省いて載せない、只之等の學者が多少日本化した漢文で歴史物の上に、少しの遺產を殘してゐる、今は其中の二三のみを記るせり、

大日本史は水戸光圀公の編纂せられたもので、隨分大部な書である、中には太平家なぞに誤らして事實を顛倒した所もあるが、其大体に於て、公が勤王の思想を發揮し神功皇后を皇妃位に取扱ひ南朝を正朝となし、弘文天皇を位に即けなぞ、其志士仁人を憤起さしたことは、少なくない、維新の大業も遠く其因を探れば、此書を度外視することは出來ない、日本史の体裁は支那の史記に倣つたもので多人數の手に成つたから、前後の文は一樣でないが、体裁はほゞ齊ふことをる、先づ國始つての好歴史である、

本朝通鑑、之も大部と云ふ点については、同じであるが、之は支那の通鑑に倣つて作つたものが、自ら體裁が大日本史とは違つてをる、これは羅山が始めて其子春齋が完成したもので、無慮二百七十三卷神武から、後陽成に至るまでの精細なる好史である、其体を編年史体にして、通鑑に模したが見たが、果して彼と對抗してをる、其材料を餘りに豐富に求めたから、出所の覺束ないものが多いのは、一の缺点である、

野史、之も亦二百卷以上に上る、國史の一つにて、飯田忠彦一人の手で、作撰せられたものである

が、意外に大著述である、大日本史以後の歴史を編述したもので、後小松天皇から、仁孝天皇までを載せてをる、体裁は全く大日本史に倣つたもので、之に劣らぬ、大著である、何しろ彼が一個人を以て二千餘節書籍を集め、以て此大著を成したる貢献は實に大なるものと云はねはならぬ、日本外史は頼山陽の著て、二十二卷しかない、併し乍ら彼が勤王の志を以て將軍歴史を編し、天下書を讀むものは、一人として此書を見ないものはないと云ふまでに、人氣に投じたと云ふのは、彼が文才と其見識の高きに基づくので、維新の事業に於て、大日本史に劣らぬ、功績があつた事は疑ない、

靖献遺言は僅々たる小冊子で、事跡は支那の事のみであるが、多少志氣を鼓舞するに於て力があつた、こは淺見明齊の著である、

先つ漢文學の事は、これ迄にしてをいて、愈々國文學の上に移らう、併し乍ら、文祿以前漢學者は大抵國學にも通じて居るし、殊に和漢混合之に於ては隨分手腕のあつたものが多いから、其時は漢學者をも引出て、云ふ積りである、

さて總説にもあつた通り、國學の此時代に勃興したのは、僧契仲以後であつて、之には自ら系統を生じて、明治の今日まで、綿々と續き來てをる、

契仲は、尼崎藩の士で、下河元全の子であるが、十一才の年に寺門に入り、十三才で剃髪して、高野山に登つたが、數年の後に阿閦梨の僧號を得て、攝津の國の曼陀羅院に住んだ、幼少より博覽强記を旨とし管に佛書を研究したのみでなく、國學にも深く精通してをつた、殊に音韻の學に通じ梵語との比較研究から、國語學上鮮からぬ、貢献をなしてをる、世の漢學者が、漢文學研讀に吸々として、をる間に、和字正濫抄の如き言語學上の好著を出したり、方案代匠記の如き、立派な解釋書を著はしたり、其他古今集を說ける、古今餘材抄を著し、源氏物語を註した、源註餘滴、伊勢物語の勢語臆斷、古事記、日本書記の歌論に註せる、厚顏抄を著はしたるが如き、之を當時の學海の事情に照して、卓見鴻識實に驚くの外はないのである、實に契仲は國語學國文學の中興の祖である、

契仲に次いで國學の大斗と仰がれ、大系統を作つて、江戸時代を貫けるものは、荷田東麿（あつまろ）である、彼は當時代國學者の四大人中の第一に數へられるもので其門下には非常の名人鴻儒を出してをる、

東麿の家は、山城の稲荷山の神主であつたが、彼は寧ろ國學研究を生涯の勤として、京都に國學の大學を建てんことを、幕府に請願した程である、幕府も當時湯島に昌平校を建てたときであつたから、京都に國學黌を立てるのは、贊成の方で、近きに許可にならうとしたが、東麿が死んで、其胞負は空しく歿んだ、彼の膽識は意外に大きくて、漢學者等を見ることは、全るで國賊の樣であつた

と云ふことである、また數十年間書を絶つて書を焼げた、原稿を後世に笑を残すも、遺憾だと云つて手づから焼き棄てたと云ふことである、彼は當時の漢學者が、己を忘れて支那をを崇信し、崇重し、餘りに我國風のすたれ行くことを、憤慨して起つたと云ふことは、明かに分るが、彼が研究の何處まで進んで居たかと云ふことは、遺稿を焼いたので窺ふことが出來ぬ、然し乍ら、彼は農方の遺稿より但、勝る所の門人を殘して去つた、餘人でもない、それは藤原眞淵である、

眞淵は性を新撰と名乘つたが、遠江の人で、三十七才のとき、始めて京に出で東塵の門に入つて、國學を研究した、後江戸に出で學を講じたが、門人の夥しきは驚く計りであつた、全体當時代の文學は、大阪京都を中心として起つたものであるが、後ちに之が江戸に移つたのである、眞淵の江戸に出たのは、文學更新の上に力があつたに相違ない、眞淵の歌は遠く万葉時代を慕ふて、殆んど其塵を摩するまでに上達した、其著書に冠辭考、祝詞考、歌意考、萬葉考などがある、皆考の字を伴じておるのが、彼が著の例であるが、中には前人未發の説も多いが、彼が衆魄と彼が才とを以て、考へるときは、彼は多く成功して居らぬ、彼は導く門人を養成する上に、大成功をしてをる、

眞淵の門人中、其偉大なるものゝみにて、加藤千蔭、村田春海、荒木田久老、内山眞龍、塙保己一、檜取魚彦、林鵞島等の如き、多くの名才頗る出して居る、彼は實に晩學の人ではあるが、學

問の程度は確に餘程の点まで上達して居たらしい、然れども彼が一時に名聲を博したのは、田安家に聘せられたのに依るので、國學が漢學と同じく、大名の召聘を受けること、は之が始めである、故に一時の名才英藪爭ふて、彼が門に遊んだわけである、要するに、彼の國學上に於ける、地位が重要であつただけ其影響も大きかつたのである、

春海は名文家を以て識られ、千蔭は和文に名を得、何れも一流の名人であつたが中にも春海は、漢學に長して居たため、主義は儒道に近く、其文は漢文を咀嚼して應用したものもあつた、故に己の思想を現はすに至つて、誠に特技を有して居た、千蔭は檜取魚彦などは、師説に基いて、万葉の何調を学んで、名を挙げたが、魚彦は古元祢を作つて學海に稗益した、かの群書類從を著はした、盲人塙保己一も、亦眞淵の門人であつた、眞淵の勢力は實に大なるものであつた、以上の門人のみでは國學の進捗に於て實につまらぬのである、彼は只本居宣長と云ふ、立派な門人を得たために、自らも其名も後世に高いのである本居宣長は伊勢の松坂の人で、醫を業としながら、傍ら國書の研究を愛したがかの契仲、眞淵等の書を讀んで、古學に志を立てた、眞淵は若命に依つて、伊勢に遊んだことがあるが、其時贄を納れて、門人となつたのが、宣長で隨分晩い門人であるが、彼は尊師の膝下に居ることを得ないで、書信を以て、其業を進めたのである、然るに眞淵は常に宣長を稱賞して、

我の死後を安ずるは宣長であると謂ふて居た。宣長が三十八年間の長日月を費して、古事記傳を著はしたのも、實に眞淵の委托に依つたものである。弟子を識る師に若かずで、眞淵の思つた通り彼は該博古今を絶した碩儒となつた、彼が後世に及ぼした影響の大なることは、四大人中の冠首である。其著述の大略を擧げて見ると、文典の萌芽ども云ふべき、詞の玉緒、萬葉集を解せる、萬葉小琴、歌論及韻律の事を論じたる石上淑言及び歴朝詔詞解で宣命を註し、其他字音假字用格、地名字音轉用例、漢字三音考、駁戎概言、國號考の如き、古今集を解せる、古今餘鏡、新古今集の語釋として、美濃の家包を著はしたる如き、打算し來れば、後人の職分を已一身に擔ふて分たないと云ふ感じがある。宜なり、後世の學者は、多くは其遺著を補修添改して、一歩も其上に否其以外に出るものがなかつた。つまり國學の研究は宣長の時代迄で、勃興の時代で、宣長を堺として、守成の時代となつてしまうのである。

宣長の一たび筆を手にするや、三句を經るも、一睡だにせぬが、稿成つた上は、七八晝夜睡を貪る。云ふ實に腦髓の確乎なる、氣魄の剛犀にして、意志の強固なる、古今稀なる所である。故に門人なる人は我師は人にはおはさぬ、神にておはするなどと言つて居たのも最なことである、あはれ此鴻儒の門下藝蘊して明治の今日に及び其學説を傳へて倦まざる、更に理なきことではない。

翁の門下に名を得たものは、鈴木朗、藤井高尚、平田篤胤、伴信友などである、朗の雅語音聲考は、實に言語の起原を發見して、彼の有名なる獨逸の語學者「グリム」に先じて、擬聲説を唱へてゐる。信友と篤胤とは、同じく宣長死後の門人で、皆共に大家と稱せられるが、中にも篤胤は皇學の主張に於て、熱狂燃ゆるが如く其氣宇豪邁で、學力も該博に、江戸時代國學者の四大人中に數へられてゐる。信友は有名なる考證家であつて、其精緻なる腦頭を以て、あらゆる群書を總合して、一定の見解の下に纏めてゐる。其他翁の弟子中、舊中貞麿、横井千秋、石塚龍麿、夏目甕麿、服部中庸、田中大秀、城戸千楯、齋藤彦麿、黒澤翁麿等の大家がある。

此時に當つて、江戸には加藤千蔭、村田春海、清水濱臣、海野遊翁、小林歌城、井上文雄などが威名を振つてをり、京都には伴蹊高、小澤蘆菴、富士谷成章、香川景樹などの名流がある、また堂上家では千種有功卿が出られ、大阪には荻原廣道、伊勢には本居宣長養子大平、足代弘訓、荒木田久老、紀伊には加納諸平、尾張には横井千秋遠江には内山眞龍、栗田土滿、石塚龍麿、美濃には、田中大秀、備中には藤井高尚などが皆夫れ〳〵一角の大家のみである。遠く肥前に中島廣足より、斯道の傳播は、實に海内に行き屆き其盛況恰も櫻花乱發の狀に譬ふべきである。

こゝに國學士の劇甚なる運動は、止つて前にも言ひし如く、守成の時期が近づきつゝ始つた、然れ

でも太平の門人、儒學門の如きは、言語上の著作も多く、亦學問深遠の人で、研究上優に一歩を、進めて居る、又御巻成甲は篤胤の門に出で、西洋の文典の長所を採用して、我文典に、八品詞の稱を用ゐてをる、尚宣流に渡つては、春海の門人に、清水濱臣、岸本弓絃、高田與清などが出た、皆中古文學の研究に力を盡して、貢献した所も少なくない、中につく與謝は博覽の名があつて著書も亦少なくない、主な千蔭の門人に、大名千引、加茂季鷹などがあつた、未だ其巨細を徴ないのみで、決して發達を來たしたのではない、

以上述べた所は、國學者の系統ある人のみであつたが、尚他に獨學以て能く之に比敵したものが、數多あつた、かの宣長に反對した橘守部の如き、德川時代の二大辞書たる、雅言集覽を著はしたる、石川雅望の如き、同じく和訓の栞を著した、谷川士清の如き、巨大の語彙塩尻を著した、天野信景の如き、皆な名人巨匠のみである、またかの有職故實の學に精通してをる、伊勢貞丈國文學史の證臨とも云ふべき、國文世々の跡を著はした伴高蹊、謡曲家の泰斗喜村季時、女流の歴史家、荒木田久老、方言考を著はして名高き、鹿持雅澄の如き、國學家中の群々たるもののみである、要するに學者の多くは專門を主として、研究は次第に繁密となると同時に、巨大の仕事が出來なかつたのである、

和漢混和文

前にも述べた如く、初めの漢學者は國文國語に通じて、訓讀及び文章も皆國法に從はんと勤めたから、訓点を施すにも、道春点(羅山)などは、後藤点などから見ると、餘程國語に近くて、誤謬が少ない、享保以來漢文が段々廣まつて來るなど、漢文學者は國文を離れ、國學者は漢學を排斥するようになつて、遂に漢學者は國文國語の法を知らぬことになつた、一海点などは、四書だけにした訓点でも、大に後人を誤つて居る、今日に至るまで實に其弊が殘つて居て、一掃も得られないであるされど前にも云つた如く、初期の漢學者は、うでない、國漢混合体の文を草して、國學者などを避易さしてをる、今の教科書の中にも是等の人の文章は多く取られてをる、其中で新井白石などが其中の名手であらう、

白石は自傳「折りたく柴の記」で、言つてをる通り、貧寒の家に生れたが其さに艱難を嘗めて、遂に將軍家に仕へ從五位下筑後の守にまでなつた、されど彼の本領は寧ろ、政事家の方で、文學の方が其餘業と云てもよい、併し乍ら、彼が學問上に貢献した所は、實に漢文で、專門の學者も及ばない其混合体の著書の中で、先づ指を屈するのは、將軍家宣の命に依つて作つた、藩翰譜である、此書は各藩の歴史で、卷數三十冊ある、元祿十四年七月草を起こして、十月には草を終へたと云ふのであるが、實に慶長から延寶八年に至るまで、八十一年間、三百三十七家の傳記を悉く詳かに網羅し

てをる、其文學の立派なるのは、實に驚くべきもので適勁の筆を用ゐて、而も典麗婉美の所がある漢に流れず、國に避せぬ所は、彼の手腕で、混同休の巨頭に推される所以である、あゝ我國の「司馬子長」「マコーレー」は、彼を措いて他にない、

次には彼の讀史餘論、三冊は、將軍家宣の命に應じて、古人の盛衰得失を進講したときの、講本と稱せられるものであるが、同一人の手になりたれど、これは史學上の聲譽が、文學上の價値に勝つてをる、日本外史などが多大の影響を此書に受けてをることは、世已に定論がある、

次は彼の同文通考で、文字假名の歴史を創說したものであるが、得易からざる文學上の偉產である

彼は只に我國の學術に精通して居たのみでなく、朝鮮語、琉球語、和蘭語にも通じて居たから、言語學の上では、比較研究と云ふ、立派な研究の鼻祖となつてをる、

折たく柴の記は、前にも言つた如く、自傳であつて、其名の起りは後鳥羽天皇の御製の歌（おもひ出る、折りたくしばの夕けぶり、むせぶもうれし忘れがたみに）から取つたらしい、其文章は落穎譜や、讀史餘論とは異つて、其文字語法に多く雅文を用ゐてをる、之も教科書に多く引用されてをるが、行文の瀟洒は却つて、前の二書にも勝つてをる、

今左に白石の文体を紹介する、

（濱翰譜）　大久保忠世兄弟長篠の働き

天正三年四月、武田四郎勝頼、甲斐の國を立ち、遠江の國を經て、三河國長篠の城に押しよす、德川殿御父子、うしろまきせんとて、うちたち、織田殿に加勢を乞はる、御使度々に及びて、信長父子數万騎の兵を將ゐ來り、あるみ原に打向ひ、流を前になして、柵を結で陣をとらる、此あるみ原といふは、南北に高山そびへて其間は三十丁には過ぎず、のりもと、瀧澤、ふたつの川、縱横に流れで落合たり、勝頼敵近付きぬと聞きて、長篠の城の上に當て、鳶の巣といふ山に要害を構へ、宗徒の士大將七人をとゞめて、其身は一万五千餘騎を引率し、瀧澤川を渡りてあるみ原にうち出、谷川を前におき、陣をわかつて十三ヶ所、西に向て扣えたり、兩陣の間、わづか廿丁には過ぎず、五月廿日の夜、酒井左衛門尉忠次、信長の軍兵を引具し、山路をつゞふて鳶の巣にむかひ、明れば廿一日の朝、かたきの要害を攻め落す、忠世が弟治右衛門忠佐、兄にむかひ、今日の戰は、我等が爲めには當の敵、信長の加勢に、先をかけさせんは、無念の次第なるべし、我等先にかゝりて、戰はばやといふ、忠世、いとしくも申したるものかなとて、德川殿に參りてかくと申す、足輕の弓鐵砲の達者引きすぐりて、兄弟に附けられたり、馬に乘ては懸引自由なるまゝとて、兄弟手勢も皆おりたもて、先陣をすゝむ、石川、本多、鳥居、平岩が勢、同じくつゞいて駈ち出づ、兄弟先づ足輕を

出し、敵に向て、鐵砲を一度に放つ、武田方にも（山縣三郎兵衛昌景、千五百人、是も同じくかゝ
ねつて、しころをかたむけ、面もふらず、大鼓を打ち、鬨や聲を擧げて進み來る、兄弟が兵、敵か
ゝればさつと引て、鐵砲を放ち、打散し、かたきひらけばとつて返へし、おめいてかゝる、小管、
廣瀨、三科とて、一人當千のかたきと、忠世兄弟と、名乘かけ〳〵、迫つかへしつ、九度まで攻め
たりければ、小管、三科、手を負いて引く、大將昌景鐵砲に當つて、馬より落つ、織田殿の方にて
も、佐久間左衛門尉信盛、六千人、瀧川左近將監一益、三千人、柵より外へうつて出で、馬場、內
藤にかけへだてられ、散々になつて引き入る、數万騎の軍勢たゞ一所に集まて、柵より外に出もせ
ず、唯遠矢に射取れやと、三千挺の鐵砲を一面に立並べてうち放つたる、織田殿はるかに太久保の兄
弟が軍するやうを御覽じて、家康が手の戰ひ、かたき味方、何れひまあるとも見えず、其中に金
の蝶の羽腰にさしたる、淺黃の幟に黑餅付たるを、敵かと見れば、味方となり、味方かと見れば、か
たきとなり、かたき味方のさかへ定かならず、誰かある、見てまゐれと宣へば、德川殿の御陣に馳
來りて、かくと申す、德川殿聞こしめし、あれは家康が侍、蝶の羽は、黑餅が兄、太久保七郎右衛
門忠世、黑餅は同次右衛門忠佐とて、蝶の羽が弟にて候と仰あれば、織田殿此よしを聞き給ひ、何
味方と申すか、さる候と申す、あつぱれ太剛の兵功家數す兄弟に似たらんは、信長が手のものには

未だ候はぬとぞ宣ひける、

其他白石と時代を同じうして、混合文に白石の推薦した、幕府の儒官に室鳩巣がある、鳩巣小說、
駿臺雜話、義人錄などの著があるが、皆相當の名文である、今其文例を示さう、

（駿臺雜話）　壬甲の年の試筆

日月迅に移りて、白駒の隙過ぎやすく、疲病日に侵して、黃金の術成りがたし、されば犬馬の齡、
是まで生るべしとも思はざりしが、いつしか老の波より來て、今年は七十あまり五つの春にもなり
ぬ、剩さへ近きころより、身に痿痺を得て、手足もあがらず、起居もなやめるまゝに、昔の童生を
學ぶとにはあらねども、此三とせ、春の園を窺ふこともかなはねば、園の中ながら、梢につたふ鶯
の音に、殘りの夢をさまし、枕に寫る梅が香に、過ぎし春をしのぶはかりになんありける、しかは
あれど幸に君かりし時より、學の窓に年を經たる甲斐ありて、程朱の道にしたがひて、鄒魯の步を
學ぶにぞ、老の寢覺も慰しぬべき、さても多くの年月を經て、世のうつりがはる有樣を考ふるに、
盛衰榮枯、互に行きかふをば、夢とやいはひ、現とやいはん、誠に富貴に浮べる雲の如く、禍福は
糾へる縄のごとしといへるに、何かたがふ事あるべき、中に、唯吾が聖人の立て給へる、三綱五常
の道のみ、天地と並び傳へ、古今の隔てなく、是ばかりは、かはる事あるべからず、人として、仰

き崇ふべきは、此道なりかし、然れども儒教行はれさりしより、人々義理に疎く、利欲にさとくなる程に五常の道すたれて、風俗日に下りゆくこゝろなげかはしけれ、もとより賤しき身にて、一代の風教を維持せんとするとも、わが力及ぶべきにあらねば、ひとへに蜉蝣の樹を動かし、精衛が海を塡むるに似たるべし、されはいへど、世を戒ひ、民を新にするも吾儒分限の事なれば、是を度外におくべきもあらず、いかなれば、世に老師宿儒と稱する人の、好みて異說を肆にし、又は他道を雜へて仁義五常の沙汰をばよそにするゆゑ、たゞ務めて新奇を學びて、俗耳を悅ばしめ、時好に投ずるなるべし、いと口惜しきことなり、古人のいはゆる阿世曲學とは、是等をばいふなるべし、よし人はさもあらばあれ、縱ひ風俗は昔にあらずなり又とも「わが身ひとつは、もとの如く」仁義の道を守りゐ、前修の模範を失はじと思ふこそ、責めて儒となりしるしとも云ふべけれ、

これに次ぐものは、貝原益軒である、益軒は福岡の藩士であるが、長壽を以て生涯殆んど、著書に耽けつた、其長所は、最も平易な和漢混合体を用ゐて、婦人小子にも、聖覺の旨が悟れると、云ふ所にある、養生訓、樂訓、大和俗訓、女大學など、擧ぐるに遑がないほど、著書が多いが、其文例はこゝに掲げずとも、諸君に知らぬものはあるまい、

その他混合体の文章家では、「とはずがたり」の著者中井甃庵、雲萍雜誌の著者、柳澤淇園などがあつたかの湯淺常山も、常山紀談で名高い、又成島司直は德川御實記附錄を著し、楠南谿は、東遊記西遊記を書いた、山崎美成の名家畧傳、近世畸人傳もまた、傳記類中の屈指あるものである、

小說

前時代に狂言記、御伽草紙などのあつたことは、已に述べてあるが、其系統を引いて、而かも幾層の巧妙發達を極めたものは、此時代の小說である、その種類に於ては、人情本があり、滑稽本があり、草双紙、浮世草紙、洒落本などがあるが、これは名稱の時々變れるのみでなく、其構造も少しづゝ異つてをる、其異つた点は端物に屬するものと、歷史物と、滑稽小說との三樣であると、大体の上から云ふことが出來る、其中最も能く發達したものと云へば、端物であらう、この端物は元祿時代に行れて、隨分名匠大家を出してをる、其中で井原西鶴、安藤目笑、江島其磧などは、巨頭株である、

井原西鶴は、大阪の人であるが、西山宗因に從つて、俳諧を學んで、大に得る所があつた、住日の社頭で、二万三千句を獨吟したと云ふ、あらい俳諧の名人であるが、すべて文學は、天才に待つ所が多いので、彼れは遂に俳諧の上に成就しないで、小說の上に成功した、彼の作にて、尤も有名なのは「男色大鑑」「好色一代男」「二代男」「三代男」などであるが、其内容が名の通りに淫猥で、餘りに露

骨にすつぱ抜いた所が多いので、固より諸君の讀むべきものとならぬ、教科書などには尚更成らぬが、只人情の實際に於て、極微の点まで、直寫しに寫して餘蘊を殘さない所が、彼の特技である、此特技は彼が大に名をなす所以で、馬琴の如き大才すらも、うの天才に服したと云ふ程である、戀愛小說に於て、殆んど後世の軌範であらう、故に純文學の上から見れば、大々的文豪と云つてよろしい、

世には八字屋本と名つくる、至極淫猥な小說であつた、今でも少し古い人は大抵知らぬ人は無からう是は京都の書肆は文字屋八左衛門が、刊行したから起つた名で、他の小說本まで、其勢力權内に引き込まゝしては、文字屋本と稱せられるに至ると云へば、如何に流行の盛であつたか、想像に難くない、之れには同京都書肆江島屋市郎左衛門其磧と云ふ者が、力を添えてをる、固より西鶴流の淫猥の者であるが、中にも其磧などは、已れ花柳の巷に入浸りて、自己の經驗をうの儘寫し出してをるうの名前を聞いても、今日の生徒諸君等は、手を引込まゝすと云ふ者ばかりである、かの「色三味線」傾城情の手枕「役者色仕組」の如き、何とて眞面目な明治の青年が手を出すべきや、されど所謂純文學上に、語を換へて言へば、倫理などの問題を忘れて見れば、立派な產物に相違ない、されど其流弊は恐いものであつて、三十年後に於て、明和の洒落本となつて、現はした、全体大坂は、昔からの商業地で、多少其土地に因由する点も、あつたが、江戸に之れを移して、下等社會の男女を痴

情に導いたのは、此洒落本である、誠に青男青女の痴情を直寫して、風俗壞敗の甚しきものがあつた、其極政府の禁令に由て、端物の形は變轉し始め、遂には人情本と云ふものとなつた、人情本も中々平民社會に嗜讀せられたもので、誰も知る所であるが、其巨頭とすべき作者は、爲永春水である、春水は式亭三馬の門人で、本名を佐々木高貞と云つて、号を狂訓亭と呼だ、もと一の書賈であつたが、前にも云ふ如く猥褻な端物が禁止せられた、後に人情本を書き始めたから、人情の嗜好から人々皆之に移つて、中々の流行を見た、人の嗜好は中々法令などで抑へ切れぬものと見えて、彼は梅暦、「辰巳の園」などを著して、所罰を受けた、今や内務省は發賣禁止を此書にまでは、及ぼさないが、只露骨にないだけで、西鶴の物と、同じく市井の子女を誤る点は、更に異らず、彼の作に尙「いろは文庫」と云ふものがあるが、之は赤穗の義士に就いての、歷史的小說であつて、前の樣な恐れがないのみか、實に賞揚すべきものである、歷史小說の上では、前時代の影響が、影響であるだけ、其結果が異つてをる、かの鎌倉時代に成つた、源平盛衰記や平家物語や、又室町時代の太平記などに、源を發した、此小說に或は仇討御家騷動、武者修業など、何れも勇壯活潑なる歷史的敍事を主としてをる、中に金平本などは、よく流行つたもので、後には草双紙と之を呼だか、之には每頁、繪を挾んで、繪の周圍には平假名を以て、本文を書いてあると云ふ誠に婦女子の好讀物であ

つた、かの天明文政の頃、有名てあつて、京傳、馬琴も之に筆を染めてをる、中にも柳亭種彦等は最も出色のものてある、彼の作て最も名高いのは、田舍源氏てある、之はかの紫式部の源氏物語を飜案して、足利時代の事に、作り替へたもので、公方の榮華を寫してをる、元來彼は畫の名人で、此田舍源氏の如き、その挿繪の精緻巧妙實に驚く計りで、家屋の繪など、之に依て建築すども、更に寸毫の差を見ないと、稱せられてをる、然るに惜しいことには、原本の源氏物語が、已に淫靡なものてあるから、餘程注意して書いた、此書も三十八篇で、德川幕府の、禁令に遭遇した、のみならず、彼は幕府の內幕を書いたのだと云ふ、嫌疑を受けて、心配の餘り死亡した、以上の所說にても、いかに德川時代の小說が淫猥で、風俗を壞乱するものであつたかは分る、中に讀本と稱するもののみは、其弊に流れず、又よく勸善懲惡の主義を貫いた、故に士君子の間にも、之は多く用ゐられた、此讀本の始めには、石川雅望の「飛彈匠物語」村田春海の「竺志船物語」などが、されど戲曲に近い所があつて之は、純全たる讀本とは云はれない、其讀本としての躰裁を具備して世に現はれたるものは、京傳であらう、

山東京傳は本名を岩瀨醒と云つた、京橋區の傳馬町に居たから、京傳と名乘たので、其人となりも已に察せられる、元來の讀書厭ひで、花柳の巷が、住家の樣であつたのみならず其妻は元吉原の

娼妓であつた、故に其廓の事情に明かなことは申すまでもない、彼は赤本類が禁止されて後、書肆から賴まれて、敎訓讀本と云ふものを書いたが、其內容は花柳の情史であつたから、幕府の御叱りを受けて家に幽閉せられた、此時から京傳は讀書の人となつて、一方に煙草見世を持つと同時に、一方には讀書に耽つた、その著した書の中で有名なのが、本朝醉菩薩。優曇花物語、稻妻表紙、等であるが、また他に近世立川跡考、骨董集などがある、

京傳は前に述べた通りで、堂々たる此社會の巨頭ではないが、其弟子に讀本作者の大秀才、曲亭馬琴を出だしたのは、彼の尤も大得意な所である、全体この節の戲作者は、大抵皆放蕩無賴の人が多かつたため、其小說も淫猥なのが多かつたが、馬琴に至つて、小說の品位は俄に向上して、敎訓を主とするものになつた、京傳も生前已に已の名を死後に沒するものは彼であると、許して居つたが果して江戶時代作家中の最巨頭となつた、且其著書の多きに二百九十餘種に達したと云ふことである、併し皆一々立派な者であつたか、どうかは知れぬ、先其中文章の秀逸なるものを擧げて見ると「椿說弓張月」とは源爲朝の事跡を書いたものである、又「南總里見八犬傳」とは、二十八年の長年月を費やして作り上げた、大著作であるの如きであらう、常に仁義と云ふ定木を置いて敎訓を世にしてをる、所は彼の長所で、賴豪阿闍梨怪鼠傳俊寬僧都島物語、靑砥藤綱模稜宰、近世美小年錄、俠

客傳、松染情史秋七草、昔語八丈綺談など、皆な多少の勸善懲惡の意を込めてをる、彼れは此くせざれは、小說を作るも何の功もないと、考へて居たのであらう、彼は元飯田町の下駄屋の入婿で、体が肥滿であつたから、人が力士になればなど、評した位である、此肥滿な馬琴が腹の中は、皆な文章であつたと思はれる、彼の一書て公にすれは、書賈爭ひ來つて、門前市をなす有樣であつた、彼の書は實に洛陽の紙價を上下さした、中にも彼れが八犬傳を作つたときの、艱難經營は實に云ひ盡し難い程で、彼は後には眼を病んで文學も錄にしらぬ、其妻に口で話して、書取らせたと云ふことである、其材料は水滸傳であるが、水滸傳の人物が、泥捧の寄合であるのに、此は皆仁義禮智信孝悌の一德を具へた人物計りである、故に面白い〳〵と思つて讀む中には、書中に含めた、訓敎が讀者を感化さすることは大なるものである、又其結搆の大なる所、八勇夫の活動が、各々特彩を放て、而も其結末を付けたるなど、後世小說を學ぶ人の好摸範である、

淨瑠璃

淨瑠璃は小野お通と云人が、淨瑠璃十二段草紙と云ふものを書いたのが始めて、元祿頃は近松門左衛門と云ふ名手に由て、非常の進步をしたことは、誰も知つてをる、併しお通の前に、已に淨瑠璃はあつたと云ふ人もある(種彥の「還魂志料」)(宗長日記)又お通其人も頗る異說かある人で、信長の

侍女とか、秀吉の侍女とか、或は淀君の侍女とか、色々の說はあるがお通の淨瑠璃は前に已にあつたのを、十二段に添削したのてはあるまい、

門左衛門は長門の人で、一時肥前の唐津邊て僧になつたことがあつたが、其後還俗して、京都で一條家に仕へたこともあつた、其後また辞し去つて專ら淨瑠璃と云ふものをかく、積漸に至つたと云ふのは、三味線が當時始めて渡り來て、否流行し始めて、其名手の三味線が、其心を勸誘して、筆を止め得せしめなかつたのである、抑も三味線は元泉州堺へ渡つて來たのである、薩摩淨雲など云ふ名手が、堺に出來て、之が江戸へ持ち出して、擴めたので、其弟子の虎屋源太夫が、京都へ出て元祿時代に、其孫弟子に受る、竹本義太夫が、大阪に出で、三味線は甘いし、色々の謠方を折衷して、長を取り短を棄て、誠によい節を拵へたのである、此義太夫の爲めに、筆を取つて、門左衛門が、作り始めたのが、緣になつて、作者は名人、語り手は上手と來て、非常の喝采を博した斯く評判がよくなると、本人も益々作るのに、張合があると云ふ風で、前に云ふた樣な境涯を彼に與へたのである、彼の戲曲は、二種やつて、時代物、世話物とからなつてをる、時代物は所謂歷史的戲曲で、其材料を歷史の上に取つたもの、世話物は社會的の觀察を其儘材料にしたのである、前にも言つた如く時代的の材料は、多く謠曲から、一轉し來たものであるから、源平時代の材料が多い、

かの「頼朝七騎落」「源氏烏帽子折」「出世景清」「紅葉狩劍本地」の如き、皆是である、中にも時代物でよく人に知られてをるのは、明の鄭成功の事を叙した、「國性爺合戰」曾我五郎、十郎兄弟の事を、叙した「曾我會稽山」で、皆共に名文である、

されど近松氏の本色は世話物にあるので、是は彼が末年に物した、即ち五十歳から死するまで書いてをる、その中で最も人に知られてよく出來てをるのは、「曾根崎心中」「女殺油地獄」「心中重井筒」「心中天の網島」などである、つまり彼れが技量は名もない、匹夫匹婦を捕へ來つて、其運命によつて人間社界の壯態を寫し出すのにあるので、彼は只淫猥を主としたのみでない、義理人情と云ふことを、放蕩息子、淫奔の婦女にも認めてをる、故に親に孝、君に忠と言ふことをば、婦女子にも勸めねばならぬやうに、敎へてをる、若し淫猥が當時の戲曲の常態だと云へば、其点だけは、勝つてをる、

彼に次て、竹田出雲と云ふものがある、出雲は阿波の人で、大阪に出で、竹本座の脚本を作つた、彼の盛りは享保年中であつたが、今日に傳へて尙ほ、名高いのは、菅原傳授手習鑑、義經千本櫻などである、其他三好松洛、並木千柳と合作したもので、假名手本忠臣藏など立派なものがある、此に一言すべきは、淨瑠璃は只、目に見るのみでなく、耳にも聞き、又演劇にも組むものであるから、

此三ツが揃はねばならぬ、出雲初は門左衛門の添削を乞ふたが、後に至つても、文藝の豐富と云ふ点に至つて、彼に及ばぬかつた只舞臺に登して、彼の者が、見映へがある、其變化出沒測られざる点は彼の天才に待つものであらう、

並木宗輔は、豐竹座の爲めに筆を執つたが、到底前の竹本座に叶はぬ所から、同濟の間に謀つて、一脚本の幾分づゝを分擔して完成さした、「一谷双葉軍記」「尊氏將軍二代鑑」「那須與一西海硯」などは皆有名である、

紀海音は、豐竹座のために「鎌倉三代記」「八百屋お七歌祭文」などの戲曲を作つたが、到底近松一派に及ばぬものである、

其他並木正三は「播州皿屋敷」を作り並木五瓶は「五大力戀緘」を作つたが、是も同じく、近松の側へも寄れず

近松半二と云ふは、竹田出雲の門人だが、之が出て竹本座も隆起した、之は大阪のある儒者の子で文章のはでな点は、門左衛門及出雲に劣るが、構作の完美は、却つて二人に勝つてをる、「本朝二十四孝」「阿波鳴戸」「近江源氏先陣館」「妹脊山女庭訓」「關取千兩幟」「伊賀越道中双六」など、今尙ほ劇場にのぼされてをることは、誰も知つてをる、つまり、門左衛門は其の戲曲の大斗、セークスピア

デ、空前絶後の戯曲家であらう、之に次くべきは出雲、又之に次くのはこの近松半二である、

以上の作家は皆な、大阪を中心として、其天性の才幹を自在に發揮してをるが、其時は、江戸は尚は寂寞な狀であつた。

中に平賀鳩溪は、かの「神靈矢口渡」「金毘羅御利生記」「相生源氏」「秘術工夫箱」「當世野夫論」など陽山な戯曲を作つて、江戸の缺陷を補ふてをる、されど之れが滿腔の不平を抱いて、諷刺罵倒を勤めて、純然たる戯曲になつたものは少ない、尚ほ外に三井元之助、鳥亭焉馬、近松德三、近松四翼などがある、中にも焉馬は「奥州白石噺」を德三は「箱根靈驗鑑の仇討」「朝顔日記」など、四翼は「伽羅先代萩」を作つてをるが、之等は可なりの作者である、又「錦山舊繪錦」は容揚黛の手になつて、女人に好まれてをる、

一體脚本とは、芝居の臺帳で役者の手控にしたものであることは、芳賀博士文學史講の中で、云はれて居られますが、舞台の模樣だとか、品物の配方、鳴物の順序、拍手、幕の上下げなどを記し、又は俳優のはたらき、みなりなどを「ユカ」の淨瑠璃の台詞の間に、記したものであつて、俳優自身に記すべき物であつたのを、淨瑠璃作者が兼ねをやることになつたのである、併し乍ら、其時期に至つては、淺學の輩のみで、立派なことは、固より出來てをらぬ、

俳文と狂文

通常の文章に俳諧的趣味を帶ひさしたのが、俳文で俳諧の名人になれば、一切の事皆な、其趣きに出來るので、文章でも骨折らずに、否寧ろ自然に其趣きに書けるのであらう、芭蕉、支考、許六、などは、有名な俳諧家であるが、皆な俳文は巧であつた、中にも許六の「風俗文撰」支考の「本朝文鑑」は多くの俳文を集めて、其粹を拔いたものである、俳名の巨頭に横井也有と云ふものがある、名を時般と名乘り、通稱は孫右衛門と云ふたが、尾張の重臣で、八十三の高齡で死んだ、その人の俳文は「鶉衣」の中に載つてをる、中にも袋の贊、百虫譜、百鳥譜の如きは、人も知る名文である、これ等は中學教科書にも、轉載されてをる、彼は尚「野夫談」「浦の梅」羅葉集、小皮龜などを著はしてをる、輕妙なる筆、奇想天外より來るとは、彼の事である、

也有の俳文は、實に古今に獨歩すべきものであるが、其後也有ほどのものは、出て居ない、俳文が一段崩れて、少し滑稽の趣味を加へ、言文一致体に、出來たものを、狂文とこゝで云ふ、俳文が俳諧師に作られたる如く、狂文は、狂歌師、これは戯曲家が多く作つた、品位は少し下るが、却つて興華面白い所がある、其作者には隨分文士でが面白いのが多い、一体狂歌師は名前さで、狂歌とみてをるのは、自然の趨勢でもあり、また作者わざと、遠慮してをる所もあらう、其中にて福内鬼

外の名のある、平賀鳩溪、手柄岡持、蜀山人、宿屋飯盛、北川眞顏、芍樂亭長根などは、皆な〳〵一角の名手であるが、かの十返舍の一九、式亭三馬など、天才のあるには、かてなかつた、

十返舍一九、本名重田貞一は幼名幾次郎と云つたが、元大阪で淨瑠璃を作つたが、後には江戸に來た、彼が先天的特能は、滑稽にあると見ゐて、かの道中膝栗毛を著はして、聲名を博した、彼の生涯は實に滑稽であつた、其滑稽の中から、此材料を得たので、頭を捻つて、考へ出すやうな滑稽では、到底此極に達し得られぬ、

式亭三馬の本名は、菊地久德で、江戸のある書肆の養子となつたことがあるが、離縁の後、茶肆を開き傍ら小說を書いた、かの「浮世風呂」「浮世床」の如きは、狂文として、膝栗毛に並ぶものである、三馬は隨分筆が達者で、一氣呵成天馬空を行くが如き趣きがあると言てよい、故に僅かの卷數のものは、瞬く間に書き上げるがそれだけ、文章の結構や字句の精練に惜しむべき、点がある、之は天才の然らしめるので止を得ない、

狂文の集には、風來山人(平賀)の「六々郭集」蜀山人(大田南畝)の「四方のあから」などが、有名である、

凡そ淨瑠璃でも、俳諧でも、甚だしきは、國名でも、かの儒者先生お盛りの世には、一厘の價値もないやう、に見侮らして居た、故に狂文などと來た日には、話にもならぬつまらないものであつたが、文學の眞價が世に知れ渡つてから、是等の者が、崇重せられる樣になつたのは、喜ばしいことである、却つて道學先生ころ、今は何處にありとも、人々の注意を拂はぬものとなつた、これも開け行く世のお蔭である、淨瑠璃は近松以下の作者は、多く悲劇を物したから、この狂文などは、價値は下つても、喜劇は一端に上して、並べ稱せねばならぬ、文學の世人に益ある、其慰藉を之に受けるのにあるのである、

江戸時代の韻文

〈漢詩〉

歷史及地理講習會の發行にかゝる、本邦文學史の中には、漢詩を我文學史上から、省くのを偏破の所爲と呵してをる、漢詩の作者の中で、日本化した、漢詩を作るものは、此韻文の部に入れるのである、彼書の取る所は、石川丈山、管茶山、大窪詩佛、服部南部、賴杏坪、朝川善菴、賴山陽、梁川星巖であるか、余輩も稍々同意するのである、殊に梁川星巖や、菅茶山、賴山陽などは、誰も之を非難することは出來まいと思ふ、

梁川星巖は美濃の人で、江戸に出て古賀精里、山本北山などに學んだか、此の詩才に富んで、星巖

集八卷は、皆な錦繡の文學を集めたものである、日本の李白の稱は、僞でない、今其一例を擧げて示さう、

常盤抱孤圖

雪壓笠擔卷袂、　呱々索乳若爲情、　他年鐵拐峯頭嶮、　叱咤三軍是此聲、

峯頭には險はないなどゝ云つて、此詩は人に彼是云はれた詩だが、先づこゝらが日本的詩の趣きである、

賴山陽の詩才は、世自ら評がある、彼の(日本樂府)は隨分面白い、彼れが若年の時に作つたと云ふ蒙古來の詩、豊會を詠じた裂封冊の詩など例を擧げてもよいが、これは寧ろ擧げぬ、誰も知つて居るから、

菅茶山は備後の人で、福山侯に仕へたが、其集に「黃葉夕陽村舍詩」がある、彼の詩はよく小兒のときから、聞かされたが、餘程日本的に近いが、未だうでもない所もある、服部南部の南部文集にも立派なもののみが蒐められてをる、要するに詩人としては上々の人である、

其他日本化した詩は、維新前後の憂國の志士の間に作られた、詩の本場から云へば、どうだかと思はれても、感に隨て詠じ事に觸れて作る、誠に一種の和歌となつてをる、

和歌

此時代の初期に現はれた、學者はすべて復古的のものみであつたが、これは時勢がうゝさせたので室町と此時代との間には、殆んど二百年ほどの暗黑時代「學問上」があつた、爲めに、一時皆な此傾きを以て居たのは、漢學、國學の別はない、皆同じである、されど後には、段々進新の趣を生じて來た、これも時勢のためである、和歌の如きも、万葉時代を摸するとか、古今集にとか、云ふ風であつた、復古學者の先鞭者下河邊長流の曉花集、僧契仲の「漫吟集」などは、古今集などには及ばぬが、中には可なりの名吟もある、是より古風の甚しき、殆んど万葉集を其儘摸倣した、賀茂眞淵は、遂に名手の名を得なかつた、只長歌を多く作つて、万葉に近いと云ふのみが、特長である、其後人で、村田春海の琴後集、橘千蔭の「うけらが花」などは、少しく立派でも、まだ〳〵右に及ばぬこと遠しである、

小澤蘆菴は、尾張の人で、冷泉爲村の門に學んだが、つまり江戸時代の歌人としては立派な人である、彼は格式に拘泥せなかつただけ、うれだけ新機軸を出だしてをる　本居宣長も蘆菴をば擧めてをる、當時尙伴高蹊、僧慈延、僧澄月などの名手があつた、是等は四天王と云つて、一つに評せられたが、今日から見れば、他の三人は到底蘆菴に叶はぬ、蘆菴の歌に「旅人のかつぐ袂に雨見ゐて、雲

たちわたる木曾のかけはし」と云ふのがあるが、中々よく出來てをる、彼の集は「六帖詠藻」である
が、先々此時代の歌の至極秀でない中では、立派なものである、未た他に香川景樹と云ふ人がある
是も蘆菴と同じく歌の名人で、歌調の流麗と、奇想の富豐なるとは、之を天品と云はねばならぬ、

大堰川かへらぬ水に影見ゐて
今年もさける山ざくらかな

燈火の陰にて見ると思ひしに
文の上白く夜は明けにけり

治まれる御代の例に引きて見ん
手にはとられぬ弓張の月

狂歌彼の調は自由自在なものである、其「桂園一枝」は彼が歌書であるが、實に立派なものである、
又彼は今古集正義などを著してをるが、あまり解釋の方では、秀でゝ居らぬ、門人には、八田知紀、
熊谷直好、渡忠秋、木下幸文等がある、
江戸時代の歌人は、前にも言つた通り、平安朝の如く、上々の人々でなかつた、之は後の物は何事
も俗のやうに、意の淺いやうに思はれるのであらうか、あつぱれの學者も遂に蘆菴、景樹の二人に

歩を讓つてをるのは、實に殘り惜しい事である、

狂歌、俳諧、狂句

狂歌は遠く、万葉時代に其源を發してをり、又平家物語などに、所々見えて居ることは、誰もく
も知る所であるが、近世に至るまで餘り勢力を有せなかつたが、江戸時代となつて、諸般の文學が
次々に起るにつれて、古今獨歩の名人が現はれて、文學史上の幾頁を割くまでは勢力を振つた、和
歌に對するの狂句は、和漢文の狂文のやうなものである、狂歌と云ふからには、元滑稽を主とする
に相違ないが、中には太田南畝の如き、己れが天才を抱き乍ら、輒軻不遇に居るを恨んで、世を諷
刺したものもある、今其作物の例を擧げて見やう、

定家卿の五百年忌　大屋裏住

鶯も蛙も同じ歌仲間
經よむもあり唯泣くもあり　四方赤良

世の中に蚊程うるさきものはなし
ぶんぶと言ふて夜もねられず

へちま　　水端

世の中は何のへちまと思へども
　ふらりとしては暮されもせず

時鳥　　朱樂管江

時鳥みうかに鳴きて過ぐる夜は
　後に殘れる月影もなし

歌よみ　　宿屋飯盛

歌よみはへたこそよけれ天地が
　うごきだしてはたまるものかは

八月十五夜　　仝人

いかでわれ項羽の力もちの夜に
　月のかくるゝ山を拔かまし

以上の狂歌は、先づざつと當時の上々の物のみであるが、其奇想其滑稽實に感歎せしめるものがある、又彼著の名乘やいかに笑止しきよ、彼等皆多少の依所あつて、わざと本名を隱してか樣な狂號

を用ゆるものは、自らも眞面目にてはなかりしものであらう、中にも四方赤良と飯盛とは、數万狂歌師中の魁師である、

四方の赤良本名は、大田南畝即ち有名なる、蜀山人である、寢惚先生などゝ云つた事もある、彼は非常の天才であつた、江戸昌平黌の入學試驗に於て、學業の朱子に異る点があると云ふ、言葉の下に入學が出來なかつた所から、漸く世を敗果なむの心を生じて、遂に放縱酒落の狂歌師となつて、世を諷刺した、彼の文武「ブンブ」の狂歌の如きは、松平樂翁公が、武士たる者は、文武兩道の心掛を要すると、云ふ見解から、甚夜其奬勵に勸めた結果、武士共の非常に苦しんでをのを諷刺した歌である、蚊のぶんぶと文武とを掛けて、餘り文武々々の奬勵で夜も、ろくゝ寢られぬ由を詠んだものである、彼の天才のいかに狂歌に適したるやは、さてをき其神速にして万言口を衝いて出るのみならず、奇想縱横に人寰間以上の感がおつた、かゝる狂歌などの如きものは、苦辛經營して作るなどゝ云ふべき種類のものでないから、蜀山人などは、獨歩の名人と宜されはならぬ、彼の著述には「一話一言」「假名世說」「浮世繪類考」等である、よほど博學にもあつたと、見える、宿屋飯盛江戸の人で、本名を石川雅望、別號を六樹園と云ふたが、雅望と云ふ名をきけば、直ちに盛は雅言集覽の事が思ひ出される、彼は實に德川時代の二大辭書たる、此書の著者である、彼の戲名

は、彼の家がかつて宿屋を業として居つた所から、付たのだと云ふことである、彼は狂歌百人一首万代狂歌集、源註餘滴の如き書を著はしてをるが、何しろ學問の深底が、堅いから、同じ狂歌でも和歌を種として來てをる、されば多少の心得あり、學あるものでなければ、彼の狂歌は解せぬことが往々ある、天地が動くの歌は、古今集の序に天地をも動かし、目に見えぬ鬼神をも感せしめると云ふ事が書いてあるのを取つたので、項羽云々は、力山を拔き、氣は世を蓋ふの項羽の詩から取つたものである、彼の狂歌を集めたものに、狂歌題林抄、狂歌スマヒ草、狂歌武射志風流、德和後万歳集、狂歌才蔵集があるが、野卑に落ち又彼の作意は感ずべきも其天縱の才は大田南畝に讓るものがある、

こゝに又俳諧と云ふものがあるが、こは鎌倉室町時代の連歌が變形して成つたものである事は、にも言つてをいたが、此十七文字歌の創立は、前時代にあつた、寛永年間には、松永貞德と云ふ、和漢文者が出て、宗鑑の誤謬を匡正して一式を立た、彼の淀川御傘、油濃などの著は、全く之が爲めに出來たのである、故に此時より滑稽奇智の遠し出した俳諧は、優美風雅のものに代へられた、貞德は德川初代の頃の人で、世に彼を古風と名けてをる、

彼は學者だけに、門人を澤山持つてをるが、俳諧の方の弟子では、野々口立圃、安原貞室、鶏冠井

令徳、山本要武、松江維舟、北村季吟、高瀬梅盛等である、然れども彼の門に於て、最も巨頭と云はれるのは西山宗因である、かれは古風の俳諧を墨守せず、別に一派を立てゝ一檀林風と云ふたが此檀林風の俳諧は一時天下を靡動さしたものである、彼は元浪花天滿に住んだが、延寶の頃に、江戸に移つた、彼の連歌の師は里村昌比で、彼は狩野探幽の女を娶つて、畫をも手に入れた、のみならず、武藏もよく出來たと云ふ、何しろ「天才のある人であつたが、是が畢生の力を俳諧の上に注いたのであるから、其達所は想像推察に難くない、かの小説家の井原西鶴も彼弟子で、其田代松意等が有名な彼の門下である、此檀林風の漸くぼろを出すまでに崩れかゝつたときに、大聲疾呼して俳諧界の木鐸となつたのは、古今絶双の松尾芭蕉である、故に宗鑑が俳諧の大祖となつて以來、名人が六人つゝいた譯で、六家と云はれてをる、宗鑑、守武、貞德、貞室、宗因、芭蕉である今其例に

涼しさのかたまりなれやよるの月　貞室

月やあらぬ我身一つの影法師　貞德

白露や無分別なるおきどころ　宗因

物言へば唇寒し秋のかぜ　芭蕉

古池や蛙飛び込む水の音　仝人

松尾芭蕉は伊賀の藤堂家の臣で、本名をば忠左衛門と云ひた、雅號も隨分多いが、芭蕉が一番よく分る、北村季吟に俳諧を學んだが出藍の才物で、此道では遙かに古今の名人を踏み付けてをる、西行法師の人となりを慕つて、禪を嗜み老莊の學に通じて天晴の豪傑である、彼が行脚僧の如く、天下を跋渉して至る所に名吟を詠み棄てゝ、句碑などになつて遺つてをる事は誰も知る所であるが、彼の長所は、己れの本領を俳諧に現はして、高潔深趣の所にある、芭蕉の俳諧風は正風と稱へて、全く檀林風の惡弊を滌洗したものである、彼は又和學に精通して文章も巧であつた、其著に「奥の細道」があるが、いかにも感心に堪へた、彼の俳諧は誰人も知つてるが、尙其名句を掲げて見た

花の雲鐘は上野か淺草か　道の〳〵の木槿は馬に喰はれけり　明月や池を廻りて夜もすがら

夏草やつはものどもが夢の跡　春の夜は樓に明けて仕舞ひけり

芭蕉は名人なることは、云もがな、彼の門下に其頭角を現はしたものが、十人もあり、世に之を十哲と稱して居る、此等は皆な優に古今の名人で、其餘先尙は今日に殘せ芳しい

榎本其角　服部嵐雪　森川許六

向井去來　立花北枝　河合貞良

志田野坡　内藤丈草　各務支考

越智越人

以上の人々は、要するに一種の奇才と、抱負の異つたものばかりで、清淡隱逸物で情趣を求めた、然れども其後次第に無學の下流社會に落ちて、其韻致とか高雅とか云ふものは、見られなくなつた、所謂俗化して仕舞ひたのである、只獨り谷口蕪村と云ふ、名人が出て僅かに之を極堅に了はらしめなかつた蕪村は攝津の人、漢學の才あつて、俳諧を好み、遂に一風の詠み方をなした、歌の長所は幽玄なるより寧ろ、卓拔にあつて、物の一邊を捕へて、全体を畫くの妙を備てをつた、蕪村の句また今日に至つて、愛讀するものが多い、

春の海日ねもすのたりのたりかな、風も唯柳に二百十日かな、二百十日一日雲に心ある、春花に鮮はで歸るさ惜し白拍子、日は斜闌屋の鍵に蜻蛉かな、

なぞは少し正風派に異つてはをるが、また口調の輕妙、寄想の洒落侮り難いものがある、加賀の千代は「はと〳〵さすが〳〵とて明けにけり」と詠んだ名人である、女だけに優美なものを讀んでをる、

朝顔につるべとられて貰ひ水、紅さいた口も忘るゝ浦水かな、千なりも蔓一すぢの心から、

俳諧のことは、こゝに止めて狂句の事を少し述べやう、和歌に狂歌が起るやうに、俳諧に對して狂句と云ふものが、起るのも不思議はない、又規則正しいものより、不規則で易いものは世俗に觀迎せられるのも、自然の數で、天明安永頃に起つた狂句は非常に俗物に面白がらした、

柄井川柳は江戸の淺草の人で、狂句の元祖である、川柳は家に傳へた號で、四世まで傳へて、始めて風を變へた、人見周助と云ふのが、四代川柳で、彼は「俳命柳多留」を著してをる、殆んど彼の創意である、五世は水谷金藏で、此人は大に狂句の高尚を謀つた、所謂道德的、格言的狂句を咏じた人がある、此人にも「新編柳多留」がある、

怠らず勵め使はぬ桶は洩り、手持なく辭世をはめて醫者は立ち、欠伸する度々笠の緒をしめる

輕くなるヒサゴに足は重くなり、路間へば一度に鬪く田植笠、

狂句も俳句と同じく、漸次につまらぬものになつた何物でも、學力ある人がいろ〳〵間はよいが、世俗に流れ入つては、卑野になるのは、自然の道理である、

こゝに注意を要するのは、江戸の文學はもと京都大阪を中心として起つたのであるが、然るに此狂句狂歌などは、すべて江戸に生した文學である、此現象はどうも關東人と關西人との間に、性情の異る所があることを示して居りはすまいかと思はれる、

されば今後と雖ども、此傾きは免がれない所であるが、之は少し後て待たねば定は出來ぬ、されど歴史は往事を操り返すものであるから、豫想も甚しくば誤るものでない、とにかく文學が世人に必要なるは、何處の点にあるかと云へば、此狂歌、狂句、決して價値の少ないものではない、

結論

江戸時代の文學は、略已に之を說了つたと思ふ、明治の文學は年所未だ多く經ざるにも拘はらず、非常なる隆盛を來たされた趣きがあるが、何しろ三十七年の少日子であるから、今なほ〳〵わるものの論斷の出來難いもの、價値の定め難いもの、などで之を評說する事は到底六ケ敷い、要するに泰西諸國の文學が、流入すると同時に、此新思想に動されたる、文學者は、應接に苦んで暫くは躊躇した次第である、德川時代の文學は、其儘遺されてあるし、此新思潮は起るし、年數は短かし、之と云ふ程の大家の出ぬのも無理はない、かの新聞紙なるものが、發行されて新聞記者と云ふものが、始めて生れ出てた此等は政事の方面、文學の方面、其他あらゆる方面の知識を備へて居るからは、一角の才人智士に相違ないが餘り雜駁でうさい仕事も最初は出來なんだ、今其一二の人士を擧げて見ると、成島柳北、福地源一郎等が、其先達で、末廣鉄腸、矢野龍溪等は漸く泰西小說を輸入し、新文學の基を開いた、森田思軒など、非常の文才を以て、其翻に傲ふたが、早生して大成を得なか

つた、田口卯吉が日本開化小史を著はし、島田三郎が、開國始末(伊井直弼傳)を著はして、史學の上に一生面を開く、三宅雪嶺、朝比奈知泉、德富蘇峰、黑岩涙香などは、追々創刊せられた日本、東京、日日、國民、萬朝などの新聞紙上に、新聞文學の大聲を皷しつゝある、而して此等泰西の文學の影響をして、早くも此くの如くに至らせた、張本人は誰であるかと云へば、福澤諭吉其人である、彼はまた七五調の文を起して今日新体詩の基をなしてをる、世界國盡などは、よく賣れた書である、小說の上では其後尾崎紅葉を出たし、幸田露伴を出だし、山田美妙齊を出してをる、講談ものに村井紱齊、お伽話に巖谷漣山人是等は皆な命世の才を以て、大に當時代に鳴つてをる、其他學者と云ふ學者、文士と云ふ文士、皆な稍科學的智識を具へて、眞正に進歩してをる、此勢を以て進めば、近き將來に於て人智の至り得らる、ある一点まで到達するに相違ない、とにかく明治の代は諸君のよく知つてをる事であるから、多く說かぬ、之で諸君とお分れにする、

完

明治中學會編著

中學全書

言文一致

國文講義

全

發行所　東京　明治中學會

つた、田口卯吉が日本開化小史を著はし、島田三郎が、開國始末（伊井直弼傳）を著はして、史學の上に一生面を開く、三宅雪嶺、朝比奈知泉、德富蘇峰、黑岩涙香などは、追々創刊せられた日本、東京、日日、國民、萬朝などの新聞紙上に、新聞文學の大聲を皷しつゝある、而して此等泰西の文學の影響をして、早くも此くの如くに至らせた、張本人は誰であるかと云へば、福澤諭吉其人である、彼はまた七五調の文を起して今日新体詩の基をなしてをる、世界國盡などは、よく賣れた書である、小說の上では其後尾崎紅葉を出たし、幸田露伴を出だし、山田美妙齊を出してをる、講談ものに村井紱齊、お伽話に巖谷漣山人是等は皆な命世の才を以て、大に當時代に鳴つてをる、其他學者と云ふ學者、文士と云ふ文士、皆な稍科學的智識を具へて、眞正に進歩してをる、此勢を以て進めば、近き將來に於て人智の至り得らる、ある一点まで到達するに相違ない、とにかく明治の代は諸君のよく知つてをる事であるから、多く說かぬ、之で諸君とお分れにする、

完

明治中學會編著

中學全書

言文一致

國文講義

全

發行所　東京　明治中學會

國文講義

國文の講義もいろ〳〵あつて、今更こゝで餘計な樣ではあるけれども、中等教育の國文といふものは、何も別に專門家が攻究するやうな、面倒臭い、小楊枝で重箱の角を掘るやうなことはいらない、たゞ何をするにも、この學科の力が入用のときに、いつでも應用するだけの得心がゆきさへすればよいのであるから、何も一つの極まつた本を用いずともよろしい、そこで予がこの講義もたゞいつでも應用が出來るやうの實力を養成する方針で選むつもりである、就いては書物は勿論何ともきめあい、程度を見計らつて、だん〳〵に六かしいものに進むのであるから、初の內では、どんなことになるか分らぬが、辛抱して居ると自然に力がついて來る、

講義の仕方は、漢文と同じやうにやるが、たゞこゝで斷はつて置くことは、程度と事柄の關係に氣を付けるといふことであるが、何事でもさう〳〵御誂向に出來るものはない、程度を甘くすれば事柄の關係はさう〳〵構つて居られない、尤も

今の教科書とかいふものゝやうに、矢鱈と事柄の關係ばかりに氣を付けて、肝要の程度が滅茶にするのは譯もあい、直きに出來るが、ソンな杜撰なことは出來あい、實力を養成するには、程度を適當に斟酌して、トックリと得心させるのが第一であるから、予の講義は程度に目を着けてゆく、

二

老僧の接木

鳩巣　室直清

老僧は、年老た坊主のこと、○接木は、木を接ぐといつて、木の幹に、外の木の小枝を切りて、接ぎ生やすことで、亞接だの寄接とか呼接とかいふものもある、

この文は漢文の説体であつて、或る一つの話をもつて來て自分のことゝか人のことゝか、何か外のものごとに落す体である、今翁もからが鳩巣自分自身のことに落して來たので、それから前はたゞ將軍家と老僧との問答を書いたばかりである、極めてやさしい文章であるから、一一文法を話さずとも解るのである、

この文の作者室鳩巣の傳は、漢文の方で話して置いたからその方を見れば分かる、

將軍家、谷中わたり御鷹狩のありし時、御かちとこゝかしこ御過ぎがてに、御覽ましけるが、此の寺へも、たもほえず渡御ありしに、折ふし其の時の住僧、八旬に及びたるが、庭に出でゝみづはぐみつゝ、手づから接木して居たり。

〔摘解〕將軍家は、だれともハッキリ解らぬ德川綱吉でゝもあらうか○わたりは、邊のこと、○鷹狩は鷹を使つて狩をする、○かちとは、徒歩でといふことで、乘りものもあく歩くこと、○こゝかしこは、ソコ、コヽといふこと、○がてには、ツイデにといふこと、○ましは、御座るといふこと、あるといふことを敬ひていふこと、用ふ語である、○此の寺は、何寺か確かには知れない、たゞこゝにいふ老僧の居る寺のことをいふ、○おもほえずは、思はず、又は思ひがけなくなといふこと、○渡御は、御渡りのことでお出でになること、貴人に用ふ、○折ふしは、丁度この時といふこと、○住僧は寺に住つて居る僧である、○八旬は、八十のこと、○みづはぐみつゝは、水で木を培ひながらといふこと、みづはぐゝみつゝであらうか、それとも老人のたつしやのことにみづはくむといふことがあるから、たつしやの風をしあが

らといふことであらうか、此處では矢張り遠者の方にするがよからう、○手づからは、自からといふことゝ同じで、自身手を下してといふ意味である、

〔通解〕 將軍家が谷中のあたりで御鷹狩をあされたときであるが、御徒歩でこゝそこ御通りながらついでに御見物して御出であさつたが、この寺へも思ひがけもなく御出でなされた、ところが丁度そのときその寺に住つて居た僧で八十にもなつて居るのが庭に立ち出でゝ、逢者に自らで接木をして居た、御供の人々は、おくれ奉りて、御側には二人三人つき奉りしのみありければ、やんごとなき御方とは思ひもよらずそのまゝ背きゐたりしを、「坊主なに事するぞ、」と仰せられしかば、老僧心にあやしとやおもひけむ、いとはしたなく、「接木するよ、」と御いらへ申しゝかば、御わらひありて、「老僧が年にて、今接木したりとも、其の木の大くなるまでの命はしれがたかるべし、それにさやうに心をつくす事、ふようなるべきぞ、」と上意ありしかば、老僧彌々ふづくみて、「御身は誰人なれば、かく心かき事を云はるゝにか、よくたもひて見給へ、今此の木どもをづきておきなば、後住の代に至りて、いづれも大きになりぬべし、然らば林もしげり、寺もくゝみぬん、我は寺の爲をたもひて

するなり、あながちに我一代に限るべき事かは、」といひしをきこしめして、「老僧の申すことこそ、尤理なれ、」と御感ありけり、

〔摘解〕 奉りては、敬ひていふときに自分の動作につけていふ語、○やんごとなきは、やむことあしといふ語であつて、貴いといふこと、○背きは、背をそむけてといふこと、○ぞは、かといふ疑問であるが、上から下のものにいふとき用ふ、○あやしは、ヘンとか妙なとかいふこと、○いとは、最の字が當るので、この上もないこと、○はしたなくは、あいそおきこと、○いらへは、返答挨拶すること、○ふようは、いらぬといふこと、不用とかくのだ、○彌々は、前よりもなほといふこと、○ふづくみは憤ることで、ムツとしてをこること、○心かきは思慮のないこと、○あながちは、強いてむりにと、いふこと、○かはは、反語で、あるものかといふこと、○きこしめしては、聞きてといふことを敬ひていふ語である、○尤理は、尤も至極といふ意味で理一字でもつともといふのである、○御感は、御感心といふこと、

〔通解〕 將軍家にお供をして居た人々は將軍家が御徒歩でおいでになるのにおくれておいつかなかつたものであるからお側について居たものはホンの二

人か三人しかなかつた、それだものであるから老僧の方では將軍家ともいふ貴いお方だといふことを知らないのは勿論のことで、將軍家などゝは思ひもよらなかつた、それで背をむけたまゝ振り向きもしないで、一生懸命に接木をして居ると、將軍家は「坊主は何をして居るのだ」と押柄に仰しやつたから老僧は心の中でヘンだと思つたのでもあらうかあいそもせじもなく「接木して居るのだよ」と返事した、それだから將軍は可笑しかつたと見へて御笑ひなされて「老僧のやうおよい年でもつて今接木したからといつても其の木が大きくなるまでお前の壽命があるかないか知れないではないか、それだのにそんなに心を盡して一生懸命で接木などすることはいらぬことであらうぞよ」とまた上意があつたから老僧はあほもムッと憤りて「御身は誰人であつてそんな思慮のないことを云はれるのですかよく〳〵考へて御覽なさい、今私がこの木なんかを接いで置いたならば私の後にこの寺に住ふ僧の代になつてどれもこれも大きい木になるでせうしたならばこゝの林も茂つてよくなりこの寺も黒み奥床しくなるで御座りませう、であるから私はこの御寺のためになるといふことを思慮へてするのであつてあにもむりに私の一代さへよければそれでよいと自分の代ばかりに限つてすることでは御座いません」といつたのを將軍家はお聞きなされて「老僧の申すことは尤もの次第である」と仰せられ御感心遊ばされた。

その程に御供の人々おひ〳〵來りつゝ御紋の御物ども多くつどひしかば老僧それに心づきて大におそれて奥へにげ入りしを御めしいだしありて物など賜りけりとなむ

〔摘解〕 その程には、そのうちにといふことで、○おひ〳〵は、だん〳〵といふこと、○御紋の御物といふのは、將軍家の御定紋葵のついて居る品物をいふので御供のものなんかが將軍家御用品をもつて御供して居たからその荷物をいふのだ、○つどひしかばは、集つたからといふこと、○それに心づきは、その品物などに氣がついて將軍家であるといふことがしれたといふ意味で○物などは、いろ〳〵の品物などをいふことで、○賜は、與ふといふことを敬ひていふときに用ふ、タマハリと讀むのは敬稱して用ふるである、

〔通解〕 さうかうして居るうちに、お供の人々が追々來るし葵の御紋のついた

物おどが澤山に集まつたから、老僧もそれに心がついて、將軍であつたといふことが知れたものであるから、これは大變なことを致した、將軍に對して失禮なことをいつたから、定めしお咎めでもあるだろうと、大變に慌れこはがつて奥の方へにげこんでしまつた、處が將軍家にはお召び出しになつて、いろ〳〵の品物を御下し置かれたといふことである、

今、翁も彼の接木しけむ老僧の如く、老イ朽ちぬれども、ある限は舊學をきはめて人にも傳へ、書にも遺して、後世にも傳ふべし、これによりて、もし正學の開くる端ともなり、此の道のために、萬一の助ともなりなば、翁死しても猶ほいけるが如し古人のいはゆる、死しても骨くちずといひしこそ、思當り侍れ、いささか我が身の爲に謀るにあらず、諸君も、翁がこの意を信じ給へかし、

〔摘解〕今は、現在まのあたりをさしていふときに用ふ語で、○翁は、鳩巣自身が私といつてゐるので○しけむは、したといふといへること○ある限は、この世にある限りといふことで、生きて居る間といふこと○舊學は、古き學問といふことで、昔の學問をいふのである、○きはめては、究めてといふことで研究することを

いふ、○傳へは、口で傳授することと○遺しては書き遺してといふこと、○正學は、正しい學問といつて人倫道德の學問をいふ、尤も今の(デモハイカラ)なんかのいふ口先きばかりの人倫でもなければ道義でもない、實踐躬行の學問といつて身を修めて聖人ともなり賢人ともある學問であるこれも今の中學や小學で教へて居るツマらぬ修身學とはちがふたゝ人前ばかりを飾る似而非ものではない眞正の聖人賢人とある學問である、○開くるは、開け明かになつて行くこと○端は、ものゝ端といふことで、始まりのことをいふ、○此の道は、上にいつた正學の道である、○猶ほ、まるで、丁度などゝいふも同じこと○侍は、ありとか居りとかいふ語を敬ひていふときに用ふのである、こゝではその意味でマスといふ意味にとるがよろしい○いさゝかは、少しといふこと○意は了見のこと、○かしは、念を推していふ意の感動詞である、

〔通解〕今この翁の私も、前にいつたあの接木をして居たといふ老僧のやうに年はとつて朽ち果てる即ち死んで仕舞ふけれども、まだ生きてこの世の中に居る間は古き學問を研究して人にも傳へるし書物にも書き遺して後の世にまで

ち体へるからして、これでもつて正學の開ける片端にでもなつて此の道のために萬分が一の助けともなつたならばこの翁の身は死んで仕舞つても精神は書物やあにかになつて遺るからまるで生きて居るのも同じことである、古の人が「死んでも骨は朽ちはしない」といつたことが今はゝたと思ひ當るのである、かういふ風であるから私が今いろ〳〵のことをしたり話したりするのも少しも自分の身のために謀りてするのではない、自分ばかりのことを思ふのではないことは接木して居た老僧が自己一人のためをはかつて接木したのでないのと同じことであるから諸君もそのつもりでこの翁の了見をまことゝして信じて下さい。

善に遷る

益軒　貝原篤信

善といふのは、道理にかなつたことをいふのである、遷といふのは、或ところから或ところへうつりかはつてゆくことであるから、善に遷るといへば、道理にかなつたよい方にうつりゆくといふ意である、

この文は學問をするものゝ心得にあることで眞の正しい學問といふのは鳩巣の文の中にあつた正學であつて實踐躬行といふことを離れない修身の學である、修身の學をするには善に遷るといふことが肝腎であるといふことをかいたもので、今の若い人などには極く〳〵適切した戒めであるから一言一句も等閑にしないで讀んでほしいものだ、

この文を書いた貝原益軒といふ人は、筑前の福岡の人で山崎闇齋とか木下順庵とかいふやうな學者について正しい學問をした人である、さうして世の中の人のためになることや物を濟つたりなにかする實用と云ふことを主とした人である、それで自分が學問して信じた道理をこの世の中に行はうといふ積りであつた、さうするには自分の意見を世の中に發表しなければならぬ發表するには成るたけ廣く誰れにも解るやうにしなければならないところから著した書物には和文でかいたものが多い家範、鄉訓、大和俗訓、養生訓、女大學あんどといふものはみな假名文である、しかし今の學者のやうに假名文ほかゝけぬといふ人では

ない、漢文もかけるから憤思錄、初學知要、自娛集などいふ漢文でかいたものがある、今の口先ばかりは國粹とかなんとかいつてもホンの漢文のかけないといふことをかくす卑劣手段に過ぎない奴とは大違ひである、姓は貝原、名は篤信、字は子誠といひ、益軒は號であるがまた損軒とも號した正德四年に八十五歳で死んでしまつた

學問は、身を修め、人倫の道を行ふを以て根本とす、身修まらざれば、人倫の道行はれず、身を修むる道は、善を見ては遷り、過われば改むるを以て要とす、身を顧みて人に責めざらむことを務むべし、人の善を見ても遷らず、吾が過を知りても改めざるは一向道に志なき人なり、

〔字義〕學問といふのは、自分よりも先きに道理を辨へ知つて居る人のすることといふことを眞似て覺えるのをいふのである、先きに道理を辨へ知つて居る人の眞似するのであるからこちらには少しは疑や解らぬところがあらうそれを問ひ質すのが問といふものであつて學と問といふものは離れることの出來ない關係をもつて居るから學問といへば漢文の方でいふ學一字でも澤山なので

ある、かういふと人は本を讀むのは學問でないかといふ觀念を起すであらうがそれは皮相の見である、そも〳〵吾々より先きに道理を辨へ知つたものは大抵この世に居ない、たとひ居たとしても親しく就いて學ぶことの便りがあるものは少ない、そこで致し方がないから昔からの先覺聖人賢人のいつたことや行つたことを記してある書物を讀み覺えてそれを手本としてやつて行かなければならぬ、であるから學問といふものは行つてゆくことを覺えるためであつて行といふものを離れて學問といふものはないのである、詳しいことは後日漢文の方で話さう、○身を修める、身といふのはこの人間の体を具へた身である、その身を程よくとゝのへゆくのが身を修めるといふことである、たとへば人の子となつては子たる身は親に孝を盡すといふことが身を修めたのである、○人倫、人間の筋道といふことで、人間といへば必ずしなければならぬ筋道である、人間がこの世の中に居るときは他との關係についてそれ〴〵の筋道がなくてはならぬ、第一に自分の出て來た親といふものがある、この親といふものと自身との關係は自然について居るものである、次に世の中に出る上は、君といふものがある

それから自分より年の上のもの尊いものまた朋友といふものがある、また夫婦の關係も生じて來たのであるがこの五つの關係であらゆる他に對する關係は盡されて居るであるからこの五つの筋道を五倫といつて人間のする筋道としてあるが之を取り聚めていふと父子有親、君臣有義、夫婦有別、長幼有序、朋友有信の五個條となるこれを一一講義すると長くなり過ぎてしまふからこゝでよして置かう、○道は、往來の路と同じことであつて、人がどこかへゆくにもそれ〴〵順路があつてその路を通らなければ行くことの出來ない路がある、それと同じに人間となつてる以上には人間たるものゝ行かなければならぬことがある、そのことが即ち道といふもので、往來の路といふ字からかりつけたのであつて之を借字といふのである、○行は、やつてゆくことで、○根本とは、草木が根と本とがあつて生長すると同じて大事の〳〵といふことを根本といふのである、○過は過誤過失といつて失策のことをいふ、つまり道理と思つてしたことが道理であかつたといふやうなのが後であつて初から道理でないと知つてするのは惡事で過ちとはいはないのである、○改むは、わるきことをよきやうになほすことをいふのである、○要は、扇子の要といふ字であるが肝要といふことにいふのである、扇子も要がなければ開けたり閉めたりして扇子の用をたすことが出來なからう、扇子の要が扇子になくてならぬと同じやうに、善を見ては遷り、過あれば改むるといふことは身を修むる道になくてならぬことであるからこの字を用いたのである、○身を顧みては、自分のことを自分で考へ見ることである、自分の身のことを考へるといふこと○人に責めざらむことは、他人に對して負はざることと即ちアヽしてもくれさうなものカウしてもくれさうなものと人に對して負はせることをいふのである、○務むは、勉の字とは違つて、本務とすることで精を出すといふことではない、尤も精をだすといふ意も含まれて居るけれども本務として精を出すのがこの務むるといふことである、○一向は、いつかうに、または どんどなどいふのと同じである、○志は、心の之く所を志といふとあつて、人間の心が、あアしやう、かうしようと動き活らいた所をいふのであつて、つまり、コヽロユキといふことである、

〔通解〕一体學問といふものは、自分の身を修め、人の人たる人倫の道を行つて

ゆくといふのが、土臺根本となるのである、されば自分の身が修まらないときは人倫の道は行はれるものではない、してまた身を修むるといふのには方法がある、人の善いといふことを見れば自分がそのやうにしてゆき、自分に過があつたならば、改め直すといふのが肝要のことである、自分の身に立ちかへつて、自分の善惡を考へ、自分に出來るか、出來ないかを考へみて、他人に對して責むるやうにすべきである、しかるに他人が自分より善きことがあるのを見ても、その善いことに遷らず、自分に過ちのあるのを知りながらも、改め直すといふことをしないものは、とんと道といふことに志のない人である、

（章意）學問は修身倫理を行ふのが根本である、學問の根本を修めるのには、善に遷るといふことが第一である、

（文法）學問の根本を說き、善に遷ると遷らざるとによりて、道に志あるものと道に志なきものとを分つたので、これまでを第一大段とする、

過を知らば、惜まずして速に改むべし、學問の道は他なし、過を知りて能く改め、善に遷ることをむねとするにあり、學者常に心にかけてつとむべし、過を改めんとならば、まづ吾が過を知るべし、人の過はしり易く、吾が過は知り難し、そは人を見るには私なきが故に明なれども、吾が身には私を交ふるが故に暗ければなり、吾が身に過ありて、知らざるは愚なり、知りて改めざるは惡なり、其罪深し、

（摘解）惜は、物を捨て難いことで、ヲシガルなどいふと同じことである、○速は早くといふことで、すぐにといふこと、○他なしは、外ではないとか、外にはないとかいふときに用ふ言葉である、○能は、俗にいふヨク何々をしたものだなどいふヨクと同じである、○むねは主といふのと同じで、それ一方に重きを置いてすることである、○學者は學問をする人のことで、今いふ學問の出來る、博士や學士を、アレは學者だから出來るとかなんとかいふ學者とは違ふのである、つまり學生ともいふべきものである、○常には、平常といつて、いつでも變りなく、即ちふだんといふこと、○心にかけては、念頭においてといふことで、忘れずに心をつけてといふこと、○ならばは、假りに定めてといふときに用ふる語で、俗語にも、何々するならなんどいふと同じである、○まづは、マア第一にといふこと、○そは、それはといふことで、或る事の譯をいひ出すときに用ふ語である、その譯はなどいつ

てよからう、○私は、私事私曲あんどいつて、自分負目をすることをいふのである、○愚は智慧の足らないものを愚といふのである、○惡はわるいことゝいふことなり、○深は、水の底深きをいふのであるが、それから罪の多く大きいのに用ふことゝなつたのである、

（通解）過があるといふことを知つたならば、早速に改めて仕舞ふべきものである、一体學問の方法といふものは他ではない、過を知つたらよく改め直し、善に遷るといふことを主とするのである、それゆへ學問するものは、平常から絶へずこの過ちを改め善に遷るといふことに心をつけて、つとめ勵むべきである、して また過ちを改めんとするならば、まづ第一に自分の過といふことを知るのが必要である、全体他人の過といふものは、ぢきに知ることが出來るけれども、自分の過といふものは、なか〳〵知ることが六かしい、それはどういふ譯であるかといふに、他人を見るには、負目といふものがなく、極めて公平に見ることが出來るから、分明とわかるけれども、自分の身を見るときには、負目自惚慾などが中に交るものであるから分明ないで、暗くなるからである、して見れば自分の身に過

がありてもそれを知らないのは、つまり自分を知るといふ智慧の足りない所から起ることであるから愚といふものである、また過のあるといふことを知りながら改めないのは、惡き事であつて、最早や惡人となるのであるから、其の罪といふものは、深きものである、

（章意）善に遷るのには過を改むるのに在るので、自分の身の過を改め善に遷るのが必要である、過を知りて改めないのは惡人で、知らないのは愚人であるから、どちらも取るに足らないのである、

（文法）過を改め善に遷るの必要なることを述べたので、みんな前段を承けて說いて居る、愿むものはよく〳〵前後を照らして見てほしい、是れまでが第二大段となるのである、

明鏡も、その裏を照さず、智者も、吾が身を知ることは暗し、故に君子は、先づ吾が身を顧みて過を知り、道ある人に交りて、其の諫を聞き、過を改めて善に遷ることを樂みとす、是れ學問の益なり、人、些なる贈物を受けてだに悅ばぬはなし、まして過を告げられ、善言をすゝめらるゝをや、過を聞くことを嫌ひ、諫を容るゝ事を厭ふは、不善の

至なり、凡そ人の惡事多き中に、諫めを云ふ人を惡み、吾が過ちを改めざる程、大なる惡はなし、

〔摘解〕明鏡は、明かにうつる鏡のこと、○照さずば、うつさぬといふこと、○君子はこゝでは、盛德の人といつて、道理を辨へて、行の修まつて居る人のこと、○道ある人は道理のある人といふことで、人にすぐれた賢人をいふのである、○諫は、惡しきことを戒め正すこと、○益は、利益のことで、俗にいふトクといふこと、○些は僅かのこと、○贈物は、つかひもの、即ちみやげなどいふもの、○善言は、善い言葉といふことで、自分のためにある教訓の言葉のことをいふ、前にいつた諫などを指していふのである、○至は、この上もないといふこと、○凡は、すべてといふことで、なんでもかでも一体にといふことである、

〔通解〕いくらよくうつる鏡でも、裏をうつすといふことは出來るものであいそれと同じことで、いくら智慧のある、道理を辨へたものでも、自分の身を知るといふことは、暗いものである、それであるから、君子といふものは、まづ第一に自分の身を考へて見て、自分に過があるかないかを知り、道ある人と交はりをして、其

の人の諫を聞いて、自分の過を改めて、善に遷ることを樂しいことゝするのである、これはみな學問の利益であつて、この上もないよいことである、一体人といふものは、少しばかりの贈り物を貰ひ受けてさへも、喜ばしく思はないものはないのである、まして少しばかりの贈り物どころではない、一生涯の身のためにある過を告げられたり、善き言葉を進められたりするのだもの、この上喜ばしいものはあまい、ところか自分の過を言はれるのを嫌つたり、諫を容れることをいやがつたりするのは、この上もない惡い事である、凡て人といふものゝ惡い事の多い中にも、諫をいつてくれる人を惡く思つたり、自分の過を改めないといふほど、大きな惡いことはないのである、

〔章意〕自分の身を知らないといふのはたれしも免れないことであるが、それを道ある人に交はりて忠告して貰ふのが必要である、諫を厭ふほど惡いことはないから、人は過を聞くといふことをつとめて求めなければならないのである

〔文法〕、鏡も其の裏を照らさぬことを譬喩にして、何人も自分で過を知ることはなか〳〵困難のことであるから、人から諫められるのを容れるべきものだと

いふことに落したのである、

〔總說〕此の文章は學問をするものに必要なる心得は、自分のする事、又は爲たる事が惡いときは、直ぐに改めて善い方に遷るべしといふことを述べたもので、一つの議論文である、して此の文は、三大段に分けるのである、第一大段は、學問は身を修め、といふ初から、一向道に志ある人なり、までゝある、此は、また二小段に分けられる、第一大段中の第一小段は、學問といふものは、人倫の道を行ふのが根本である、併し人倫の道も、身が修らなくては行はれるものでない、而して身を修めるには、善に遷り、過を改むるのが必要であつて、自ら責めて、人には責めぬのが第一の心得であるといふことをいつたもので、先づ第一番に、題目の善に遷るといふことが、學問をするのに、極く〳〵の必要であるといふことを說き起したのである、第二小段は、一寸第一小段の裏から說き示したので、上にいふ通りであるから學問をするものが、善に遷り、過を改むるといふことをしないものは、道に志のないものであつて、學問をする本意に反して居るといふことを說いたのである、此の二小段を合せて第一大段、とするのであるから、第一大段では、つまり善に遷ることは、學問の根本義であるといふことを說いたものである、

第二大段は、過を知らば、から、其の罪深し、までゝある、而してまた之を三小段に分けられる、第一小段は、過だと知つたらば早速に改むべきものである、學問をするには他に方法はない、過と知つたらば改め、善に遷るのが主であるから、學問をするものは、平常にこの事を心がけて勉强すべきであるといつて、一大段でいつた、善に遷り過を改むといふことが學問の根本であることをいつたのである、二小段は、上にいつた過ちを改むといふことは、第一に自分の過を知るのが必要である、何故ならば、他人の過は知ることは容易であるが、自分の過を知るといふのは困難であるから、他人の過を知るよりは、自分の過を知るのが必要なのである、何して他人の過は知り易いかといふに、それは、他人を見るには私情がないから、善いも惡いもよく見える、併し自身を見るには、私情を交ふるからよく見えなくなるのであるといつて、過を改むるためには、自己の過を知るのが必要であるといつたのである、第三小段は、上の二の小段とともに合はせて收束したので、自身に過あるのも知らないのは智慧の足りない愚者であつて、改めないのは、惡き事であつて

非の罪は深い、自分の過を知らないのは、固より愚であるからよくないが、過あることを知つても、それを改めないのは、惡であるから、尙ほ更らよくない、其の罪は一層大きいといふことを說いて過を改め善に遷るべきことを、細かに說いたのである、この三小段を合せて第二大段とするのである、つまり第二大段は、善に遷るには、自分の過を知るべしといふことを說いたものである、

第三大段は、明鏡も、から、大かる惡はなし、まで丶ある、而して、これもまた三小段に分けられる、第一小段は、明鏡でさへも其の裏を照らすことは出來ない、人もいくら智あるものでも、自分の身を知ることは暗い、であるから他人の力を借りなければならない、君子といふものはこのことを知つて居るから、自分の身を顧みて過ちのあることを知り、道ある人と交はりて、その人の諫を聞き、これによりて過ちを改め、善に遷ることを樂みとして居る、是れが學問の益で、學問をした甲斐といふものである、といつて、上の過を改むるには、人から諫められるのを聞くべしといふことを說いたのである、第二小段は、人から少しばかりの貴ひ物をしてさへ悅ぶのであるから、學問をする根本たる、過を改むるための善言を受けたら、尙

ほ一層悅ぶべきである、もしその過をいはれ、諫められる丶ことを嫌つたり厭がつたりするのは、此の上もない不善である、といふことをいつて、人の諫を嫌ふべからざることを說いたのである、第三小段は、いはれて悅ばなければあらぬ諫をいつて與れる人を惡んで、自分の過を改めないほど、大なる惡事はないといつて、諫は必ず悅んで聞かなければならぬことを說いたのであるこれが第三大段の結末であつて、また全体の收束である、つまり第三大段はこの三小段を合はせて、過を知り善に遷るには、他人の諫を用ふべしといふことを說いたのである、

以上三大段を合せて、善に遷ることを說き盡くして居る、第一に善に遷るのが學問の根本であつて、過を知るのが善に遷る根本であるといつて、其の又過を知るには、人の諫を聞くを必要とすることとする事を順次に說いたのである、讀者諸君もこの益軒のいつて居ることを信じて、學問をして行けば、立派な人物となることが出來る、たゞ坐上の空談で、學者の四角張つた說法だと思つて、馬耳東風に聞き流す、いや讀み棄てゝは、益軒のいふ惡事多き中の最も大なる惡を犯したものとなる、故にこの文によりて、文章の順序を知るとゝもに、學問の順序を知つたな

らば、其の効能は、豆藥の効能書のやうに並べずとも、實際の効能が直ぐに現はれるであらう、

永田德本

永田德本といふのは、人の姓名であるが、この人の事を書くのであるから、姓名を題としたのである、詳しいことは、本文を讀む内に解るが、この姓名は、ナガタ、トクホンと讀むので、訓讀するのではない、

此の文は、本朝傳記といふ本に出て居るのである、面白い事柄であるから、こゝに解釋して示すことゝしやう、文章の上からいへば、さう大したものではないがたゝ事柄が面白いから解釋するのである、

德本は三河の產なるが、久く甲斐に住みたるを以て、甲斐の德本と呼べり、氏を永田號を乾堂と云ひ、醫を以て業とせり、夙に富士及び木曾の山中に入りて藥を採來りて、これを患者に用ふ、されどその用方、世の常ならざりければ、人之を知ること能はざりきとぞ

〔摘解〕產は、出生のことであるから、三河の產といへば、三河の國で產れたといふことゝなるのである、○氏を永田號を乾堂と云ひは、氏を永田。と。いひ、號を乾堂と云ひと。かくべきを、上のいひを略したのである、何故なれば、下に、云ひ、とあつて重複するからである、○業は、家業營業の業で、早くいへば商賣のことである、併し商の字を付けると妙に思ふだらうが、生活をするための仕事である、○夙には、早にといふこと、人のあまり行きもせぬうちからといふことで、疾にからといふこと、俗にいふトックニからといふことである、○採來りては、取つて來てといふこと、○これをは、其の藥をといふこと、これといふ代名詞は、藥をさしたのである、○患者は、病人をいふ、病氣を煩ひ患ひて居るものといふ意味から來たのである、○されどは、さうであるけれどといふことで、ダガとでも、クレドモとでもいふ語である、○用法は、用ひ方といふので、つまり今の處方のことである、○世の常は、世間の平常といふ字で、だれでもする普通一般といふこと平たくいへばナミ〳〵といふこと、○ければは、カラシテといふ語である、○きは、過去を表はす助動詞である、何々であつたとかいふタの意である、○とかは、といふ話であるといふときに用ふるのである、俗にいへば、何々だトサアといふトサアに當るのである、

〔通解〕 德本といふ人は、三河の國の產であるが、久しい間甲斐の國に住んで居るものであるから、甲斐の德本と呼んで居る、氏は永田といつて、乾堂と號して、醫術を業として居た、この人疾から富士山や信州の木曾山などの人も行かない處へ行つて、藥になる草などを取つて來ては、それを病人に飲ませ用つて居たけれども、其の處方が普通のとは違つて居るからして、だれもその處方や何かを知ることが出來なかつたといふことである、

〔文法〕 德本の生業を叙べたのであつて、一小段とする、

德本、常に藥賣る事を業とし、藥籠を擔ひて、甲斐の德本、一服の價十六文と呼びつゝ往來せり、この藥を服する者は、いかなる沈痼癈疾も、癒えぬはなしとて、大に人に重せられぬ、

〔摘解〕 藥賣は、藥を賣るといふことで、をといふ豆爾波を略したのである、○藥籠は、藥を入れる物である、今でも富山の反魂丹賣りの背負つて居るのと同じである、○擔は、カツグとも讀むが、背負ふことである、○一服は、一度飲むだけをいふ今でも藥屋では一服と云つて居る、○價は、値段のこと、○服するは、飲むこと、○い

かなるは、どんなといふこと、○沈痼癈疾は、持病でなほらない病氣をいふ、不具にでもなつて仕舞ふやうのものをいふ、癒病、梅毒肺病、などいふ類を指すのである、○癒えぬはなしは、なほらないものはないといふこと、癒えぬは、イエヌと讀む、○とては、といふのでといふこと、○重せられぬは、人から敬はれたといふことである、

〔通解〕 この德本といふ人は、平常は、藥を賣る事を業として居たものであるから、藥籠を背負つては、甲斐の德本、一服の値段十六文といひながら、彼方へ行つたり、此方へ來たりして、往還を歩いて居た、ところがこの德本の藥を飲むものは、どんな重いなほらない病氣でも、癒らないといふことがないといふので、大居人々から敬はれて居た、

〔文法〕 德本の藥賣る樣子を書いたのである、これを二小段として、一小段と合せて第一大段とする、德本の出生生業、平生の行事を叙べ、世間の評判をも併せて叙べたのである、これで德本といふ人のことも、大抵分つたから、次から生きて居る內にあつた事柄を少しく書くのである、德本といふ人はどんなことがあるか

といふと、次の通りである、

德本、江戸に來れるをり、將軍恙ありて、諸の侍醫藥を進めたれども驗なかりけるを、或人の薦にて、德本の藥を飲みて、忽に快癒せしかば、將軍大に之を賞して、重く物を賜れるに、德本は十六文を受けたるのみにて、その他の物は、一切辭して納めざりき、

〔摘解〕 をりは、折で、時といふこと、○恙は、病氣のこと、一体恙といふ字は、昔し旅をするとき、宿もなく行く先〳〵で野宿したものであるからそれがために、毒虫があつて、身を害されることがある、その毒虫の名であるといふ說があるし、また恙は憂といふことで、心配する意味で、病人を患者といふのと同じに、憂といふことで病氣のことにするといふ說もある、こんなことはどうでもよいが、たゞ病氣のことゝ知つて居ればよろしい、○諸は、いろ〳〵、多くすべてといふこと、○進は差上げること、下のものから、上のものに差上るのをいふ、○どは、反語でけれどといふこと、○驗は、効驗のこと、即ちキヽメといふこと、○けるをは、たのをといふこと、○薦は、今俗にいふ、誰々にスヽメラレテ何々をしたといふ、スヽメの義である、○忽は、直きといふこと、○快癒は、全快のこと、病氣の平癒したのをいふ、○かはは

からといふこと、○賞しては、御褒めになつて御喜びになること、俗に御褒美といふこと、○重くは、大層といふこと、丁寧の意を含んで居るのである、○一切は、スツカリといふこと、俗に「ソンナ事には一切構はない」などいふのと同じである、○辭は、ことはりすること、○きは、過去を表はす助動詞で、何々しなかつたのたと同じ意である、

〔通解〕 德本が江戸に來たとき、德川將軍には御病氣であつて、多くの御傍に付き添ひて居る醫者などが、いろ〳〵の藥を差上げたけれども、少しも其のきゝめがなかつたのを或人が、德本の藥がよからうとすゝめたゆへ、其れを差上げた、そこで將軍がそれを御飲みになると、ちきに御病氣が御全快となつたから、大層喜びになつていろ〳〵と御褒美物を下された、ところが德本は、藥代として十六文を受け取つたばかりで、その他の物は、一切ことはりいつて納め取らなかつた、

〔文法〕 これは德本の藥が効能のあること、性質の有樣とを事實で示したのであつて、第二大段とする、前段の「甲斐の德本一服の價十六文」とあるのに應じて十六文を受けたるのみにて云々といつたのである、

將軍ます〳〵德本を重じ、强ひて德本に、欲する所を言はしめしに、德本答へけらく、かく强ひたまへば、申し候ひあむ、余が友に家なきもの丶候ふ、一所の土地と家とを賜りなば、いとも辱く存じ候はむと云へるにより、甲斐の山梨郡の內なる一區に、金若干を添へて賜りにければ、德本厚く謝して、土地も金もすべて之を彼の友に與へて私せず、その身は、もとの如く藥を賣りありきけり、

〔摘解〕 私せずば自分獨のものにしないといふこと、

〔通解〕 そこで將軍は、ます〳〵 德本を重く信じ給ひて、無理に何が欲しいかいへと言はせたときに、德本は、この通に無理にたつてと仰せられるならば、申し上げましせうが、實は私の友人に、自分の住むべき村家もない、哀れなものが御座りますから、何處か一ヶ所の土地と家とを下し置かれたならば、此上もない有難いことゝ存じますといつたので、甲斐の國山梨郡の內の或一區の土地に金をいくらか添へて下されたから、德本は厚く御禮申して、土地も金も、みなその友達にやつて、少しも自分のものにしない、そこで自分は、もとのやうにまた〳〵藥を賣り歩いて居た、

德本、後に甲斐に來り、程なく信濃に赴き十四年ばかり經て、復歸來り、甲斐にて沒せり、その墓は、今尙ほ雨宮作左衛門が持てる、葡萄畠の內に遺れりとぞ、

〔通解〕 德本はその後甲斐の國に來て間もなく信濃の國に赴き、十四年ばかり經てから、また甲斐に戻り來て、甲斐で沒した、その墓は今でも、雨ノ宮作左衛門の持て居る葡萄畠の內に遺つて居るといふことである、

土佐日記

いまより土佐日記の解釋をしようそうしてその方針はなるたけかんたんに、うゐまなびの輩に此日記の文義をしらしむるを主旨として其言句は現今ひろく世に行はれ、通し易き辭を用ゐますこの日記は他の物語ぶみなどに似ずことばすぐれて、みやびやかに雄々しく書きなしたる文であるから昔より今日に至るまで弘くもろ〳〵の學校の教科書に用ゐられてあるのである

此書は記の貫之朝臣が土佐の國守たる任期が過ぎ滿ちて京都へ歸へらるゝとき其出立より京都へ着するまで途中にて何くれとなく書き付けられたる日記